
彼らの遅すぎる青春

mogittimogimogi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らの遅すぎる青春

【Nコード】

N7712Y

【作者名】

m o g i t t i m o g i m o g i

【あらすじ】

世界は技術革新と共にハイテクに、便利になった。それと同時に『異能』と呼ばれる特殊な能力を持った人達が誕生してきた。霊が見えるもの、心を読むもの、暗闇でも目が見えるもの。

ただと俺はそんな人達とは関わらず『常識』的に過ごしてきたつもりだし、これからもそうするつもりだった。【超越者】と呼ばれる姉の気まぐれでこの学園に入れさせられるまでは。

一人の普通の少年と、四人の最高ランク5の異能が遅すぎる青春を

求めてどたばた騒ぎ。VRMMOに海に山にデートに異世界に！巻き込まれ系主人公のSFファンタジー・・・になる予定。

なまあたたかくぬるぬる読んでくれるとうれしいです。
感想でびしばし書いてください。

VRMMOや異世界転生物メインではなくあくまでSFになる予定です・・・あくまで、ね。

超絶ネタバレキャラ設定かきかき（随時編集）

超絶ネタバレキャラ紹介

本編を読んでないのなら読まない方が的な事をかきまくる予定

本編には一ミリも書かないような裏設定を中心に乗せる予定なので、
ネタバレおっけーな人のみ見た方が。

平気で本編とは全然違う設定になったりする予定

目指せ最強中二病

.....

・ ・ ・ ・ ・

- - メインキャラ - -

上村 圭 : 男 : 15歳

・ 平凡高校生。姉が能力者のため、能力者に対する特別な差別は特になく、つきあい方も心得ている。自分の『常識』を守ろうとしてスルースキルを磨いてきたが、学園に転入する事となり、覚悟を決める。これから特別な能力を身につけたり、誰かを救ったり、誰かの英雄になる事はきつとない。

・ 両親はおらず、上村 沙紀が女手一つで育ててきたと『思い込まされている』

・ 上村 沙紀が異世界を冒険中に拾った浮浪児。異世界にて誕生し、異世界にて幼少期を過ごした。物語の現世に現界するにあたり記憶を消去。芯となる人格だけを残し姉である沙紀の記憶を移植された。なので小さい頃から姉と一緒に過ごしてきたと『思い込んでいる』。昔ゝしたとか前はゝだったとか彼の記憶をたぐるような描写は、そのまま姉である沙紀の記憶という事になる。だからといって、やは

り特別な能力は特に無い。ただの人間である。

ちなみに異世界での彼のパラメータはHP50にMP30のレベル1である。

・普通の人間でありながら、異世界出身の彼の電磁波を、鬼谷は不思議がつているが、ちよつと変な電磁波を放つ人で済ませている。

・異世界うんぬんは多分設定を生かせず終わりそうな予感ばりばり。

志貴崎 桜：男：15歳

・脳のリミッターが外れている【異常者】。筋肉を自在に操る事ができる。脳のリミッターが外れているだけなら、能力としては数人いるが、彼は常人の数倍強靱な肉体を持ち、筋肉、骨、血液どれをとっても規格外な存在となっている。彼を初めて見た科学者は【宇宙人】だと本気で疑った。事実、彼は『人類の突然変異である』という仮定の下に科学的検証が行われてる最中である。

・二つ名は【宇宙人】【新人類】【剛力】等

・過去の負傷により右手を人工筋肉で補完している。そして摘出した筋肉はいくつにも分けられ日本の各地の研究施設へ転送されて嚴重に封印され、研究されている。

・体の至る所にチップが埋め込まれており、体のパラメーターを常に監視されている。異常が認められた場合はすぐに病院へ搬送されるように、常に彼の身近な病院にドクターヘリが待機されるように配慮されている。それと同時に彼は体を『使用』して研究データを国に送る事により援助を受けている。

・異常な精神力、環境適応力を持っている。VR環境下にて一ヶ月のサバイバルを『常人の筋力に設定』された状態で生き抜き、その時は蛇、牛、象等を狩り生き抜いた。これにより彼は異常者としてだけではなく、一人の人間としても軍人としての適性があることが証明された。

その時は科学者がおもしろがって軍人育成プログラムをロードした所、志貴崎の「飽きた」の一言にて彼の軍人育成教育は中断されてしまった。

・常に大量のカロリーを消費している。特別に処方されるスティック状のクッキーを食べていれば常人の食事の間隔で事足りるが、どうしてもおなかが空きすぎてギリギリにならないと食べないようにしている。理由は「あんまりおいしくないから」。お金に困らないので基本買い食いである。

・常人離れた新陳代謝により酔わない。

野谷 卯月：女：16歳

・脳のリミッターが外れている【異常者】。視野に入った物を全て認識する事ができる。遠くの物も正確に認識する。驚異の動体視力により、彼女にとって世界は常にスローモーションのように感じている。しかしそれを脳が処理する時の負荷により反応がワンテンポ遅れてしまう。

・リミッターを『付ける』事もできる。

・小柄、ショートカットの女の子。

・VR環境下では肉体から脳が解放されるため、彼女の現実で起こりうる不備から解放され正確無比な動きをすることができる。

・二つ名は【鷹の目】【VRの妖精】

・彼女はVRに異常な適性を持っており、ネットワーク上へ他の人が無理な深度まで『潜る』事ができる。彼女独自の世界観としてネットワーク世界を捕らえることができ、彼女にとってはネットワーク上のあらゆるセキュリティは意味をなさない。だが、かなりの深度まで『潜る』必要がある。自身を1と0の集合体にまで完全に判別する所まで潜り、ネットワークをくぐり抜けるという実験中に自分を見失いバックショックを受けた。

その際に脳の一部が損傷。これが彼女の目の異能となって現れる形となった。つまり彼女の【鷹の目】は後天的な異常で、VRへの驚異の適性は隠匿の所となっている。

この事件以降、一定以上深く潜る事に彼女は強いトラウマを感じるようになってしまう。それでも彼女以上に『潜れる人間』は出てこないだろうと言われている。

・彼女は脳にチップが埋め込まれており、そのデータは日本各地の研究施設に送信されている。その際に暗号化されており、その暗号を解く事ができるのは彼女がPCに『潜る』事でしか解除できない通称『NOYA key』により保管されている。国からの要請によつてのみ彼女を施設へ呼び出す事ができる。その際、最大半年彼女のデータを閲覧し研究する事ができる。研究期間が過ぎると『NOYA key』が書き換わり、また彼女を呼び出す必要がある。研究期間中施設を出入りできるのは彼女以外誰もおらず、施設を出ようものなら容赦なく射殺するよう許可が下りている。

その研究結果は、日本を世界一のVR技術先進国としての立ち位

置を支える最重要要素となっている。

・彼女の使用するPC機器はそれらのデータの計測用に組まれた椅子と一体型の特注品で、彼女のあらゆるデータを常に収集している。
「・・・・夏は、・・・・とても暑い」と文句を言われたため、エアフローを改善し常にそよ風が流れるように再設計された経緯がある。設計者は「名付けてmk2」だと黒いボディにしたが、彼女としてはライムグリーンにして欲しかったようである。

山城 ミキ : 女 : 15歳

・幻術の異能者。彼女は指先から息を吐く仕草まで、その全ての動作が幻術としてのトリガーとして相手に働きかける。依存性は無く、彼女の幻術にかかっている”間”、彼女の存在を「今までそうであった事実」として認識するようになってしまった”ということになっている”。ちなみに催眠術とはまた違い、彼女は幻術によって命令する事はできない。あくまで「幻術によって逆らえない存在だと認識させる」事ができるだけである。対象にその「存在」をはね除けられるだけの信念等があればその幻術を突破する事はできる。

テレビやメディア等によって彼女の幻術が伝播する事は無い。本人を肉眼で見た時にのみその効果は発現する。

・親との血のつながりが無い。物心ついたときから、「両親の娘」として演技をして自分を『育てさせ』ていた。この事実は彼女を両親への強い負い目と感じている。この事から、完全に相手を幻術に落とし込み、「事実を確定させて相手に固定化させる事」ができると分かる。彼女の名前に漢字がないのは、起源が無いため。両親は幻術により彼女を自分の子供だと認識したが、両親は彼女に何も望まなかったため、その名前に意味を持たせる事ができなかった。そ

うして付いた名前が『ミキ』である。

・芯となる人格はあるが、本当の自分がどういった性格なのか、物心ついたときから演じていた彼女自身分からず、常にその時に応じた性格を演じてきた。幻術はどういった性質の性格を演じるかによってその力に強弱を付ける事ができる。

・皆の前では『ツインテールの元気いっぱいの女子高生』を演じている。また、友好関係の証として、その事実は皆に知らせてある。この時の彼女の幻術としての効力は、見た者に『ちよつと目が離せない』程度に感じるだけである。

・圭を要所要所でいじってくるが、『そうしたほうが年頃の女子高生っぽい』と考えているため。実際圭もいやいやよな反応のため間違いでは無いと考えている。ちなみに圭を女装させようとするのは完全に彼女の趣味である。・・・著者の趣味じゃ絶対ないんだからね！

・演技は単純に好きである。

・今の五人の関係を大切にしたいと思い、幻術を最大限に封じている。志貴崎に対しては限定解除する事が多々あるが、空気を讀んで『そうした方が私らしい』と考えた結果である。なりゆきでこのメンツのお母さん役となった圭の許可無し、もしくは仲間のため以外では幻術を使用しないと決めている。

・本当の意味で異性関係が理解できないため、恋愛感情を持たない彼女にとって『人間』は自分とは『別の種族』だと感じている。

・自分がどこから来たのか、何者なのか、その事実を知る事に強い

恐怖心を持っている。

鬼谷 凧：女：16歳

・電磁波の超能者。二つ名は【感じる者】

・人や人であったものの電磁波を感じる事ができる。良く勘違いされるが幽霊は見えない。・・・実際は電磁波を持つ物なら全て認識することができる。物体は例外無く電磁波を発しており、それは色や堅さ等の情報が含まれている。彼女はそれを感じ認識することができる。

・電磁波という性質上、動いている物の感知は苦手である。彼女が働きかけて感じた電磁波は、その瞬間の位置情報に過ぎないため、その次の瞬間どこに移動したのかは、もう一度感じ取らなければいけない。それを繰り返し返すことにより時間軸上の周囲状況を読み取る事を可能にしている。

・落ち着いた性格をしており、メンツの中では基本会話に参加せずのんびりしている。

・周囲の人の考えを『感じる』事により、それを演算、解析して超短期的な『未来予測』をする事ができる。

・彼女自身他人のプライベートをのぞき見るようなこの能力を嫌悪しているため積極的に使おうとしない。

・彼女のその能力のために、警察機関に協力することが多いが、幼

少期、まだ能力が未発達な時期に殺人犯の虚実を見破るために記憶を覗いた際、殺人犯の理念思想に融解。精神を病んでしまった。その際に髪の色素が抜け銀髪となっている。

また、この自体を引き起こしたのは異能者を特別扱いする国に対して不満を持つ、利益主義のキャリア組が解決を急いだために引き起こした事故であった。そのキャリアは後日行方不明となっている。

・精神が病んだ彼女は能力を制御する事を『放棄』。近づいた者へ強力な電磁波を放出し脳を破壊するという『無差別精神汚染兵器』と化した。その際半径3kmの全ての生命が生きる事を止めた。国が彼女を廃棄する決定を下す直前、彼女の母が呼びかけ沈静化。経過を見る事となった。

・小学校時代を精神病棟で過ごし、立ち直った後、自らの意思でまた警察へ協力する事となった。

・彼女に他人の記憶を読ませる事はタブーとされ、強要した場合は射殺対象となる。自らの意思により記憶を読む事自体は禁止されていない。

・脳にチップが埋め込まれており、常に脳の使用率を初め色々な情報をモニタリングされている。脳が異常な使用率を示したときは、上空を飛ぶ日本の所有する軍事衛星最低二台が彼女に向かって照準を合わせ緊急監視体制へと入る。

・事対人への危険度では『精神汚染兵器』として彼女を見た場合、4人の中で彼女が一番危険視だとされており、監視の目は一番厳しい。が、彼女は気にしていない。

- サブキャラ -

iris

・野谷のPCに常駐するサポートAI。

・初登場時はアバターは特に設定されていない。

・現在は『部屋』に常駐し皆と仲良くやっている。

・野谷の研究結果から生み出されたAIであり、野谷は彼女の事を『もう一人の私』と認識している。

iris自身も野谷を自身であると同時に母であり、姉妹であると認識している。この認識は絶対に変わらない彼女の原則として固定されている。

・本当の意味での自律型AIとして開発された。その方法とは膨大な数の演算機へ、いくつものパルスを導入。その無為無味な反応の中で『生命が生まれるのを待つ』という物だった。それはあたかも卵子に精子が群がるような物であり、その後も思考パルスが選択をし続けていく中で「1と0」以外を選択するのを待つという終わりの見えない研究によって誕生した、まさに『命を持ったAI』である。

これはPCの中に『潜る』事ができ、独自の世界観を持つ野谷の力が必要不可欠であった。

その後、当時最先端技術であったAI「Alice」に移植された彼女は野谷が常に教育することにより自我が発芽、「iris」という名前を自分自身で付けた。

・プロトタイプAIとして、いかなる制限も彼女には無い。逆に現在彼女にどうやって制限を付けるのかが研究の対象となっており、彼女をどうやってコントロールするのかがテーマとなっている。

・彼女をコピーするとまもなく自我が崩壊するいわゆる『ゲシユタルト崩壊』を起こす。この事により彼女は真に精神を持っている事が証明されている。もっとも、それは彼女が自らのプロテクトにより保護しているだけであり、自身をコピーしてお互いを区別する事は実は可能である。

・彼女は自身が攻撃されたり壊されたりした時のために世界中のデータサーバーに自身のバックアップを独断で持っている。

・彼女が精神体である事実により、irisと同じ手法によって新しいAIを生み出すことは新しい生命を生み出すことに他ならないとして、国はこの研究を現在凍結している。

・彼女を野谷と同等、もしくはそれ以上のネット・PCへの適合性を持つ異能者として判断するかどうか、科学者は判断に迷っている状態。

・国は彼女に『人権』を与えている。これは野谷の希望である。

・彼女はこの世を混乱させないと国に宣言し、またそのログも国に献上する事を誓っている。そしてそれを自身への制限とした。これにより彼女が暴走する事はないとされている。

・基本的に野谷を初めとしたメンバーには従う。

・いらぬやつかいをして野谷に怒られたりするが確信犯である。

HALLO POINT設定

主達が遊ぶことになるゲームの細かい設定等を書こうと思います。
ゲーム設定としてこういった物を考えました。

もろCSとTCとETあたりの設定って感じですね。クラン戦メイ
ンに書いていこうかなと思います、こういう形となりました。

かなり細々と書いたのと、今後の話で再度話に出ると思うので読み
飛ばしても大丈夫かと思われます。

・21世紀準拠の軍事装備を用いた軍とテロリストの都市テロ防衛
戦をテーマにしたFPSタイトル。軍を「カウンターテロリスト（
CT）」テロリストを「テロリスト（T）」と区別している。

Tは爆弾を設置するために策を練り（攻撃）、CTはそれを阻止
するために網を張るの（防御）が基本的な戦法である。

一つのマップには、爆発対象となるポイントが二カ所、AとBが
あり、Tはどちらに爆発物をしかけるのか策略を巡らせる（チーム
に爆発物を所持できるのは一人だ）。一群となって特攻殲滅するの
か、ブラフを織り交ぜ敵を混乱させるのか。CTはそれを予想し待
ち伏せ（キャンプ）し、お互いにコミュニケーションを取りその時
々によってフォーメーションを組んで相手を消耗させていくのであ
る。

・公式大会ルールでは5：5に分かれてお互いに勝敗を競い合う事
になる。

三回勝負ルールの場合、「AチームCT：BチームT」にて3：
0でAチームが勝利したとして、次はお互いのチームを入れかえ「
AチームT：BチームCT」としてまた三回勝負となる。この時B

チームが一度でも敗れるとAチームが総試合の4回勝ったことになりAチームの勝ちとなる。もしもAチームもBチームも3：3でドローゲームとなった場合、スコアをリセットして再度同じ勝負をする事となる。

このルールを「オブジェクティブ」ルールという。

公式大会ではドローゲームになったあと再度ドローになった場合、それはメレー合戦にて決着を付けるというルールを取っている。

・メレー合戦（M E L E E）、通称メレーは、お互いにナイフ一本だけ装備した状態で斬り合うデスマッチの事で、FPSというジャンルが確立され、このタイプのゲームが出た時からある神聖な儀式とも言える合戦である。

行われる場合は公式ルールでは二回。一番初め先攻後攻を決めるために行われるメレーマッチと、試合結果がドローに二回連続であった場合に行われるドローマッチである。

5：5で行われるメレー合戦は至近距離による近接戦闘となり、ギャラリーもこれを目当てな場合が多い。

・詳細なカスタマイズが可能である。服装から防具、銃器の各種オプションから携帯するフラグまで。各種装備には重量や動きにくさの概念があり、大きな装備を装着するとその分動きにくく、軽い装備にするとその分俊敏に動けるが防御力がなくなる。

・ほとんどの概念がリアル指向となっている。弾はちゃんと構えなければならぬ、ダメージも回復しない。腕にダメージを受けると銃を支える事ができなくなり、足を撃たれると歩くことすらままならない（ゲームなので、完全にプレイ不可な状態にはならない）。リロードする場合も「15/30」とまだ15発残っている状態で弾倉を捨てると、その弾も一緒に廃棄されてしまう。ちなみに携帯できる弾倉も基本は二つ（拡張装備によりさらに二つ装備できるよう

になっている)。この辺の戦略や技術、選択枝がこのゲームの人気の一因ともなっている。

・建物の外壁は登る（クライム）事ができる。が、もちろんそれ相応の技量が必要となる。システムアシスト支援にてある程度自由に誰でも登ることができるが、重装備の人はアシストがあっても難しい。

・爆発物が設置された場合、けたたましい警報が鳴り響き爆発物が設置された事が全てのプレイヤーに伝わる。爆発物が爆発するまでの時間は40秒。CTは爆発物が爆発してしまう前に解除しなければならぬ。その所用時間は5秒である。CTは迅速に安全の確保をし、爆発物の解除が間に合えばCTの勝利となり、爆発されてしまえばTの勝利となる。この時の緊張感がこのゲームの最大の魅力となっている。

・爆発物のやりとりをせずとも、相手チームを殲滅してしまえばそれで勝利となる。それを狙った奇策^{チース}で、開幕と同時に敵陣地に突入、相手を殲滅するという作戦ももちろんアリである。

・上記ルール以外にもチーム同士で相手を殺した数を競う「チームデスマッチ」等、いくつかルールはあるがおまけ程度の認識となっている。

・これだけ高難易度のゲームにかかわらず人気なのは、上級者と初心者を一緒にプレイできるように配慮された各種システムアシストのおかげである。

オートエイムアシスト：構えて狙えばある程度の誤差をシステムが補助してくれる（その代わり発射から着弾までタイムラグが発生する）

匍匐前進、しゃがみアシスト：それぞれ銃器を構えながらの移動が難しいこれらをシステムが補助してくれる。

クライムアシスト：すでに上記で記したが、壁面登りをアシストしてくれる

リロードアシスト：弾倉を排除した際に自動でリロードをしてくれる。手動でのリロードがどうしても慣れない人のためのシステム。このアシストをオンにしている人は意外にも多い。だが、二秒間移動以外の動作ができなくなる。

他にも色々初心者用のアシストがある。

・また、完全にリアルというわけではなく、ゲームとして成り立つようにユーザーGUIも洗練された物が採用されている。

ゲーム画面には自分の部位HP、マップ、残弾、残兵、時間等が随時表示されている。

マップ上には味方メンバーが指示を出すアイコンを表示させたり文字や絵を描写する事が可能。

また、敵を発見したさいも、数秒目視し続ければマップ上にその敵を表示させることができ、その敵はマップ上で全ての味方が確認することができる。

・お互いの通信ボイスチャットは死ぬことにより音信不通となる。

・マップにあるオブジェクト破壊は不可能。ロケットランチャーのような対車両兵器も登場しない。

プロローグ的なあれ

彼は両手を挙げて喜ぶ振りをした！この世界！！広大な世界！！見よ！俺の成し遂げた偉業を！そして見る。左を、右を、後ろを！前を！！下を！！360度！雲の上である。俺は雲の上にたっている……！！

がくりと地面に伏せる。体を覆う全ての衣服を脱ぎ捨てて涙を晴らし叫びたい。嗚呼、世界はかくも美しい！！だが、涙は出ない。それだけの水分はもうない。うなだれ顔が赤くなるだけである。服を脱ぐと凍え死ぬ。ここはアルプス山脈。地上4478mのマッターホルン山の頂上である。長かったここまでの旅路を思いだし彼はただただ震えていた。そのまま一分程度、全てをかみしめるように震えていた。

「……もういいだろう」

そういつつ彼は立ち上がると彼を見ていたたった一人の観客の電源をoffにした。

高校卒業記念に上ったアルプス山脈。マッターホルン。なるほど。たしかに美しい。しかし、こんなものか……。

右手でビデオカメラを弄びつつ、それまで彼を包んでいた壮大な景色に一切の感慨も泣く彼は山脈を降りだした。さあ、早く降りないと間に合わない。彼は無線機を取り出して下山の指示をスタッフ達に出した。

彼にとって山は確かにすばしかった。しかしそれでは得られない物を彼はここに求めてしまった。そうここではない。ならば行かねばならない。『スタート地点』へ。

「二週間以内に日本に戻るぞ。間に合わないからな……」

彼は両手をぶらりとたらしめてぼけっと立っていた。両目はどこにも焦点の合っていないようで、しかし全てを見ていた。

砂塵の舞いそうなほど寂れた住宅街。アメリカのどこかかもしれないし、イスラエルなどの昔話に出てくる紛争地帯なのかもしれない。だけど彼にはどうでもいい。少なくとも彼が慣れ親しんだ町ではないどこか。微動だにせず人気のない寂れた住宅街で彼は何かをただただ待っていた。

自分の呼吸の音とそれに併せた衣擦れの音すら彼には騒がしい。タイムアップのカウントが近づく。「おちつけ。相手も焦っている」自分自身を落ち着けるように一人つぶやく。

瞬間、目の端に動きを感じる。

見つけた……!!

腰をひねりながら右手にぶら下げていた自分の物を振り上げ左手で支える。弾は装填済み、セーフティーも外してある。吸い付くようにスコープが対象に照準を合わせる。『スナイパーライフ』遠くの敵を殺すどおぐその程度の知識しか彼にはない。だがそれでいい。扱い方さえ間違わなければほらこの通り。

音が先か赤い花の咲くのが先か、判断に迷うタイミングで対象に花が咲く。恐らくあれで最後の一人。

「you team win」

無機質な勝利メッセージが彼の目の前に広がるが彼はいつもの癖でささっとメッセージを解除する。これで世界三位になったのか……。感慨は薄い。それは少しはうれしいけれど、なんというか、こういうのじゃない……。

「おめでとうケット！！すっげーな！！マジかよ！！しんじられねー！！これで世界三位だ！！それで明日なんだけd・・・」

耳に仲間の声が聞こえる。勝った事に興奮をかくせないようだ。

「それじゃ、俺そろそろ落ちるから」

「え・・・」

乱暴にメニューから接続切断を選択。ゲーム終了。今まで高負荷な処理をしていたであろう背後の機械からのファン音が小さくなる。身体リンク切断。ゆつくりと体を起こす。

明日は彼女にとっての一大イベントがある。彼女にとって何よりも大切な生活の始点が明日にはあった。

「明日から・・・」

スポットライトが当たる。彼女を中心に真円にぽっかり浮かんだ光の輪。

彼女の手の届く範囲、きっかりそれに計算された光の輪である。左手をゆつくりと上げる。右手に視線が集まるのがわかる。そしてゆつくりと下ろし胸の上へ。右手でスカートのフリルをつまみゆつくりと腰を曲げる。

「ありがとうございました」

これで彼女の全ての日程は終了した。会場を割れんばかりの拍手が彼女を包む。これこそが彼女の成功の証だと言っていていいだろう。たかが高校生の小娘一匹。箱は小さい

が世界中を回って一人芝居を行つた。彼女は体全てを使つて全てを表現した。彼女は彼女であつた時もあつたし彼でもあつた。そして彼らでもあつて我々でもあつた。

最期の地はラスベガス。一時寂れたとはいえ息を吹き返し、今では昔のように光きらめくカジノ都市として昔と同じ息吹を感じさせている。

そんな中で彼女は演じた。小さな小さな箱の中で。指を折ればその指先に妖精感じた、息を吐けば草原を感じた、ひとたび声を出せばもう彼女は彼女ではなくなり、一人の老婆が姿を現した。誰一人として身動きができなかつた。瞬きすら惜しい。

『まるで幻術のようだ』『詐欺でも暗示でも魔法でもなんでもいい。もう一度彼女の演技を拝みたい』

彼女の箱は小さい。100名入るか入らないかの小さな箱。だが見た人は皆涙を流して、大枚を叩いて、それを見た。そしてその夢ももう覚めた。

彼女はゆつくりと舞台を降り、拍手に背を向けた。その表情は今までとは別。どんな表情も顔には張り付いていない。その顔はただの……。

彼女はさつと表情を貼り付けてマネージャーに笑顔を向けた。その顔は女子高生のおどけなさそのままである。彼女は急いでいた。今までの全てを取り戻すために、始まりに立たなければいけなかつた。

「さ、日本にかえろ」なんつたつて来週は……」

しん……と静まりかえつたプレハブ小屋の中でか細い声だけが

響く。数名の人間が一人の女性の指先に視線を集中させている。あたりを覆う圧倒的なプレッシャーは彼女がただならない物だと容易に想像できる。たとえどんな異能を身につけていなかったとしても。

「・・・・・・・・ここに・・・・・・・・ここに・・・・・・・・」

彼女が指さす先にはテーブルに広げられた一枚の地図。あたり一体100km四方を切り取った市街地図だ。そこを無造作に指で指していく。周りはざわめき慌てたようにその指が示した地点にピンをさしていく。

「ここに指が・・・・・・・・けど腕はこっちです・・・・・・・・。ここには携帯電話・・・・・・・・いえ、ボイスレコーダー？」

さらに指で指していく。そこへ周りの者がどんどんピンを刺していく。ピンク、黄色、青、白・・・・・・・・。

「えっと・・・・・・・・下水管の地図はありませんか？」

横で数枚の地図を抱えていた者が慌てたように新しい地図を広げる。

「ここに・・・・・・・・頭が引つかかっています。流れが速く・・・・・・・・ちよっと・・・・・・・・これは？埋まってる？」

その後も彼女が指を指す箇所ピンをさす作業が黙々と続けられた。途中そのプレッシャーに耐えられなかった一人が顔を真っ青にして外へ出て行った。他の者も背中が冷や汗でじっとりとしめついている。天井につけてる蛍光灯がブーン・・・・・・・・ブーン・・・・・・・・と五月蠅い。

と、彼女を覆っていたプレッシャーが一気に霧散した。

「終わりました」

一斉に周りが騒がしくなる。皆プレハブから飛び出して携帯で指示を出すもの、車に乗り込むもの、縁に乗り込むもの、地図を詳しく分析しはじめるもの。まるで時間が一気に短縮されたように錯覚する。

「お疲れ様です。今回も遠くからわざわざご足労いただき・・・」

「い、いえ！わたしもちよつと・・・お願いされたので・・・ちよつとよかつたというか・・・」

低姿勢で接する現場の監督らしき人に彼女はおどおどと視線を宙に浮かせている。腰まで流れるように伸びた彼女の白銀の髪がゆらゆらと揺れていた。彼女が変なのはいつもの事だし、あまり追求しても自分の常識がダイナマイトよろしく粉碎されるのが目に見えているので彼は何も聞いていないし見ていない事にした。

「・・・それで、今後の予定なのですがー」

「あのつ・・・あ、明日はちよつと用事がありまして・・・」

彼女は思った。私は変だから、違うから。そうやって今までできてきた。だけど、だけど変わらなければいけない。だってこのままだったらあまりにも・・・そうあまりにも自分は・・・。だからこそ。

「ちよつとしばらくお休みをいただこうかと思ひまして、もう私が居なくても大丈夫だと思いますし・・・それで明日は・・・」

なんとって・・・

「「「「「始業式だから」「」「」

一話 自己紹介をしよう？

世界はここ100年くらいで一氣に変化してきた。遺伝子工学の発達、クローン技術の解放、VR技術発明、シックスセンスの確立・
・等々。ちよつと昔では異能や超常現象、未来の技術だと想像の中でしか考えられなかった物事が一氣に俺たちの目の前に『常識』として現実の物として現れた。

だからといって100年前や200年前と、多分変わらずきつと俺たちの生活自体は変わってないと思う。クローン技術が公の場に解放されたからといってレトロ映画の『ジュラシックパーク』よろしく恐竜が闊歩する遊園地はできなかったし（なんか遺伝子はほとんど完全に残っていないとクローンとしては作り出せないらしいねあれって）、VR技術ができたからといって、今までPCにかじりついてゲームしてた奴らがそれにシフトしてただけで、特に少子化問題に拍車をかけるようなこともなかった。シックセンスなんて科学者がようやく認めたからといって、遙か昔から幽霊の存在なんて皆見える人には見えてただろうし見えない人はこれからも見えないただろうから「ふーん」って感じだった。

しかしやつぱりそれと同時に弊害というか例外が出てきた。超能、異常、異能を持った人々の誕生である。昔からそういう人々はいた。曰く「幽霊が見える」曰く「異常な動体視力を持っている」曰く「人の考えがわかる」曰く「ワンフレームの小足余裕です」とかとか。虚実ももちろんあっただろう。しかしあらゆる技術が進歩する中で明らかに強力なそれらの能力を持った人々が誕生してきた。もちろん世界中の国では、そういった人達を囲い込もうとする動きが活発になる。

もちろん俺の住む国日本も例外ではなく、幼少期から成年後まで一つの都市で囲い込みができるように、広大な敷地を持つ都市を設

立。本土から遠く離れたこの都市で、俺は生活している。

俺の名前は上村^{かみむら}圭^{けい}。黒い髪に若干茶色の筋の入った瞳を持つ生粋の日本人。身長若干低めだが平均値、やや童顔。高校一年生。俺は今自分の通う学園の二期始業式に参加中である。

バスケットコートが8枚ほど収容できるほどに広大な体育館には、小学から大学までの全校生徒がずらりと整列中である。といってもその数自体は500人つてところか。一学年30人いるかいらないかといった感じか？ここは異能を収容するこの都市唯一の異能専用の小中高大一貫の学校。現在はその広大な学園のトップ、学園長の挨拶中だ。白髪混じってはいるがまだまだいけいけナイスガイといった風貌に、中々カリスマを感じる。といっても体育館が広すぎるため大きなモニターに映した画面越しにみてるわけだが。

こういう前置きをする「おーいかにもお前ってなんかすげー能力でももってるの？なんかやってよ。」みたいな反応が返ってきたがまったくもって俺は常人である。平凡、ノーマル、平均値、標準。特にこれといった面白みのなにもない人間だ。

「どうしてこうなった・・・」

自分でも思う。場違いすぎる・・・。右隣を見てみる。なんか凄い筋肉むちつと制服からはみ出した人が居る。あ、見られた。

「なんだ？どうかしたか？」

「い、いえ！！何でもないです・・・」

こえーよ。何だよこの人。高校生かよ。昔のカンフー映画に出てきそうな顔してるし・・・。元は丸刈りだったのだろうか。伸び放題の髪を無理矢理整えたようだが、髪がつんつんと暴れ放題になっではいるが、ギロリと光る切れ目がものぐさというよりワイルドな風貌としての印象を強くしている。凄い筋肉だと認識はできるが

以外と線は細そうである。うーん。制服にあわねえ……。

「お前見たことない気がするな。一学期にいたか？」

「い、いえ……えーっと今日から入学……です……よ？」

やべーよすげーこえーよなんだよこれあと10秒睨まれたら俺ちびるぞ。というかあれかもっと畏まった方がいいの？これ。やべー対応間違えたかな。というかこの人明らかに異能者だよな……おれの学園生活初日にしてバッドエンドじゃないの？

「そうか。俺の名前は志貴崎^{しきさき} 栞^{もみじ}という。よろしく。そこに座っていると云うことは、同じクラスで授業を受けることになると思う。分からないことがあったら聞いてくれ。手を貸そう」

ぬうつと手が出てくる。……握手でいいのかな？

「え、あ、どうも。上村 圭と言います。ありがとうございます。しきさき、でもみじですか。四季咲きの紅葉とは洒落ていますね」
とりあえず良い人そうでよかった。志貴崎さんは俺の言葉に少しだけ口角を上げて「おれも気に入っている」とだけ言った。

俺も手を差し出して握手をする。ぎゅうつとかなりの握力にびっくりする。志貴崎さんの手はこつこつしており、よく見ると傷だらけだった。深く考えないようにしよう。

と、横から制服の袖を引っ張られた。ちょっと騒がしすぎただろうか。謝りながら左に向くとする。

「あー、うるさくてごめんなさい。」

「……いい。……私も初めましてただけ」

見ると小柄な女の子が俺の制服の袖を引っ張っていた。耳が隠れる程度のショートヘア。見ようによっては少年にも取れるが半開き

の唇からは何ともいえない色気を感じる。肌の色は白くちよつと生気がかけているようにも感じる。そして何と言っても特徴的なのはその瞳だ。キラツと光る瞳でも言うのか。見つめると吸い込まれそうな程に真つ黒で、彼女がどこを見ているのか正確に判断できなくなりそうだ。そしてスカートからのぞく細いふとももに一瞬どきつとしてしまう。こういう女の子が夏服でいるとなんとも肌寒そうだなーとか思っちゃうのを俺だけでしょうか？皆さん。

すつと手を出される。どうやら俺が今日からという話を聞いて挨拶をしてくれたらしい。俺も手を差し出して握手をする。先ほどのゴツい手とは違い華奢で細い手だ。

「・・・よろしく。私は野谷^{のやう} 卯月^{うづき}」

「上村 圭です。よろしくお願いします」

内心女の子との握手でときどきしてしまうが必死に冷静を装う。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

やばい話つづかねーよ。どうしようこの状況。しかしこう。本当見つめられると吸い込まれそうな瞳だな。なんとも居心地が悪くなってきた・・・・・・・・。

「ほう野谷も今日は来ていたのか。直接会うのは入学式以来じゃないか？」

そこで志貴崎さんが口をはさんだ。正直助かった。

「・・・お互いあまり学校・・・来ない、あと、ミキも来てる。」

「ほほう！山城もか。後で挨拶に行くとするか。」

「……ん」

それに野谷さんも答えるが、何とも違和感がある会話である。入学式以来？今日は二学期の始業式だから単純に三ヶ月から四ヶ月程度はこの学園の高等部に在籍していたはずだ。しかも確か高等部は各学年一クラスずつ。それにさつき志貴崎さんは『そこに座っているとすることは、同じクラスで授業を受けることになると思う。』と言っていた事から同じ学年で同じクラスのはずだ（志貴崎さんと同学年というのに改めて驚愕するが考えないことにしよう）。ここは素直に疑問を口に出す事にする。

「どういことですか？同じクラスで授業を受けてるわけじゃないんですか？」

「あー、俺たち二人は特別でな。いや、えーっと、あと四人ほど特別なやつが高等部にはいるんだが。それでー」

「……私たちは授業を受ける義務が……ない……」

むむっという感じで腕を組んであーとかうーとか言いながら説明しようとする志貴崎さんと端的に答える野谷さん。

「はい？」

話を整理すると、どうやらこの学園の中でも異能中の異能は授業に出る義務自体が無いらしい。異能者の中にはランクのような物があるらしく、それが一定を超えるとあらゆる研究機関や会社から色々な話が来る。そういったところへの協力をするために学園側へ休学届を出して休学し、そういった所へ行くわけだが、なんとこの二人はその休学届すら出さずにそういった所へ行けるらしい。チートか……。

「ちなみに俺は異常者にカテゴライズされていてー」

「い、いえ！また後で聞きます！」

頼んでないのに志貴崎さんが自分の能力の話をし始めようとしたので慌ててやめさせる。これ以上俺の『常識』を壊さないでくれ。

「・・・私も異常者」

「そ、そうですか。それも後で聞きます」

「・・・うん」

野谷さんも負けじ（？）と能力の話をしようとしたのでとりあえず中断させる。しかし二人そろって自分から『異常者』なんて言わないでくれ。知識としてはあるがなんというかサイコさんにしか見えなくなる。野谷さんは自分の話を聞いてもらうのが嬉しいのかうつすらと頬が赤くなっている気がする。なんとなく頭をなでたいかわいさがあるな。小動物系というか。妹がいるとこんな感じなのか。なんてなんて同級生に失礼な事を考える。

初めのうちはどうなるかと思ったが、なんとなくこの二人とは仲良くできそうな気がする。

そんなやりとりをしながらも始業式は結構進んでいたらしく、進行の指示により端の方からどんどん人が立ち上がり体育館を出て行く。

「んーあと少しここにすわったまんまかなー」

思ったことがをのまま口に出る。自分たちが移動するまでもう少し時間がありそうだった。

「そうですねー」

自分の何気ない一言にいきなり言葉が返ってきたのでびっくりして声のした方に振り向く。そこには銀髪の美しい女の子が立っていた。瞳の色や顔の造形が日本人の特徴をしているから恐らく日本人

なのだろう。しかし銀髪に負けず整った顔立ちをしている。体つきも野谷と同じ制服を着ていることから高校生だと思えるが、にしてはしっかりと出てる所は出ているみたいで大人びて見える。そういえば始業式始まる前にこの席に案内されたとき、この列の一番端に銀髪の人が座っていた気がする。自分の場違いさ加減に気が動転していて気がつかなかった。

びっくりした俺を見て彼女は「ごめんなさいね」と謝った。いたずら成功とでも言った感じで舌を出して。反則過ぎるだろ。

「貴方、今日からこの学園に入学するのよね？教室に案内するように先生から言われたんだけど」

「ああ、なるほど。よろしくお願いします上村 圭と言います」

「鬼谷 きたに なぎ 凧です」

静かに微笑む鬼谷さんにどぎまぎしてしまう。優しそうな雰囲気になんて柔らかい物腰。こんなきれいな人とお知り合いになれるなんて俺って幸せ者だなー。ここに放り込みやがった姉には感謝するべきかなーなんて考えていると

「おお、鬼谷も来てたか！」

「……久しぶり」

「あら。野谷さんとはたまに顔を合わせてましたが志貴崎さんは入学式以来ですね」

さっきと似たような会話が繰り返されてる現状に頭の中が真っ白になりそうです。

「あの、志貴崎さん」

ギギギギつと体の節々がさび付いたように動かしづらい。それにこの仮定を『事実』にする確認するのがたまらなく怖い。

「なんだ」

「彼女も『特別』なんですか？」

「そうだ。彼女は超能者でー」

仮定が事実になったと同時にさらに能力の解説も丁寧にしようとした志貴崎さんを必死で止めて、とりあえず俺の精神汚染を食い止めることに成功した。そんなあわわわしている俺を鬼谷さんがじつと見ていた。なんとなく探られているようにも感じる。

「えっと・・・なんででしょうか？」

「いえ、何でもありませんそろそろ移動しませんか？」

「？」

疑問は残るが彼女がなんでもないというのだから何でも無いのだろう。移動を促された俺は席を立ち彼女の後ろについていく。そして当然のように俺たちについてくる志貴崎さんと野谷さん。

「そついえば体育館から自分の教室までどうやって行けば良いのかわらんあ」

ぼけつとそんなことを言い放つ志貴崎さんに鬼谷さんがため息をつく。いやいやただけ学校来てないんだよ志貴崎さん。深く突っ込むと知らないことまでしゃべり出しそうなので突っ込まない。まだ心の準備が・・・。

俺たちの教室がある建物は体育館からいったん外に出て敷地をしばらく先に歩いた先にあった。小、中、高、大の教養棟が4つ、文化棟、技術棟、研究棟、それによく分からない建物と寮がいくつかがこの敷地内にはあるらしい。鬼谷さんの案内で高学棟へ、俺たちは皆一年生なので一階にある教室に入る。ちなみにワンフロアにつき4つほど教室があり、それが三階建になっており学年が上がるこ

とに二階、三階と上がっていくらしい。というわけで1クラスしかない俺たちの学年では一階の残り三つの教室は使わないことになる。現在は倉庫となっているようだ。

「貴方のクラスはここで、席はー」

「・・・私の横」

どうやら野谷さんの隣になるらしい。窓際の一番奥、教卓から一番奥の席に俺は座ることになるらしい。ちなみに鬼谷さんはだいたいの教室の真ん中、志貴崎さんは廊下側の一番前。なんというか皆『らしい』場所に席があるな。（俺の中のイメージではクラスの真ん中は委員長、窓際隅っこが目立たない子、廊下一番前がやんちゃ坊主といった変な偏見がある）

「そつか。よろしくお願いします」

「・・・よろしく」

野谷さんに改めてよろしくすると、照れてるのかちょっと下を向いてもじもじされると困る。あたまでなでしたい。

にしても、教室自体は馴染みのある普通の教室だ。至る所になんかうっすら傷みたいなのがついてたりするがボクハナニモミティナイ。とりあえずこれから俺はここで学校生活をするわけだ。まだまだ不安はある（むしろ不安しかない）けれどどうにかこうにかやっていけそうだ。

一話 自己紹介をしよう？

「今日から一緒に勉強することになります。上村 圭です。よろしくお願いします。」

お辞儀をする。無難にまとまったはずだ。趣味、好きな物、今はまっている物。うむ。無難である。誰も傷つけずこれからの生活に一切の問題も起こさない。すばらしい自己紹介であったと自負する！そもそも俺以外は全て異能の人々だ。きっと魔法が使えたり、忍者よろしく天井上から降りてきたり、夢の中に現れて悪夢を見せたりするに違いない。敵に回すと恐ろしすぎて考えたくも無いからな！

「はいよろしくお願いしますねー。誰か質問とかあるかなー」

俺たちの担任は黒縁めがねのちょっと疲れたサラリーマンって風貌の人だった。あと始終なんか口調が軽い。

「はい」

ぬつと手が上がる。志貴崎さんだ

「志貴崎さんどうぞー。というか久々だねえきみー僕の名前おぼえてるかなー？」

「上村の能力をまだ聞いていない。差し支えなければ聞きたい」

あー、そうだった。そういえば俺の身の上はまだ誰にも話していないんだっけ。そして先生のスルーされっぷりがかわいそう。

「えっと、俺の能力は無いです。一般人です平凡です平均です。な

ので皆さんの能力にさらされると一気に色々壊れると思うのでどうか手加減よろしくお願いします」

思った事を口に出すと同時にどうか俺に異能をさらさないようにとお願ひした。すると周りの空気が固まるのが分かった。志貴崎さんが変な顔をしている。野谷さんも目をいっぱい広げている。あんなに目って広がるんだなーなんてのほほんと思っていた。

[illegible]

「な、なに！？なにになに！？俺悪いことした！？ごめんなさい生まれてきてごめんなさい！！」

教室中に響き渡る皆の声に俺は氣を動転させてとりあえず謝る事しかできなかった。もはや半泣きである。何？俺変？こわいよーも
うおうちかえりたいよー。

「な、何故なんの能力も無いやつがここにいるんだ！」

志貴崎さんがあわあわしているのは何とも滑稽でオモシロいが、次の瞬間何をしてくるのかわかったもんじゃないので素直に答える。

「えつと、おねえ……姉が俺を入れないと学園に入らないってゴネたらしくて……学園側が折れてここに入れました」

「学園が折れた！？あ、ありえん……」

しかし学園側が折れたのは事実である。まあその理由は「弟と一緒に学校かよふのってたのしそうじゃーん」っていうだけなんだが、それにつきあわされる学園もたまつたもんじゃ無いな。

「学園が折れる……上村……もしかして上村さんの姉は上村^{かみ}沙紀さんですか？」

「はい」

間に入った鬼谷さんに俺が答える。鬼谷さんもなんだか余裕がなさそうな顔をしている。そのやりとりをみていた教室中の空気が凍る。『異次元訪問者』『超越者』『潜る者』なんて言葉があちこちから聞こえてくる。うう、姉はなんか色々トラブルをここでまきちらしまくっているらしい。これはもしかしていじめフラグですか？とりあえず俺はこの何とも言いがたい空気を霧散させるために口を開いた。

「えつとあの、姉がなんか色々やってるらしく申し訳ない。けど、あの、俺自体は本当なんの能力も持たないで、まあ自分でも場違いだと思ってるんですが、通えと許可も下りたことだしすでに入学させられちゃったんで、がんばって勉強しようと思います。仲良くしてください。よろしくおねがいします。以上です」

と一方的にまくし立ててお辞儀をして自分の席へ戻った。

「……驚いた」

「ご、ごめん最初に説明しなくて。何か普通な俺がこんな学園に入って良いのか緊張してて……」

「……良い」

隣に座った俺に目を見開いていた野谷さんだったが、俺の言葉にふるふる頭を振って許してくれた。よかった。

すると前の席に座っていた女の子が振り向いて話しかけてきた。

「本当驚いたよ。まさか何も能力も持っていないやつがこんなところ

に来るなんてさー」

「す、すいません」

「いーっていーって。私は山城^{やましろ} ミキ^{みき}。よろしくー」

「よ、よろしくおねがいします」

またもや美人さんである。頭の両方で絞ったツインテールがきれいにそよぐ。髪の色は綺麗なブラウン。元氣印といったほうがいいのか。整った顔立ちで表情がころころ変わる。しかし何だかそれが不自然にも思える。魅了されるというか、彼女以外が目に入らなくなるというか……。そういえば山城 ミキといえばさっき聞いた名前のような。うんボクイヤナヨカンガスルヨー。

「野谷さん。もしかして山城さんって」

「……ん。……『特別』。……ミキは異能者でー」

「うんそつか。ありがとうございます」

野谷さんの説明を一旦区切って現実逃避する。そつかー彼女もかー。ここで知り合った人皆特別かー……。どんな確立だよーもーあーもーふふふー。

そうこうしているうちに先生の説明は進む。とりあえず今日は授業はないらしい。このまま今日は解散となり下校だそうだ。委員とか諸々はまた後日決めるらしい。なんかこの教師すごいいい加減な気がしてきたよ？俺。

「それではー今日はここまで終わりますー」

お疲れーといいながら出て行く先生に続き皆席を立ち上がりそれぞれやりたいことをやり始める。俺は今日一日の緊張感から解放されて机にべたつと倒れ込んだ。うう。胃に穴が開きそうな気がしてきた……。さて。俺はどうしようかな。家に帰るか？

「上村ちよつといいか？」

「え？あ、志貴崎さん。はい」

顔を上げると志貴崎さんが立っていた。こっちが座ってて向こうが立っているこの状況だと志貴崎さんの威圧感がやばい。おっかなびっくりしている俺の様子に疑問符を浮かべる志貴崎さんであったが、どうやらお昼に誘いたいらしい。この学校の事もよく分からないだろうし、俺自身の事にも興味があるらしい。基本良い人なんだなと再認識してその誘いに乗ることにした。その話を聞いていた山城さんと鬼谷さんと野谷さんもついてくる事に。

そんな訳で食堂がある建物に向かっていているわけだが、高学棟から出たとたん何か凄い視線が俺、というより俺たちに向けられている。正直もう耐えられません。

「なんでこんなに注目されているんでしょうか」

「そりゃー私たちってあんま学校に来ないしー。それぞれ結構有名な人だしねー。それにーあんたの噂ももう広まってるんじゃないのー？」

「ええ！？無能力つてだけで噂に！？そりゃ珍しいでしょうけれど学園の外に出れば僕みたいな人なんてたくさんいますよねっ」

「いえ、上村さんの場合お姉さんがあの方なので・・・」

「ああー・・・」

にやにやつと俺を物色するような目で見てくる山城さんに変わり、鬼谷さんが説明してくれる。どうやら姉はこの学園のピラミット頂点に君臨しており、その破天荒な性格も災いして色々騒ぎを引き

起こしていたらしい。それが一学期の終盤近くいきなり沈静化、というより彼女自体が学園から姿を消したらしい。まあその理由も多分俺は知ってるわけだが。

そしてこの四人の組み合わせはかなり凄いことらしい。まあ入学式以降あつてないとか教室までの道覚えてないとか平気で言い出すような人物達が四人集まっているわけだからそりやそうか。というか転校初っぱなから凄い注目を浴びてるのってやばくない？やばいよね？俺つてもうっp^

四人で食堂に入る。全校生徒が使うとのこと、建物一つまるまる食堂らしい。すごく広い。とりあえず食券を買う。うーん何か今日は疲れたし、おなかもあり空いていないので無難な感じでサンドウィッチセツで。他の四人もそれぞれ食券を買い、料理のつたお盆を受け取って席に着く。ふむー。それぞれなんとも特徴が出ている。野谷さんはスパゲティ、山城さんは俺と同じサンドウィッチセツ、鬼谷さんは和食セツ、そして志貴崎さんはなんとステーキである。まあその体だとそれくらい食べないと体が持たないのだろうが。

と、そのままスパゲティを食べようとする矢野さんにハンカチを差し出す。

「……え？」

ハンカチの意味がわからないらしい。

「えーっと必要ないかもしれないけれど襟にかけてください。ソース飛んじやったりすると悲惨だ……ですから」

「……あ、ありがとう」

野谷さんは素直に俺のハンカチを受け取って自分の制服の襟に引っかけ、小さくスパゲティを丸めてゆっくりと食べ出した。黙々食

べてる姿がなんとも小動物적이다。なでぐりたい。

「紳士じゃーん。見直しちゃうよー」

「いやいや初対面ですから。見直す元ないですから」

軽く冷やかしてくる山城さんに突っ込む。

「・・・ふえふにおへたちもぎゅもぎゅもむもむにそんなふあふおとふかいしもむもぎゅもむふあふていい」
「口の中の物を食べきってからしゃべってください」

リスがこの人は。ステーキ口いっぱい頬張りながらしゃべられても恐怖感しか相手に与えないぞ。

「・・・んむ。別に俺らにそんな口をきかなくても良い。さつき言い直したって事は普段はそんな言葉遣いじゃないんだろっ」

「そーねー」

「そうですね」

「・・・ん」

「はあ・・・そうで・・・そうか」

皆普通の言葉遣いでしゃべってもらいたいようなので普段通りのしゃべり方に戻す事にする。この人達変なオーラ出してるからつい言葉が丁寧語になっちゃうんだよなー。がんばって普段通りを心がけよう。しばらくは無言で食べる。普通のサンドウィッチだと思ったが、挟まっている素材に気を遣っているらしい。レタスとキャベツを両方使ったりして歯ごたえや味に変化があって面白い風味がある。チキンも挽き立ての胡椒が使われているらしく風味が良い。

「へえ。美味しいな」

「ふおもぎゅもむうふあもむら」

「いけるよねー」

「……ん。おいしい」

「そうですねー」

サンドウィッチセットだといっても結構なボリュームがあったが飽きない味付けも手伝って軽く完食できた。あと志貴崎さんが食べながらしゃべるのは聞かなかったことにした。

「それで、上村。どうしてお前がここにくる事になったのか、詳しく聞きたいんだが」

ステーキを食べ終わった志貴崎さんが口を開いた。しかし食べるのが早いなあんだ。野谷さんまだ食べ終わってないぞ。黙々食べる姿が小動物的で以下略。「もちろん喋りたくなければ喋らないで良い」と志貴崎さんが言ってくれたが、別に俺として隠すような事は一切無いので説明することにした。

「別に詳しくも何も、6月くらいに姉が突然俺の部屋に来て開口一番『圭、お前も私と同じ学校にいくのよー!!』って叫んだと思ったら、外に飛び出していつて、まあ意味もよく分からなかったし、そのまま放つといたら夏休み中に学園案内の分厚い郵便物が来て。元の学校からも転学扱いになってるし仕方なくここに」

「相変わらず自由すぎるな。お前の姉は」

志貴崎さんは口を大きくへの字に曲げて変な顔になる。

「それでー？その圭のお姉ちゃんはどこいったのさー」

デザートのアレンジ豆腐を幸せそうに食べながら山城さんが聞いてきた。この人はいちいち仕草がかわいすぎて困る。もっと見ていたい

気持ちになぜかなるのを必死に押さえて山城さんから視線を外す。

「俺も良くわかんねえ。というか『同じ学校に行くのよ宣言』からすぐどっか行っちゃった。てっきり学園で何かやってるのかとか思ってたんだがそうではないんだよな。・・・山城さん達の話聞くとき」

どうしても『圭』と下の名前を言われた手前、俺も『ミキ』と返したかったがこっぴどくかしくてできなかった。俺のばかばか。ちなみに山城さんにはバレてるみたいですよっごいニヤニヤしてる。・・・くそ・・・。

「ふふん。うんそーだよ。といつても私はあんまりガツコになかったから『圭』のお姉ちゃん是我的居ない合間にきてたかもしれないけどー。皆は？」

やっぱばれてやがる。

「見てないな」

「・・・ない」

「みてないですね」

「そっかー。まあ置き手紙に「魔王を倒してくるからちよつと異世界いつてくるね ミ（右下に大きく猫の顔）」ってのはあったんだが。まあいつもの冗談だと思うし」

俺の言葉に志貴崎さんが変な顔をさらに変にして、鬼谷さんがお茶を吹き出し、野谷さんが固まり、山城さんが杏仁豆腐が気管に入ったらしく咳き込んだ。なんとも大惨事です。

「ちょ！何その反応！！いや、きつと冗談だって。地球の裏側とかで楽しくやってるだけだって！」

「それもどうかと思うが・・・」

「・・・そうだと良い」

「まー、あの人ならどこにでもいけちゃいそうな気がしてきて・・・」

「さ、さすがにないですね」

姉はどんな生活をここで繰り広げていたのだろうか。胃に続き、頭も痛くなってきた。

一話 自己紹介をしよう？

「そういえば上村の話ばかり聞いていたな。俺たちの能力の話もしないとだめだろう」

ステーキ食べて元気いっぱい！って感じで張り切ったオーラを出して志貴崎さんが立ち上がる。

「そういえばそうでしたね」

「あーそうねー」

「・・・そう」

「ちよちよちよと待って！気持ちの準備をする」

今すぐにも何かやりそうな志貴崎さんを慌てて止める。何なんだろうこの即行動しちゃう人。と、俺のこの行動を疑問に思ったのか鬼谷さんが口を開いた。

「あのお姉さんを持ちながら気持ちの準備・・・？」

「確かにそだね。なんでなんでー？」

「いやー。あの、俺はノーマルな一般ピープルなわけで、姉の行動をなんというか・・・奇行として認識してどうにか自分を守ってきたというか、目を背けてきたというか」

思えば自分の『常識』を守るために日々必死だった。姉の行動は奇行という以外の何物でも無かった。今まで何も持っていなかったのに次の瞬間何かを手にとってるなんてざらで（必死で俺は今まで気を失ってたんだなって自分を騙した）、車に乗ってたら2時間の道のりを一瞬で目的地に到着してたり（必死で俺は今まで気を失ってたんだなって自分を騙した）、朝家を出て行った姉が昼には地球

の反対側から電話をかけてきたりした（必死で俺は以下略）。その苦勞もこの学園に入ったことにより全てが無駄である。ぐっばい俺の常識。俺の日常。

「はー圭も大変だねえ。けどまあこの学園に転入した以上もう目を反らす事もできなくなったわけだ」

「・・・うん・・・ぐす」

「よしよし」

やばい泣けてきた。まあしかし頭なでるのは止めてもらいたい。もつとやってほしくなるから。

「もういいか？」

「あ、ごめん。うん。いいよ」

志貴崎さんは構えの状態ですつと待つてたらしい。俺の言葉を聞くと軽くとんと音を立ててジャンプした。3mくらい。

「え！？ええ！？すげー！！」

「おー飛ぶ飛ぶ」

「あらー」

「・・・すごい」

やんややんやはやし立てる俺たちの前に、降りて（落ちて）来た志貴崎さんは得意げにふふんと鼻を鳴らし得意げだ。しかしその風体にもそのジャンプ力。まさに野生児ですね。アマゾン！とか叫びそうですね。

「俺は体のリミッターが無い異常者だ。通り名として【剛力】とか言われるが、それは俺の一端に過ぎない」

人間の体は常にある程度のリミッターにより筋肉の動きを制限している。そうしなければ骨や筋肉。つまり自分の体自信を無理な動きによって破損させてしまうからだ。古来より日本には「火事場の馬鹿力」という言葉があり、この言葉は火事場^{ピンチ}に直面した人は、今までの自身の筋力からは想像もつかないほどの力が出る。という意味だ。そのリミッターが志貴崎さんにはない。志貴崎さんは自分の意思で自由自在に筋肉の全ての力をコントロールできる異常者なのだ。もちろんデメリットはあり、筋力を意識的に制限しないと物も壊してしまうため持つことすらできないそうだ。それって何って『スー・ーマン』？もはや誰も名前すら知らないレトロヒーロー映画の、古典的ワンシーンが俺の脳裏で展開された。

「さらに筋肉も常人のそれと違い、柔軟性と弾力性に富んでる・・・らしい」

恐らく彼を研究している人の受け折りなのだろう。あと筋肉うねうねさせるな。自由に操られるのは分かったから。

「・・・次は、・・・私」

志貴崎さんに続いて野谷さんも能力を見せてくれるらしい。立ち上がって俺に背を向ける。首を横に回してるから、俺の位置は野谷さんの見ている方向からして大体100度程度の位置だろうが。

「・・・この位置から・・・普通は圭を私はちゃんと見えないと・・・思う」

「俺なら誰か居るな！程度しかわからないだろうな」

自分に置き換えて想像してみる。人間の視野は顔の中心から大体

150度程度。そのうちはつきりと見える角度は90度程度である。これは肉食動物の特徴で、草食動物の場合は目の位置が横についていることから270度程度カバーできると言われている。今の俺と野谷さんの位置関係では、人か物かすらはつきりと判断できないほど見えづらいはずだ。

「・・・指を・・・立ててみて。・・・当てる」

なるほど。とりあえず四本立ててみる

「・・・四本」

「すごいな！」

「へー」

「そんなことができるんですねー」

「おお！」

野谷さんは志貴崎さんの時と同じくはやし立てられてちょっと下を向いて照れている。

「・・・私は脳のリミッターが外れてる・・・異常者」

人間の脳みそはあらゆる処理を請け負っている。見た物を記憶したり、判別したり、体を動かしたりその他諸々だ。しかしそれらを全て処理しようとするとなら脳の処理が追いつかない。よって受け取った信号をばいばい捨てる処理が間に入るそうなのだが、そのリミッターが彼女は外れており、全ての処理をしようとするらしい。そしてその対象が目からくる視覚情報となっているようだ。ちなみに志貴崎さんも正確には脳のリミッターが外れた異常者、らしい。二人とも脳のリミッターという点では同じだが、その種類が違うようだ。また、彼女は通り名で【鷹の目】と言われているようだ。きっとそいつ軍事オタクだと思う。彼女の目は何者をも見逃さない。動いた

ものは全て彼女の目に入り脳が認識する。また、かなり遠くの物も自在に読み取り認識する能力を持っているようだ。もちろんデメリットはある。

「・・・脳の処理が間に合わなくて、・・・あんまり早く動けない」

あまりの情報量の多さに、彼女の脳がうまく処理できずに急な運動ができないのだそうだ。彼女のゆつくりしたしゃべり方もそのせいらしい。まあ「・・・意識すれば・・・脳のリミッターも・・・付けれる」というからわざと外したまんまなのだろう。チートめ。

「それじゃあ次は私ですね」

野谷さんの説明が終わった所で鬼谷さんが立ち上がった。とたんに周辺になんともいえないプレッシャーが立ちこめる。パリッと静電気に毛が逆立つような感覚がする。

「なんかパリパリするー」

ひゃんつと山城さんが震えて両肩を抱く。

そのまま二十秒ほどした所でふつとプレッシャーが無くなるのを感じた。今のが彼女の能力なのだろうか。何か今までのより全然毛色の違う能力なのが想像できる。

「これからこの食堂に女の子が二人きます。多分小学棟の生徒で一人は帽子をかぶっています」

そう言い終わらないうちに食堂の入り口が開いて女の子が二人入ってくる。一人は帽子をかぶっている。

「おおっ」

どうやって知ったのだろうか。彼女が動いていなかったのは俺を含めて皆で見ていたし。

「一人が販売機で食券を買います。気分的にはおにぎりランチ」

その言葉に従うように、鬼谷さんの言葉の後に続いて帽子をかぶった女の子が販売機の前へ。

「けど、金銭的には好物のハンバーガーランチも買えます。今日の私はちよっとだけリッチ。さあどうしよう」

うーんうーんと悩む女の子。

「と、そこでもう一人の子がサイフを忘れてしまっています」

帽子の女の子の後ろで鞆をさぐっていたもう一人女の子が「あ！おサイフない！」とちよっと大きな声を出す。

「それを見た彼女は黙っておにぎりランチの食券を二枚買います」

帽子の女の子が食券を二枚買っているのが手の動きでわかる。その食券をもう一人の女の子に渡す。受け取ったもう一人の子がびっくりして「ごめんね」と謝っているようだ。

「二人そろってちよっと遅めの昼食です。よかったよかった」

「……すげー……」

「ほー……」

「……すごい」

「……」(無言で手を叩く)

皆あんぐり口を開けて感心しきりである。何かすさまじい物を見せられてしまった。志貴崎さんなんてもう言葉すら出ないようて手を叩くしかできないようだった。

「というわけで、私は電磁波を操る超能者です」

人は電気で動いている。もちろん脳も。人は常に電気で考え電気で動き電気で感じている。それらの情報は常に体のあちこちから『電磁波』として発散されており、彼女はそれを『感じる事ができる』。人は彼女を【感じる者】と評する。彼女は自分から積極的に働きかけることにより、周囲の電磁波を発する物を『感じ』その存在を追跡する事ができる。つまり対人ソナーである。(ここで山城さんが『感じるだなんてえっち』と茶々を入れた。鬼谷さんも「敏感すぎて困ります」と飄々と返しちゃうあたりこの二人に俺はあらゆる意味で勝てそうに無いなと思った)と、同時にある程度の距離に近づけば程度はあるが考えを『感じる』事ができる。

「もちろんプライバシーですし、皆さんの頭の中をのぞいたりは絶対にしませんよ」と彼女は言ってくれた。まあ俺が彼女の能力を知ったところで防ぐ手立てはないのだし信じるしかないだろう。他の皆も同様の考えのようだ。そして「見たくないものもみえちゃいますしね」と彼女は寂しそうに笑った。つまりはそれがデメリットなのだろう。

「じゃあ最後は私……!」

最後の大取といったところで元気いっぱい山城さんが立ち上が

った。

「柁立って。」

「む」

山城さんの指示により志貴崎さんが立たされる。

「柁は私の目を見てて。皆は私の顔みちゃだめだからね」
「うむ」

何が起ころのであろうか。ここまで来ると次はどんなとんでも能力が飛び出してくるのか、わくわくしてくる物である。

数分後、そこには信じられない光景が広がっていた。

両手を腰に添え、ふんぞり返りながら壮大に志貴崎さんを見下ろす山城さん。志貴崎さんはその前に跪いてる。

「まだまだ頭が高い！！ひれ伏せ！！」

「ははー！！！！」

「お前の名前なんだ！」

「豚でございます！！貴方様の前に跪くこの私めは言葉を喋る事すら身に余るただの豚でございますー！！」

「ああん？じゃあ人様の言葉なんて喋るんじゃないよ！」

「ぶひー！！！！」

「お前の名前はなんだ！！」

「ぶ！ぶひぶひー！！」

「豚語はわからんわー！！」

「ぶひー！！（涙声）」

なんだろうこれ。すさまじい光景である。すでに志貴崎さんは動きを通り越して地面にへばっているし……。というかこれ腕変な方向に曲がってない？

「ちょ！そこらへんでやめたほうがっ！」

「そ、そうですよ！」

「……だめ」

顔を見るなと注意を受けていたため、必死に顔を下に向けて顔が合わないようにしながら止めに入る。

「ご、ごめんねー！私も変なスイッチはいっちゃってさー」

「いや、問題ない。しかし凄いな。頭にもやがかかっているように体が言うことを聞かなかった。一体俺は何をしていた？」

どうにかなだめて我に返った山城さんは『てへぺろ（・ω・）』といった感じであんまり反省しているようには見えない。志貴崎さんは腕がすごい変な曲がり方をしていたが、軽いねんざで済むそう。自分だったら……。と思って小便ちびりたくなった。……。チビテナイヨ？あと志貴崎さんの名誉のために、先ほどの光景は志貴崎さんには内緒とアイコンタクトで了解合った。

「ってーわけで私は幻術の異能者なのさ」

へへーんって胸を張る山城さん。うぐ、へそがちらつと見えた。

ここらへんで彼らの解説をしよう。俺は今まで単純に彼らを『異能』と呼んでいたが、『人でありながら人を超えた者』として、世界は彼らをいくつかジャンル分けした。

『異常者』：何らかの身体的能力が突出して体現したもの。

彼らは人間以上の嗅覚を持ったり、人間以上の筋力を持ったり、人間以上の聴覚を持ったりした。志貴崎さんと野谷さんは典型的な異常者だ。

『超能者』：その名の通り昔は超能力と考えられていたもの。

シックスセンス、透視、未来予知。それらを使える者達の総称。彼らは遠くの物事を感知し、時間すらも超えて今の世に来世を呼び寄せる。これは鬼谷さん。

『異能者』：上記二つに当てはまらない者達。

彼らは縛られない。まさに人ではない『ナニカ』を彼らはその体に体現する存在。

彼女、山城 ミキの能力は幻術。昔から宗教団体の教祖達が持っていたとされる異能である。カリスマと呼ぶ声もある。だが彼女ほど明確にその効力を示せる人間はいない。

彼女には種もシカケも必要ない。唯一必要なのはその体。そして相手にある程度の知能があること。彼女はただ貼り付けるだけではない。それだけで人間、鳥、魚、動物。ありとあらゆる生命が彼女に跪く。まさに異能。現代の科学が到達できない地点が彼女一人の中に。彼女の演技を見た者達は涙を流しながら『愛されない恋人』と彼女に二つ名をつけた。彼女の演技を皆が愛した。しかし彼女自身

は誰からも愛されない。彼女の本質は誰にもわからない。永遠に。だから彼女は『恋人』であるが『愛されない』。寂しい二つ名が、彼女には付いた。今も彼女は演じている。彼女は演じる事を止める事はできない。今も一人の女子高生を……。だからこそ俺は彼女に合ったときから惹かれていた。目が離せなかった。

「風と同じで、私もむやみにこの能力使わないから安心していいよん。まあどうやっても今みたいに微量に出るのはしかたないんだくれどねー」

たはーつとすまなそうに山城さんが謝る。わざわざ自分から使わないと宣言してくれる。その心遣いがあった。

「皆すごいなあー」

「それで済ますお前もおまえだな」

「すごすぎてもう頭パンクしてるだけだよ」

もう驚かされっぱなしで何かなにやら頭がパニック状態である。完全に理解の範囲外だ。そんな彼らが学園を相手取って『楽しそうだから私の弟も学園に入れる』という理由で交渉した姉には劣るというのだから、姉は一体なものだろうか。15年一緒に暮らしてきて今更ながら、俺の姉の自由さにあきれるばかりである。

「しかし皆それぞれお互いの能力知らなかったのか？いくらお互い顔合わせなくてもお互いを知る機会くらいありそうなものだけど」
「『色々とあったから』」

異口同音に同じ事言われた。多分本当に色々あったんだろうな。常人には理解できない範疇で彼らは生きてる。

「皆でこうやって、顔を合わせて落ち着いて話す機会は初めてだ」

「そだねー」

「上村さんのおかげですね」

「……おかげ」

俺のおかげだといわれて、思わず頭をぼりぼりとかいた。夏休み中ずっと不安だった。この学園で俺はどうなってしまうのか。俺と彼らはあまりにも違いすぎると思っていた。いや、実際違っていた。しかしもう不安感はない。やっていけそうだ、と思えた。しかし同時に彼らが今までまともに顔を合わせていない事も思い出す。彼らが明日からはまた学園にこない事も十分にあり得るのだ。せつかく知り合えたんだ。この縁は絶対に切りたくないな、と、彼らにあつて数時間の短い間で思えるようになった。

「な、なあ。皆はなんで始業式に参加したんだ？本当は来なくてもよかったんだろ。あ、明日から学園来なくなるのか？」

若干不安もあつたが、明日から会えなくなるのは正直さみしい。まあたまには会えるんだろうけれど。

「ふむ。その事なんだが、ちょっと皆に相談がある」

志貴崎さんが俺の言葉に反応して少し考えた後、ずいっと顔を出してそんなことを言ってきた。うーん何か天性の巻き込まれ癖のある俺の嫌な予感がびんびんですよ。

二話 友好を深めよう？

「思い出作りをしたい」

志貴崎さんの話はこうだ。今まで彼はやりたいことをやってきた。色んな場所へ行き色んな場所へ上った。先月はヒマラヤ山脈にも行ってみた。しかし満たされることはなかった。そこで彼は気づく。

仲間が居ない事に、友が居ない事に。異常者である自分に誰も追いつけない。肩を並べられない。もちろん今まで行った場所に行き離れた人々はいたが、彼らはスタッフであり仲間ではない。その場を離れるともう連絡すらない間柄だ。彼らの目はどこまで行っても『人ならざる者』を見る目であった。友好関係など結べるはずもなく、どんな広大な景色もカメラに写ったひとりぼっちの自分と並べるとなんともくすんで見えた。

「俺の何と薄っぺらい事か！」

彼は山に吠えた。今までしてきたこと全てが薄っぺらく感じた。隣でこの景色を見る相手が欲しかった。「やったな！俺たち！！」と笑い合える漫画みたいなやりとりをする相手が。それは友でもいいし仲間でもいいし恋人でもいい。彼にはそれらの関係の違いが良く分からなかったが、それでも隣で笑ってくれる存在が欲しかった。

「次はどの山を登ろうか」

「嫌だよお前となんて。もう二度とのぼりたくねー」

と冗談を言い合う仲間がただ欲しかった。それが彼が始業式に参加した理由であった。高校デビューではなく始業式デビューというわけである。同じ異能を持つ者達とならばそういった関係を持てる

と思った。そして相手が自分に追いつけないのならば、自分は歩みを緩めようと、そう思った。

「え、俺ヒマラヤなんてのぼりたくねー」

「私も遠慮します」

「私もー」

「・・・私も」

それぞれが似たような反応をする。志貴崎さんはそれを見てぐつと崩れた。

絶対に嫌だこんな筋肉と山とか上るの。ありえねー。というか途中で死ぬ。

「いや、別に一緒に山に登ろうといってる訳じゃ無い。一緒にになにかやる友が欲しいんだ」

実際今日一日の俺たちとのやりとりは彼にとつてとても楽しかったらしく、こういう事を色々とやっていきたいらしい。といってもお互いの身の上や能力話し合っただけだよな。それで楽しかったってどれだけな人生歩んできたんだこの人・・・。

「・・・私も」

「実は私も・・・」

「私も・・・」

いや、皆そうだったようです。

野谷さんも志貴崎さんと同じように今まで色々やってきたが友達ができず、VRFPSが好きでプレイしているとそういった人達とある程度知り合えたが、そこはやはりゲームの世界。勝敗に執着するようになりお互いのミスを責め合ったりギスギス。昨日は大会の途

中なのに口げんかを始めたチームメイト達に嫌気がさし、今日が始業式だと言うこともあり一念発起し、ゲームを放棄して参加してき
たらしい。大会を放棄て……。

鬼谷さんは、普段その能力から警察関係に依頼されてあちこち飛ぶのが日常で、そこは常に鬱々として血の臭いが後を引く場合が多かったらしい。嫌な物もたくさん見てきたし、その分お金も動いたが、彼女はその現状に遂に耐えられなかった。この気持ちを打ち明ける同年代の友達が彼女には居なかった。

山城さんに至っては、世界各地で芝居をやるうとしたものの、演目の共演者達が漏れなく彼女の幻術に掛かり芝居そのものが成り立たない物に。仕方が無いので小さな劇場を回り一人芝居をしてきたらしい。スポットライト一つ自分に当ててそこから一歩も動かずに理由は「照明係が幻術で使い物にならないから」だそうだ。彼女は幻術など無くても一流の演技ができると自負していた。それでやっていけると。彼女は幻術を制御しようと努めた。自分の物であるはずのこの能力は制御可能な物であると信じた。しかしそんな彼女と幻術は切り離される事なく世界を渡った。あげく『愛されない恋人』など不名誉極まりない二つ名すらいただく事に。結果彼女のプライドは打ち砕かれ傷心。あとは他の人と同じである。

それぞれの話を聞くと、うーむ確かに異能者達は色々であるようだ。特に山城さんはなんだか踏んだり蹴ったりである。その背中に哀愁を背負っているように感じる。

「頭なでなでもいいよ？」

と言われたが遠慮しておいた。・・・俺のばか。
何となく皆落ち込んだ空気をかもしだしている。お互いの身の上

を聞いて自分に重ねたりして落ち込んでいるようだ。まあしかし、皆友達をほがっているようだし、転入してきたての俺も友達がいな。なら話は一つしか無いだろう。

「よし！話はわかった。それで？何するの？」

「む。乗ってくれるか！」

「登山は無しな。俺体力ないし」

「もちろんだ！」

分かってるのかこの人は。子供のようにはしゃぎ方をしやがる。

「とはいったものの、これといって計画は無いな」

ないのか。

「用は遊べばいいんでしょ？海いこーよ海」

楽しそうに山城さんのツインテールが揺れる。山城さんは自分に正直だなあ。しかし速攻で海が出てくるのはどうだろう？「あら、いいですね」なんて鬼谷さんも同調し始めるし。いや、お二人の水着姿は是非見てみたいですがっ！「・・・指定の水着しかない」と野谷さんがつぶやいた。スク水・・・だと！？

「まあ待て待て。まずは目標を立てようぜ？そうしないと方向定まなくてふらふらするだろ？立てなくてもいいのかもしれないけれどさ」

「・・・思いで作り？」

野谷さんが小首をかしげる。

「なんか漠然としすぎてるな」

そこでさっきまではしゃいでいた志貴崎さんがガバツと立ち上がり叫んだ。

「青春だー！」

「『『『えええー……』』』」

どん引きである。何でも彼は男臭いのか。いや男だが。なんとも漢すぎる。

「俺らは今まで何をしてきた。小、中と進んできて高校まで年を重ねた。その歳月で何を得た？何を努力した？何を楽しんだ？少なくとも俺は無い。何も。自分の能力を掲げて『自分ができること』をただシナリオ通りに選んで来たただけだ。俺らは今までこぼしてきた青春を取り戻さないといけない！」

「『『『ええええー……』』』」

どん引きだ。力説し雄々しく拳を固める志貴崎さんには悪いがどん引きである。

「まー青春は置いて、確かになんとなく自分の能力中心で過ごしてきたなー私もー」

「私もそうです」

「……私も」

志貴崎さんも含めてあまりにも常人から離れると似たような人生を歩むことになるようだ。何となく皆の目標というか方針が心の中

で決まって来たみたいを感じる。

「ま、とりあえず目標は『青春（仮）』ってとこで。」
「なんだ（仮）って」

志貴崎さんは不満そうに口をへのじに曲げた。まあ『思いで作り』とあまり変わったような感じはしないが。とりあえず話が進まない気がするしこれで良いだろうと納得する。

「さてさてー。じゃあ何するかだよねー」
「そうだなー」

皆でうーん考える。目標は立てた物の『青春』って何さ。なんて哲学的な思考に頭が偏ってる気がする。時刻は二時。大体の生徒は既に学園を出て都市に繰り出しているようだ。他の先輩後輩達も今日は午前中のみ授業だったらしく、食堂で昼食を食べる者はほとんどみとめられなかった。というか何で俺らは真面目にこんな事考えてるんだ？

「何かあれだな。『遊ぶために計画を立てる』なんてバカらしいな。俺らは真面目すぎた気がする。とりあえず長期的な計画は後にして、ここは無計画に街に繰り出すってのは？」

変に海とかキャンプとかそういう事はかり考えてるからまるで遊ぶことが難しいように思えてくる。ここは普通に外で皆で遊びにくのが正解なような気がした。

「なるほどー」
「・・・それがいい」
「そうですね」

「おお！」

というわけで、俺ら一同は『青春』を求めて街に繰り出す事にしたのである。・・・なんのこっちゃだ。

とりあえず食堂を出ることにした。校庭を抜けて正門へと向かう。やはり周りからの注目度が高い気がする。なんとも居心地が悪い気分になるが、これほど注目されるっていうことはやはり彼らの能力は桁違いということなのだろう。

「そういえば、皆の能力って実際どれくらいのレベルなの？俺そこから辺の基準自体がまだよくわかんないんだけど」

歩きながらこの学園での異能の基準を皆から教えてもらおう。大まかには科学的、軍事的、文化的に『どれだけ価値』があるのかという基準でランク分けされるらしい。ランク1からランク5まであるようだ。

「おおざっぱに言えば『国が手放したくないレベル』によってランクが決められるよん♪」

ランク1：疑わしい者・力はあるが影響力無し

自称であったり、科学的な根拠はあるものの、人々に対してあまり影響が無い部類。お寺の住職、気功師、牧場主や農夫、ギャングラーなどには比較的ランク1の人物が多いらしい。霊や動物の声が聞こえる。運気の流れを読む。体の悪い部分が分かる。昔は迷信や信仰の対象であった不確かな物に科学が追いついたため立証することはできたが、まあこれくらいのランクの人はわりとどこにでもいるらしい。学園もこのランクを保護をしない。

ランク2：力を証明する事ができ、対一人に影響力を持つ者

科学的に力を認められた者がこのランク。気功を放つ者や、催眠術を公使できる者、50mm以下の対象物を瞬間移動できる者などがこのランク。このランクからは確実に特殊な人間として認識される。しかし国としてもこの程度の能力は対して利用価値は無く、周知からちよつと不思議な事ができる人程度の認識にしかない。ちなみに知識や技術として催眠術を行使する人は、そもそも異能ではないのでランク付けすらされることは無い。

ランク3：目に見える力として体现することができ、国にとって価値のある者、数十名程度に影響力があるもの

このランクから国として利用価値が発生する。新興宗教の教祖、異常な反射神経や記憶力を持つ者などがこれに当てはまる。現代科学にてこのランクの者はほとんどが解明済みである。学園の保護対象となる。

ランク4：ランク3よりも強力な力を持つ者。国外への移動に制限が付く。数百名に影響力があるもの。

国にとって手放しがたい存在。彼らは人々へ忖度にも無く自分の影響下に強いてしまう。行動は制限され、常に監視されている。科学的な価値も高い。ちなみに日本には30名程度がこのランクに属しているらしい。

ランク5：国がお願いして他国へ行かないでくださいとお願いするレベル

なんという中二病。現在の科学では到達できない地点にいる人達。国からの積極的な支援を受けることができ、その貢献度によっては将来も完全に保証される。もちろんその存在は極秘中の極秘であるはずだが、本人達はまるで気にせず自由奔放に生活しているせいでバレバレである。ランク5とランク4には具体的な能力の差は実際あまり無いので基本的な制限はランク4と同等である。しかしその

科学的価値は未知数であり、もはや畏怖の対象にすらなっている。

「ちなみに、ランク4からは体のどこかに必ずチップを埋め込む事になっている。俺らは皆ランク5だな。まあ科学的にまだまだ研究が進んでいないらしいな」

彼らは人の範疇を完全に超えているため、自分自身での能力の制御ができなくなることがあるらしい。国からのバックアップが無ければ志貴崎さんなどはすぐ体がボロボロになってしまいうようだ。異能者達も色々大変である。

「私なんて科学者お手上げ状態だもんねー」

へっへーんと山城さんが得意げに胸を張る。確かに彼女の能力なんてまともに科学で説明しようとするのがバカらしくなりそうだ。頭を抱える科学者が容易に想像が付く。

「持ちっ持たれつと言う所だな」
「なるほどな」

改めて彼らの規格外を再確認した。そして俺の姉もランク5という事なのだろう。今まで必死に否定してきたが、帰ってきたらあの人の非常識ぶりも改めて見直す必要があるわけだ。

そうこうしているうちに校門を抜けた。10分ほど歩けばこの都市の中心街へと着くことだろう。

二話 友好を深めよう？（前書き）

読みやすい文体を探っています。

二話 友好を深めよう？

「さて、街に繰り出してきたわけだがっ」

ここまで来るのに軽く二時間程度かかった。いやもったか？本当は10分程度の距離にこの時間だ。この人達は気が多すぎる。その一例を挙げよう

志貴崎さんは、すぐに道に店を出してる食べ物屋に顔を出して、かならず一つは購入して食べる。

「俺はすぐ腹が減るからな。」

「一日5回くらい歯磨かないとすぐ虫歯になっちゃいそうだねー」

「・・・ガム」

「お、すまん」

淡々と答えられても困ります。次は餃子ですか。キシリトールガムと餃子はさすがに『無い』と思います。

「右で餃子を食べながら、左でガムを食べる。次は逆だ。俺の必殺技だ」

「・・・ええええー」

だれをどう必殺するんだよ。どん引きだよ。

「ちなみに虫歯は一つもないぞ。見る。この白い歯を」

「・・・うわぁ・・・」

なんかもう志貴崎さんの立ち位置が決まりつつあるなあ。と思う

一幕だった。

鬼谷さんと山城さんは、ゴスロリ系のファッションブランド店を見つけたと思ったら野谷さんをずるずる引っ張り込んでファッションショー始めちゃうし。

「……ごわごわする」

「こういう服あるんだねー」

「ちよつと恥ずかしいですね」

そう言いつつも抵抗せずに来ちゃう野谷さんも、やはりかわいい服には興味があると言うことが。

赤と黒を基調にして、全体的にシックにまとめてある。ポピュラーな系統として愛されているゴシックパンクというジャンルである。左右の靴下の柄を変えてフリルは抑えめ、若干短めなスカートから覗くふとももの上を這うガーターベルトがなんとも扇状的だ。レースをあしらったフリルはよく見ると手縫いだ。職人芸が光るね。

山城さんはこれまたポピュラーなアリスインワンダーランドに登場するアリス風。針金で補強していないスカートはすとんと落ちてしまうが、体の動きに合わせて踊る水色のスカートは健康的で元気なアリスのイメージにぴったりだ。ツインテールを下ろして流したストレートの髪が綺麗なアクセントになっている。スカートから覗く白い靴下にもどきつとする。ただ、そこはゴシックブランド。エプロンには血糊がつき、山城さんの手には首のもげた縫いぐるみが抱かれている。

ある意味一番似合っているのが鬼谷さんだ。漆黒を基本にした通称黒ロリ。典型的なゴシックドレスを包むレースやフリル全てが黒。そしてそれを纏う鬼谷さんの鮮やかな銀髪は凄い存在感を放ちながらも美しさを破綻させない。そもそも黒ロリとは、ゴシックロリータ旋風を巻き起こした2000年代に派生した亜流である。そもそ

もゴシック文化、もしくはゴシックパンクから短を発するこのファッションの歴史に以下略。

なんとも良いものを見させていただきました。

「ふむ。動きづらそうだな。それに暑そうだ」

「だから冷房ガンガンなのか」

「二人も着てみたら？ 圭は化粧すればギリギリいけそー」

山城さんが意地の悪い笑みを浮かべている。

「男性用にリサイズした物もありますよ」

店員さんも反応しないでくれ。

「い、いやあ遠慮しておきます」

「ほほう。これを着る男もいるのか。面白いな」

フリルがたくさんの大きめなカチューシャに手を伸ばした志貴崎さんを必死に止めた。この人もしかしたら面白そうな事に基本惹かれるのかもしれない。

その後も二着ほど洋服を着て遊ぶのをのんびり眺めてようやく店を出た。野谷さんと山城さんは数着買ったようでご機嫌である。荷物になるのでとりあえず店に置いて貰い帰りに受け取って帰るようだ。なんか目玉が飛び出るような金額がディスプレイに表示された気がするが俺は何も見なかった事にした。

その後も買い食いする志貴崎さんに、かわいい物を見ると飛びつく山城さんと鬼谷さんに、ふらふらと突然いなくなる野谷さんと、一向に俺たちは目的地にたどり着けない状態が続いた。

「子供かつ！いや子供だけれど！何か見つけて行きたいときは俺に教えること！」

「はいお母さん」

「わかったお母さん」

「わかりました」

「・・・わかった」

「誰がお母さんだ！」

基本的に自由に今まで生きてきたのだろう、集団行動が苦手なのかもしれない。

っと、服をちよいちよい引っ張られた。見ると野谷さんが俺を見上げていた。

「・・・ちよつと、・・・あそこで見たい物が」

野谷さんの指差す先にあるのは一件のPCショップだった。

「卯月つてばPC好きだよなー。自分で組んでるんでしょ？」

「・・・ん」

どうやら自分で組み立てる人が利用する店らしい。俺のPCは5年前くらいのメーカー品だからこういう店には入った事がない。野谷さんに続いて入る。

ちよつとだけワクワクしながら入ると、まさにカオスという他無い空間が広がっていた。人が通るのもやっとの通路に所狭しと色々なパーツが飾られている。ファンだけでこんなに種類あるのかよ。何か光ってるのあるし。PCの中に入れるんだろ？これ。なんで光る必要がある？

「……透明な外見……だと……中も見えるから」

「なるほどな。しかしこれだけ光つてると目につるさそうだな」

「……私はあまり……好きじゃない」

野谷さんは勝手知ったるという感じで、すすい奥に入っていく。圧倒的物量に圧倒されつつも、俺も適当に物色する。他の皆も色々見て回っているようだ。俺はこ自作こらへんの知識がまったく無いので、自然とゲームソフトコーナーへ。

昔からPCソフトやメディアはダウンロード販売が主流になっっているが、いまだにこういった現物での販売は一定の支持があるようだ。最近はどうもその市場も縮小してきているみたいだが。

量子通信が確立されて久しい昨今、インフラもある程度整い世界中でゲームにとって一番の問題であったタイムラグ問題は解消された。そしてなんとと言ってもVR技術の確立。破竹の勢いで普及したVR環境により、オンライン通信を前提としたゲームが現在の主流となり、こうして俺が眺めているソフトも大抵が多人数でのプレイが基本のゲームばかりだ。

「スターダストオンラインって懐かしいな。もう10年以上になるんじゃないか？」

小学生のころにやっていたVRMMORPGのパッケージを手にする。あの頃で既に5年目とかいってた気がする。大型パッチを定期的に適応する事により物語性を持たせたタイトルで、太陽が異常に近い惑星を舞台に剣と魔法を使って冒険するSF色がちよつとあるファンタジーであった。『太陽による惑星の死が咲きか、それを止める手立てを発見するのが先か、その未来を決めるのは君だ!!』とかってチープなうたい文句だったような。

「懐かしいなあ。これまだやってるのか」

中学受験をするためにこのゲームは引退した。まあ大型アップデートのたびに細かいパッケージを買いなおさなくてはいかず、俺のお小遣いだとしても続ける事ができなかった。ゲーム内で友達と小さな送別会をした記憶がある。

スターダストオンライン - スターターパック -

あの世界中1000万人がプレイしているSDOの超お得パックが登場！！

永遠に無料宣言！基本料金無料！！

今までのアップデートタイトルが全て込み込みですぐ遊べる！！
低スペックPCでも快適プレイ！

今からでも遅くない！経験値ブーストなんと三倍！！

最初の旅を協力サポート！太陽神の剣、太陽神の盾、女神のくじ引きをプレゼント！！

超かわいい！！アバター装飾バランゴの花をプレゼント！

マグポイント300P付！

ゲーム内職のリーストプリフィギュ付！

「うわぁ」

！多すぎだとか、プレゼント沢山ありすぎだとか、まずマグポイントって何だよとか、ゲームパックなのにフィギュアが付いてくる意味不明さだとか、色々あるが顧客獲得のための必死さが伝わってくる物凄いパッケージデザインになっている。情報量多すぎだ。

「なにになに？なにみてるのー？」

「ん。いやこのゲーム小学校の頃やってたんだが、まだやってるんだなあって思ってた」

「何か凄い色々ついてるねえ、1980円って値段が安いのか高いのかよくわからないけど。あ、この人形かわいい」

「運営の必死さが透けて見えるだろ？」

山城さんも食いついてきた。背表紙を見たり、裏返してみたり、パッケージ所狭しと踊る文言を見て「バランゴの花ってなにさ」なんてぶつぶつぶやいてる。

「・・・そのゲームは先月終了した」

「お、野谷さん。もういいのか？」

「・・・ん。・・・値段。確認だけだったから」

野谷さんの説明によると、数多くの大型アップデートによるイベント等人気はあったものの、ゲームについていけない人が続出。また、度重なるアップデートによって増えたスキル、種族、アイテム類の調整が甘く、方向修正が出来ない状態になりゲーム内バランスが崩壊。他のゲームへの流出を防ぐ事が結局できずに、先月ひっそりと、その13年という長いゲームの歴史の幕を閉じたらしい。

良く見るとこのパッケージほこりをかぶってるな。いつの物なんだこれ。

「卯月ー。卯月はどのゲームやってるのー？」

「・・・これ」

野谷さんが差し出したパッケージを見る。

「『ハローポイント』、FPSか？」

「・・・ん」

パッケージには『HALLO POINT』とだけ書かれた文字に兵士が一人。現代の装備じゃなく、200年前くらいの市街地戦闘員の装備のようだ。

21世紀程度の当時の軍事装備を基準にした、5：5に分かれて銃撃戦を繰り広げる少人数市街地戦闘物らしい。リアル志向で難易度が高いタイプのジャンルのようだ。軍部隊とテロリスト部隊に分かれて、テロリストは爆発物をしかけ、軍はそれを解除して競うゲームと教えてくれた。

「俺はこの手の硬派なのはやったことないな」

「・・・面白い」

俺もFPSをプレイした事があるが、結構いい加減に銃を撃つても相手に当たってくれたり、いろんな行動にシステム側がアシストしてくれたりする感じだった。飛行機で飛んだりミサイルを落としたり。わりかし馬鹿騒ぎという言葉がぴったりのゲームだった。野谷さんによると「お祭り系」というらしい。

「そうか。今度教えてくれ」

「・・・ん」

自分の好きなゲームに興味をもたれてうれしいらしい。少し頬を染めてうつむく野谷さんは相変わらずなでなででしたいです。

値段は6900円か。ちょっと高いけれど、まあ何かのゲームと一緒にプレイするのも楽しそうだし、買う事にするか。

「どうせなら皆でやればいいじゃん。けーちゃん携帯だしてー」

隣からパッケージを覗き込んでた山城さんは、ポケットから携帯

を取り出して何か操作をしている。というか『けーちゃん』って俺か。慌てて俺も携帯を取り出すと、山城さんに携帯を奪われた。そのまま俺の携帯と自分の携帯を操作する山城さん。

「はい」

渡された俺の携帯のタスクには「HALLO POINT PC PACKAGE 0.2%」と表示が出ていた。詳細情報を見ると山城さんからのプレゼントとなっている。これでダウンロードが完了してPCへデータを転送するとゲームが遊べる事になる。

「わ、悪いってこんなの」

「いいっていいってー」

「いや、女の子におごってもらって普通ちがくね？」

「この位おごった内に入らないよー」

のほほんと返してくる山城さんだが、どう考えても奢った内に入る値段だと俺は思ったので、やっぱりお金は俺が出したい所だ。とつさに財布を出そうとすると山城さんの機嫌が悪くなる。

「もー。女の子が奢ったんだから女の子立てなさい！」

「いや、逆だと思っんだが」

お互い譲らず平行線にしかないなので、山城さんが「じゃあ今度私の用意する洋服着てくれればそれでいいよ！」と譲歩策を提示してきた。俺はありがたくそれに乗る事となった。どんな服が用意されるのか、想像するだけで恐ろしいので考えないようにした。

とりあえず野谷さんの用事も終わったことだし外に出る。と、入り口で志貴崎さんと鬼谷さんが待っていた。志貴崎さんは、店舗前

で広げられている商品を物色しているようだ。

「もういいのですか？」

「・・・ん」

「おお、終わったか。見る。このメガネ凄いぞ。相手の戦闘力が見れるのだ！」

興奮気味の志貴崎さんは赤みのかかったメガネをつけていた。商品棚のポップを見る。『戦闘力測量機。これで相手の強さをチェックナウ！』と書かれており、隅にえらく髪のとがったにーちゃんがメガネをつけてどや顔してるイラストが添えられている。パーティーグッズのようだ。

「戦闘力5か・・・」

ハン、と言った感じで志貴崎さんにどや顔された。ちょっとムカつく。

「な、戦闘力4000だと・・・！！な、・・・まだ上がっているだー！！！」

向かいのハンバーガーファースト店の、軒先に置かれた人形に向かって志貴崎さんが狼狽している。

「・・・チーズバーガーを買ってきていいか？」

「そのメガネを戻してからならな」

いそいそとメガネを棚に戻し、小走りで志貴崎さんは店の中に入っていた。少し経って店から出てきた志貴崎さんの両手には、それぞれチーズバーガーとダブルチーズバーガーが握られていた。

「両方ダブルチーズバーガーでいいじゃん」
ダブルチーズ

呆れ顔の山城さんを見て、何を勘違いしたのか「何だ？食いたいのか？」と志貴崎さんは食べかけのハンバーガーを彼女に差し出した。

数分後、女王様モード役になった山城さんに、志貴崎さんは地面にへばったのは言うまでもない。

・・・というわけで、たった10分の道のみをあるだけでこの人達は色々と自由奔放さを発揮したのである。まあ、楽しかったから良いんだけどね。なんだかんだでさ。

二話 友好を深めよう？

そんなこんなでようやく中心街へと出てきた俺らである。ちなみにこの都市は円形状をしており、学園と中心街を中心として、4つのエリアに東西南北とエリア分けされている計画都市だ。その詳細を説明するのはまた今度でいいだろう。

「ここまでで2時間くらいかったな。まあ道中で色々よるつても楽しいけれど」

「皆で一緒にお洋服を見たり、買い物したりするのは楽しかったですネ」

「かわいい洋服買えたしね！卯月とおそろなんだよー」

「・・・ん」

「皆で買い食いした物を食べながら歩くのはまた、格別な物があるなっ」

「食べ歩きしてたのはお前だけだよ。と思うがまあ皆楽しそうなのでよかった。」

「とりあえずまあ連れだってここまで来たのはいいが、どこで遊ぶかが問題となってくる。」

「おかーさん何かプランあるー？」

「お母さんは止めて」

来る道中で色々プランは一応練ってきたが、なんともしっくり来ない物ばかりであった。

・ボーリング

↓志貴崎さんがハッスルして何か物壊しそう

「「「あー」」」

「自分の力の制御くらいできる！」

信用できないのでとりあえず今日は却下。

・中央街のターミナル駅に隣接された『ruin』にてウインドー
ショッピング

↓道中で色々買い物したので今日は却下

「意義ないし」

「そうですね」

・カラオケ

↓志貴崎さんが以下略

「信用ないな」

そういつつ筋肉をもりもりさせてるあたり確信犯だ。まあ、皆
がカラオケ好きかどうかもなく分らないので、今日の所は却下の
方が良さだろうという判断材料もあった。

・映画

↓皆の好みも分からないしそもそも出会って初日でいきなり映画
ってどうよ

「皆で何かした方が楽しいよね」
「……ん」

「というわけで、色々考えた結果、俺の頭の中にある遊ぶ場所として一番今日にふさわしいというか、無難な所があそこなわけだが」
俺の指さす先にはゲームセンター。100年から200年前のレトロゲームから、最近のプライズ系のゲームまで色々そろえた大型店舗だ。そもそもVR技術が発達して久しい昨今、この手の店舗はどんどん数を減らし、又ゲーム会社もあまり力を入れてこなくなつたのが現状だ。しかしどんなに時が経つても人の基本的な営みは変わらないと言うことか、外に出てゲームを遊ぼうとする需要は今でも一定数ある。家族、恋人同士、暇つぶし、そして学校帰り。

「……入ったこと、ない」

「私も無いですね」

「UFOキャッチャーくらいしかしたことないな」

「ふむふむ」

反対意見もなさそうなのでそのままゲームセンターへと直行する事になった。

中には等間隔で様々なゲームが並び、奥の方にはメダルゲームも取りそろえているようだ。いろいろな機械の音が混ざり合い、何ともいえない雰囲気をかもしだしている。

「なあ、あれは何だ？」

志貴崎さんの指さす先にはホッケーゲームの大型筐体があった。昔からあるポピュラーなタイプの手で掴むカップを使って、丸い巨大なコイン状の物体を相手のゴールに投げ込む対戦ゲームだ。最

近出た新機種で、通常のホッケーゲームとの他に盤上にアイテムが出現しそれ取得することにより、コインが大きく曲がったり増えたり消えたりする特殊なルールで遊ぶことができる。

俺の説明を聞いて志貴崎さんはホッケーゲームに興味を持ったようだ。いそいそとお金を投入しスタンバイする。

「さあ、俺の相手は誰だ!!」

武士の笑みを浮かべて、志貴崎さんが左右に揺れている。何か全身からオーラが出ている。女性陣がどん引きなので仕方なく俺が対面に立つ事となった。

「普通に遊べよ!」

「ああ!」

絶対わかってない。目がキラキラしてやがる。

――ビ―!!

ルールは通常のホッケールール。コインが俺の手元にでてきた。とりあえずジャブのつもりで”思いっきり”打ってみた。「俺の全力はこれくらいですよ。だから志貴崎さんもこれくらいにしてくださいね」という俺の意思表示だ。

「ふんっ!」

シャッ!!

――ビ―!!1-0!

音が聞こえたと思ったら、俺のゴールに志貴崎さんの放った（みえなかったが）コインがゴールに入ったらしい。

「見えなかった……」

「私も……」

「凄いですね……」

目が点になって呆然としているところに、野谷さんが俺の制服を引っ張った。

「変わって」

「あ、ああ」

野谷さんと場所を交換する。ゲームでの勝負事は基本好きらしい。若干眉が上がっていた。というか喋りがスムーズになっていたな。

野谷さんの手元に出てきたコインを、コンッと軽く弾いて志貴崎さんに打ち出した。女の子なのでどうしても早さは無い。それを迎え撃つ志貴崎さんは強者の笑み。手加減する気まったくねえ！！

志貴崎さんがコインを放つ瞬間、野谷さんはカップを少しだけ持ち上げた。志貴崎さんを静かに見据える、小さく微笑み一撃必中の構え。

志貴崎さんの手が高速に動きコインが放たれた！

シャッ！カアアアン！！

すさまじい音が二人の間で鳴り響く。俺には何が起きたのかがまったくわからなかった。

「流石！俺の一撃を止めるとは！！」

「遅い。ナメクジよりもまだまだ遅い」

「ふん。それでは、次はせめてネズミくらいの早さで打たせてもらおう」

ナメクジと言われ志貴崎さんの笑みがますます深くなる。野谷さんもさらに微笑んで志貴崎さんを見据える。

野谷さんがカップを持ち上げる。その下にはコインが。どうやら志貴崎さんの放ったコインをカップで上から押さえつける事によって止めたらしかった。俺にはまったく見えなかったが、野谷さんには余裕で見えるようだ。野谷さんの力でも止められると言うことは、志貴崎さんはちゃんと『手加減』しているらしい。

こうして二人の間ですさまじいホッケー合戦が繰り広げられる事となった。音的にはこんな感じだ。

シユカシユカシユカ力力力力！！！！！

さらさらと煌めく野谷さんの髪が優雅に舞って、志貴崎さんの攻撃を丁寧に弾く。それを志貴崎さんは強引に拾ってさらに強くはじき返す。

お互い一步も譲らない攻防に周りにギャラリーが出来はじめてきた。

「リミッターを付けた野谷さんってあんな感じなんだなあ」

「そうですね」

恐らく今の野谷さんはリミッターを付けて、脳の負荷を減らして体の反射に重点を置いているのだろう。

「ちなみにあんな状態の人はどんな事を考えてるんだ？」

ふと思いついたことを鬼谷さんに聞いてみる。

「何も」

「え？」

「多分ですけど何も考えていないでしょう。いえ、考えているとは思いますが。例えば『勝ちたい』とか『負けない』とか。そういった事だけを考えていると思います。二人の世界というか、体が考えるというか。良く言いますよね。『あの時は何も考えていなかった。相手と自分以外の全てが見えなくなって、体がかつてに動いた。気がついたら終わっていた』とか」

「へえー」

結局二人の攻防（どっちが攻めでどっちが守りかよくわからない）はタイムアップまで続けられ、最初に俺が奪われた1点が決めでとなり志貴崎さんの勝ちとなった。周りに居たギャラリーが湧き、ようやく周りに人が集まっていた事に気づいた野谷さんがびっくりして、俺たちの所まで小走りやってきた。

「……………楽しかった」

動いたせいだろう。顔が上気して頬が赤くなっている。

「いやあ楽しいな！本気でやれば勝てるだろうが、あのゲームも野谷も壊してしまうからな！また勝負しよう」

「……………ん」

二人ともご満悦のようだ。志貴崎さんは何か物騒な事を言っているが、実際そうする事ができると思えるのが恐ろしい。

その後も皆でできるゲームを中心に中々楽しい時間を過ごした。皆ゲーム自体はしたことあるが、ゲームセンターにあるような実際に体を動かすゲームはまったくやったことが無かったらしく、ダンスゲームで志貴崎さんが変な動きになるのを皆で笑ったり、バスケットボールをコートに放り込むゲームで野谷さんが入れられず「正確に見えてもボールを正確に投げられるわけじゃない」と落ち込んだり、クイズゲームで皆で考えながら答えたり（以外というか、志貴崎さんが外国の雑学や文化に詳しかった）、皆の色々な面がよく見れて面白かった。

さて次は何をしようかという所で、野谷さんがUFOキャッチャーを見ている事に気がついた。

「欲しいのか？」

俺の声にびつくりしたのか野谷さんが慌てた様子であたふたしている。

見ると毛糸で編まれた犬のぬいぐるみのようだ。

ポケットから500円玉を取り出しゲームに入れる。100円で一回、500円で7回だ。一回で取れる程腕の自信は無い（だからといって7回で取れるかは微妙だが）

まずは横軸の移動。ちょっと右にずれたか。次に縦軸。横はなんとなく分かるが縦方向はなんとも分かりづらい。腹にアームが入るようになんとなくで位置合わせしてアームの動きを止めた。

アームが降りて、ちょっと狙ったポイントからズレるが犬の腹に入り持ち上げようとする。

「・・・あ」

少し頭を上げて犬がつり上がる。が、そこでずるっと滑って転が

ってしまった。何も持っていないアームが所定位置に戻り7というカウントが一つ減った。

「難しいなあ」

横軸は何かなるが、縦はなんともいかん。とりあえずリトライだ。

横軸での移動・・・おっけー。そして縦。ウイーンという小さなアクチュエーターの駆動音がやけに大きく聞こえる気がする。ここだ、と思った瞬間、俺の手の上に野谷さんの手が被さってきた。アームが止まる。

びっくりして野谷さんを振り返るが、野谷さんの目には縫いぐるみに集中しているようだ。

持ち上がるアーム。今度はぴったり犬の狙ったポイントを掴んでいる。重心も綺麗に合ってそうだ。

野谷さんの手に力がこもる。

ゆっくりと空中へと持ち上がる犬。そのまま所定の位置へ。アームが開いて犬は落下。ごろごろ転がって取り出し口に犬が出てきた。

「取れた」

「あ、ああそうだな」

内心の戸惑いを隠して野谷さんに向き合う。どうやら脳のリミッターを付けているようだ。そんなに犬が欲しかったのか。

「あげるよ」

「・・・あ、ありがとう」

照れてうつむく野谷さんはかわいかった。

「あらー『青春』ですねえ」

びつくりして振り返ると三人がニヤニヤとみていた。気が動転して「そ、そんなじゃないんだからね！」と意味不明な返しをしてしまった。

「あー楽しかったー！」

山城さんが大きく背伸びをする。あたりはすでに結構な暗さになってきていた。

「今日はこころで解散かな」

「そうですね」

「・・・ん」

「また明日だな！」

ここで、お互いの連絡先を交換する事にした。

「そつえばさー。『部屋』立ち上げちゃおうかー？」

『部屋』とは、現在急速的に広まっているソフト『heyach at』のサービスだ。チャットと掲示板を兼ねており、P2P通信や各種ソフトサービスとの相互接続をもカバーする総合コミュニケーションソフトとなっている。プライベートの空間を構築すること

ができ、そこに他人を招待、コミュニケーションをする。VR環境では部屋の中でアバター同士でのやりとりができるし、携帯電話などでタイピングそうさによってのコミュニケーションも可能のサービスだ。

「・・・じゃあ、私が作る」

野谷さんがホストとなって常設型の部屋を組む事になり、後ほどメールにてアドレスとパスを送ってくれる事となった。

とりあえず今日は解散となり、お互いに別れの挨拶をしてそれぞれの帰路へと付いた。

二話の青春度は何点ですか？

「ただいまー」

家に帰着した俺は玄関の明かりを付けつつ一応帰ってきたことを告げた。返答は帰ってこないからやっぱり姉はまだ帰ってきていないようだ。嘆息し自分の部屋へ向かう。

――ピロン

メールが届いたようだ。ポケットから携帯を取りだして着信メールを開く。

「アドレス、パス。部屋作りました」

簡潔な文章のそれは野谷さんからのメールだった。

「早いな」

早速スリープ待機させていたPCを起動、『部屋』へアクセスする。基本的に『部屋』は掲示板の体をしており、リアルタイムでのコミュニケーションとの両立はできるが、お互いが全く同じ時間に居合わせることもしんどいのでVR接続は基本しないのが普通だ。名前の入力には素直に「k e i」とだけ入れて入室。

k e i : テスト

i r i s : お帰りなさい。圭。

速攻で返事が返ってきた。けどi r i sって誰だろう。部屋間違

えたのかな？とも思うが『圭』と返してくるから間違いはないと思うのだが。山城さんあたりなのだろうか？

NOYA : 早いね

ちよつと経つて野谷さんが反応してきた。

kei : 「iris」って誰？山城さん？

iris : 私は「野谷 卯月」のPC操作をサポートしますAIの「iris」です。よろしく願います。

NOYA : この部屋に常駐して貰って色々皆のサポートも頼む事にした

kei : 何かメイドさんみたいだな

iris : そう考えてもらって構わないです

かなり柔軟に言葉のやりとりをできるAIのようだ。こんなに素早く言葉を返してくるAIは今まで見たことが無かった。どこかの研究中だったり開発中だったりする技術でも使われてるのかもしれないな、これは。

Miki : やほやほー

iris : お帰りなさい。ミキ。

nagi : お邪魔します。

iris : お帰りなさい。凧。

Miki : おー、そんなの居るんだね卯月。このソフトそんなのも組み込めるんだー

このソフトは部屋に入る前の会話も全て記録されているので、時間をさかのぼってログを見る事が可能なので、irisの説明をわざわざする必要は無い。

nagi : よろしく願いますね。

iris : こちらこそ、よろしくどうぞ

NOYA : 基本的に色々と改造できるから、いじっていくつもり

うーん何だか凄いハイテクな部屋になっていきそうな予感が。

Sikisaki Momiji : これで入れたか？

iris : お帰りなさい。椛。

Sikisaki Momiji : ほーAIか。VR接続すれば
会えるか？

iris : 現在はアバターを設定されていませんで、光る球体
として描写されると思われます。

Sikisaki Momiji : ふむ、残念だな

NOYA : 名前が長い。変えて

SM : どうか？

NOYA : うん

kei : いいのかよ

どん引きだよ。

Miki : いやいや、けど今日は楽しかったよー。

nagi : そうですね

iris : 卯月は今日とても喜んでいたようです。特に犬のぬい
ぐるみは大切に本棚に飾られています。

NOYA : /log delete iris (-1)

system : error

iris : 基本的にログのデリートコマンドはこのソフトにはあ
りませんよ？

Miki : 別に照れなくて良いじゃん

kei : ?

kei : まあ大切にしてるなら嬉しいよ。

ログを削除しようとしているらしいが、犬のぬいぐるみは本人が欲しかったから取ってあげた（というのはちよつと違う）ので、まあ大切に飾ってくれるのならば嬉しい。

NOYA : 大事にする。

nagi : ほこりが付くとお掃除が大変なので、ケースに入れた方が良くかもしれませんね

iris : 商品検索、人形用ガラスケース：アドレス サイズ的にはぴったりのようです。こちらを購入しますか？卯月

NOYA : うん

SM : 便利だな！irisさん、種類の沢山入ったチョコレートとか無いか？

iris : 商品検索、ワケあり、型落ちチョコレート6種類ランダム入り！5kg：アドレス こちらなどいかがでしょう？桜。

SM : ありがとうございます！

早速irisさんを有効活用するSMさん・・・じゃない志貴崎さん。しかし5kgつて。にしても欲しい物を的確に判断して検索してくれるようである。もしかしてとんでもない存在だったりしないんじゃないだろうか。このAI

SM : 今日は50点だな！

kei : 何がだ

SM : 青春度だ！

kei : だ！って言われても・・・

Miki : 今日の楽しさって事-？

SM : というより思い出に残るかどうかって事だな

M i k i : じゃあ私は70点で。お友達記念日だもんねー！
n a g i : 私も70点で。
N O Y A : 同じく70点で。
k e i : そうだなーじゃあ俺は間の60点で
M i k i : 圭は普通だねえ
k e i : 俺のアイデンティティだな（キリッ
M i k i : アイデンティティ（笑）
i r i s : アイデンティティを何個も並べると何だか不思議な気分になりますね

AIが気分とか不思議とか分かるのかよ、というのはスルーしておいて、その後も他愛ない会話を繰り返した。

S M : 今日は50点だな！
k e i : 何がだ
S M : 青春度だ！
k e i : だ！って言われても・・・
M i k i : 今日の楽しさって事？
S M : というより思い出に残るかどうかって事だな
M i k i : じゃあ私は70点で。お友達記念日だもんねー！
n a g i : 私も70点で。

「私は1」
野谷はチャットログを見て、キーボードの手を止めた。立ち上がって本棚の犬のぬいぐるみを手に取り胸に抱く。

思い出に残るかどうかの点数。

ミキ、風と洋服を着て見せ合うのはとても楽しかった。
椀とのホッケーゲームはとても白熱したし、また再度勝負したい。
そして圭は、そんな彼女たちを気づかい導いてくれる。

彼女にとって今日の一連の出来事は今までにないくらい楽しかった。この犬のぬいぐるみを得ようとし、彼の手の上に置いたとき、集中していたからその時は分からなかったが、後になって気づいて頭が真っ白になった。まだこの手に彼の手の感触が……。この気持ちがあるのがまだ彼女には良く分からないが、とても大切な物に思えた。

初めての友人。初めての仲間。とても嬉しいと、幸せだと感じられた。

「これからも、彼らと過ごすのでしょうか？ならば、もっと楽しい時間がやってくるはずです」

irisがそう言うてくれたから、きつともっと楽しい時間がやってくるから。

NOYA : 同じく70点で。

そう、チャットログに残した。もう消せない確定した事。今日の出来事は70点。だから明日からきつと、70点以上の未来がきつと、やってくるようにと願いを込めた。

「ところで、私の事は友人じゃないのでしょうか？」

irisが気持ち少し落ち込んだ声を出した。野谷の脳内信号を

読み取ってirisなりの考えを出したのだろう。

「……何言ってるの。……貴方は……私じゃない」

「そうでした。これからもよろしくおねがいします」

kei : ところでな、ちよつと山城さんから貰ったゲームやってみたんだが。凄い難しいんだ

Miki : 私もーすぐしんじやーう

SM : 何をやってるんだ？

nagi : ゲームですか

kei : hallp point っていうVRFPSだよ。

野谷さんがやってるから一緒にやろうって。

Miki : そー。あとお母さん「hallp」じゃなくて「hallo」だよ

kei : それでやってみたんだが、凄い難しくてさ

nagi : FPS？

SM : ほほう面白そうだ。irisさん。アドレス下さい。

Miki : スルーされた！

iris : 商品検索、HALLO POINT DL pack :

アドレス でしょうか？ 桜。

kei : うーん拳銃もって相手を倒すゲームだよ。5:5でチームに分かれて戦うんだ。

SM : ありがとうございます。

nagi : なるほど。どうでしょう？明日はこのゲームを皆でやるというのは。野谷さんに教えて貰いながら。

kei : 俺もそう思ってた。どうだろう。野谷さん

Miki : うんうんー

どうやら彼女の好きだと言ったゲームソフトを、皆でやろうという話になっているようだ。

「・・・私に・・・できるかな・・・教えるのなんて」
「問題ないでしょう。彼らならきっと」

貴方がそんな顔をするのならきっと大丈夫でしょう。そうirisは思った。

irisが肯定してくれた。ならば私は受けなければならない。
明日を今日より楽しくするために。明日を忘れない日にするために、自分が中心になることを、彼女はこの時選んだ。

NOYA : わかった。けど私は厳しいよ
kei : ほ、ほどほどに頼む

慌てる圭の顔が頭に浮かんでつい口元が緩んでしまった。

NOYA : 冗談。たかがゲーム。ゲームで勝っても負けても楽しめたらそれで勝ち

SM : その通りだな！だが俺は勝つのが好きだな！死んでも勝つ！

kei : 死ぬならおれは負けるのを選ぶよ

そう。楽しめたならそれで。

彼女は思った。何でだろうと。友達になれるはずだった、もしくは友達だった彼らに思いを巡らせた。一緒にクランを作って大会に出るために練習した日々。初めて勝利したあの日。世界大会に出ようと申請を出して興奮したあの日。

それが大会が進むにつれてお互いがギスギスしはじめののしりあった。

なんでだろうか。楽しめたならそれで、いいはずなのに。
たかが10万\$で、関係は崩れるのだろうか。

そんな場所に彼らを導いた。私の選択は間違っているのかもしれない。だけど彼らなら大丈夫だと、彼らなら私の好きな世界を好いてくれると、自分勝手ながら、そう思った。

間話 学校生活はどうですか

「異常者、異能者、超能者を囲むこの学園ですが、別に特別なナニ力があるわけではありません。普通に勉強して、普通に体を動かして」

志貴崎さん達との何とも濃い一日を終え、次の日学園に登校した俺は一時限目の授業が始まる前にここ、教員室へと連れてこられた。もうチャイムは鳴り一限目が始まっている事だろう。

ちよつと遅いがこの学園についての概要を説明してくれるそうだし……ちよつとどころじゃなく手遅れくらい遅い説明である。

「貴方は上山 沙紀さんのわがままで転入してきたわけだけれど、本当に何の能力もないのね」

「ええ。一般人の中でもさらに普通な一般人のテンプレートです。姉があれなので耐性だけがあります」

「みたいね」

ちなみに俺の対応をしてくれるのは、金髪に淡い青の瞳が美しい（あとおっぱいの大きい）白人教師さんだ。物腰に隙が無いのできつとただ者じゃ無い。

「既にランク5の能力者と交流があるようなので、ある程度のこの学園の事は知ってるわよね？」

「そうですね。ランクがあるとか彼らが『特別』だとか」

「そう。特別。正直この国には能力者はあまり居ないわ。そんな中で彼ら4人は突出してすさまじい能力を持っている。ちなみに彼らと同じランクの人はこの学園に何人かいるわ」

正確な数字を言わないのは、極秘事項か何かなのだろう。

「そもそも何故学園があるのでしょー！」

ビシィ！と指を指された。教師に指さされると何でこーう気持ちが悪くなるのだろう。

「ええと・・・管理しやすくするため？」

これだけの施設を作り、一手に能力者を引き受けるこの学園。思い浮かぶ理由と言えばこれくらいしかない。

「そうでーす！答えは管理と監視と保護のためです！」

「監視と保護？」

彼女の説明によると、能力者達は確かに強力であるがその絶対数は遙かに少ない。例えば志貴崎さんのような異常者が1万人そろえば、それは世界にとって驚異になるだろう。だけれど志貴崎さんみたいに戦闘に向いた能力者は日本だけで5人にも満たない。世界を合わせても50人いるかどうかも怪しい。じゃあそいつらが協力して世界にけんかを売るか？答えはNOである。そもそも50人集まったところで、戦車の主砲で吹っ飛ばされれば木っ端だ。

そもそも志貴崎さんは能力を酷使すると体がぼろぼろになる。常に最新鋭の医療施設を利用できる状態にないと彼は100%の力を使えない。国の支援が必要不可欠なのだ。

そして彼らは国にとって手放したくない駒。いつどこで拉致、暗殺、惑わされるかわかった物では無い。

そして学園が設立された。彼らを守るために。そして監視するために。

思えば監視カメラが目につく。と学園を移動中に思った。

「と、穏やかに彼らは過ごしていました、がつ！」

「が？」

「そこで入学してきたのが貴方！」

ビシィ！！と指を指された。

「はあ」

「今までランク5の人達はばらばらに行動して、特に接点はありませんでした。あっても知り合い、程度。強いて言えば山城さんと野谷さんくらいでしょうか」

「はあ」

「それがなんと！一同に会して能力を見せ合い、さらに街に出て行って仲良く遊んだそうじゃないですか！！」

「・・・はあ」

「しかもその中心人物はなんと一般人の貴方だと言っているのです！！」

「・・・はあ」

そんな興奮してまくし立てられても、それが一体なんだと言うのが良く分からない。皆で遊んだだけじゃないか。それに中心というより引率する保母さんの気持ちだったのだが。

「はー。いいですか？」

ランク5という存在は、ただそこに居ると言うだけで周囲は厳戒態勢を敷く物だそう。俺らが遊んでいる間に、二台のドクターヘリが動き、覆面警察官が20人出動し、衛生三機が緊急監視態勢へと移行し、バイオテロ対策部隊がスタンバイしたそう。他にも色

々あつたらしいが、ようはいたるところが大パニックになったよう
だ。

「そんなばかな」

引きつった笑みを見せる俺に、教師はにっこりと笑って素早く右
手を煌めかせて黒い固まりを俺の前に構えた。

――ピストル

「……………」

「今現在、貴方を国は判断しかねています。彼らにとって有益なの
か害なのか」

あまりの非現実性に目の前が真っ白になる。非現実。そう。非現実。
それならば。俺は巻き込まれたのだ。非現実に。そう『思い込ませ
る事にしよう』

「……あいつらをそんな物みたいに言うのはどうかと思いますよ」
「仕方ないでしょう。国はそういう物の見方しかできない。もちろ
ん私は彼らを大切な一人一人の人間として見てるわ。それでも、貴
方の答えを聞かないといけない」

青い瞳が俺を探る。俺の本心を奥の奥まで。そんな必死さが青い
瞳の揺れから感じられる気がした。

これは俺の『常識』じゃない。『現実』じゃない。『本当』じゃ
ない……。

必死に自分に言い聞かせて、俺は自分の本心を言うことにした。

「あいつらは別に友達が欲しかったただけだろ。タイミングがよかったんだ。単純に。俺は何もしていないし、これからも何もする気はない。何かの中心になることもこれからきつとないし、あいつらを引っ張るような事もきつと、ない。」

約束する。俺はあいつらに何かを強いたりはしない。

お願いはするかもしれないけれどね」

震える体を必死に押さえつけ、汗ばむ手を握り必死にこの非現実から逃げる。

「わかりました」

教師がピストルを元に戻した。プレッシャーが霧散する。

「実は国としても、彼らの能力と心のバランスをどう取るのか頭を悩ませていたところでした。そこで貴方がやってきて、ランク5の人々がお互いを認識して仲良しグループを作ってくれそうだと。言うことでテストしました」

恐らく銃を突きつけられる以外にも何かで俺の精神状態でも見られていたのだろう。冷や汗が背中を伝う。

「ちなみに変な事言ってたら？」

「内緒」

「ちよつと漏らして良いですか？」

「ダメ」

ため息をつきつつ思う。俺はもう常識に戻れないんだろうなあと。正直もうこの学園から、彼らから逃げ出したいという気持ちでいっぱいだが、それでも何故か彼らとの絆が大切な物のように思えた。

予感かもしれないし運命かもしれない。そういう不思議な気持ちを彼らに感じた。

「ちなみに私は虚実の異能者。ランクは3。本名は秘密。キャシーと呼んでね」

教師改めキャシーさんと軽く握手をする。彼女も能力者であっただけらしい。

虚実の異能者。本当か嘘かわかる異能。彼女は相手が嘘をついているのか本心で言っているのかがわかる。ただそれだけの能力。それゆえに虚実の異能者。彼女にとって相手の精神構造や理念を知る必要は無い。ただ面と向かって喋れば良い。それだけで嘘か誠か彼女に筒抜けとなる。科学的根拠は無し。だからこそ異能。

「そろそろ一時限目が終わるわ。もう戻って良いわよ」
「・・・失礼します」

とりあえず俺の疑念は晴れたらしい。特に注意も受けなかったので俺の本心をしりたかったただけなのだろう。

「どうしようかなあ」

頭痛の種がまた増えた。とりあえず忘れた方が身のためだと思い、俺はこの出来事を無かった事にした。

一限目終わりのチャイムが鳴るタイミングで教室へ戻ると、皆ちゃんと学校に登校していたようで席に着いている。・・・志貴崎さ

んは寝ている。

「どったのー？ 転入初日から遅刻なんて不良児ねっ」

「いやちよつと教員室に呼ばれて話聞いてた」

「ふーん」

席に戻ると同時に聞いてきた山城さんであったが、特に興味はなかったようで、次の授業の準備を始めた。

俺も続いて授業の準備をする。といってもタブレットPCを取り出して教科書データを読み込ませるだけだが。ちなみに俺と山城さんはノートに自分で書き取る派で、野谷さんはタブレットの教科書データに直接書き込む派のようだ。鬼谷さんはこっちは見えないな。志貴崎さんは・・・教科書すら広げない派か。

「今日は外で遊ばず、すぐ帰ってゲームするの？」

ふと思つた事を口に出す

「あーそれでもいいかもね。外で遊んじゃうと疲れちゃうし。私結構寝落ちするんだよね」

山城さんが振り向きつつ答えた。ツインテールが大きく回る。

「・・・それでもいい」

とりあえず授業が終わって昼食を皆で食べるときに意見を聞こうかな。

授業は滞り無く進んだ。俺の転校前の学校と特に進度は変わらないようだ。とりあえず安心だ。

授業中に改めて考えてみた。彼らの事。

まだ一日しかつきあいのない彼らの事。

正直どうしようかと思う。尊い存在だとはまだ思えない。親友ともまだ思えない。

下手な事をすれば命をかける事になるだろう。彼らとつきあっていくのが命がけだと言っのなら、実際遠慮してしまう。

だからといって、俺が今の俺のままであればそれで良いと思う。ただの友人として彼らと過ごしていけばそれで問題はないはずだ。

今はとりあえずそう答えを出しておいて、最終結論は未来に棚上げだ。それで良いと俺はこの時思った。自分でも後ろ向きな考えだと、そう思った。

三話 VRFPSをしよう初級編？（前書き）

ユニークアクセス100ありがとうございます。

三話 VRFPSをしよう初級編

「じゃあ、始める」

「はーい」

「もつと、お前らは屑だ！腐ったみかんだ！！みたいな感じにしないとだめだよ卯月い」

腐ったミカン置いておいて、俺らはVRFPS『HALLO POINT』の中にいた。

あたりは港のようだ。色々なコンテナがひしめき合い遠くには倉庫が見える。海の臭いの濃いちよつと霧の濃いフィールドだ。

今日は学園での授業が終わった時点で帰宅しこのゲームで皆で遊ぼうという事になった。何故か山城さんのテンションはマックスである。

皆防弾チョッキにヘルメットと、異様な光景となってしまった感じがする。ちなみに、山城さんはいつものポニーテールを少し下に下げてヘルメットから出しており、鬼谷さんはエディットで編集したのか、長い髪をショートカットに変更していた。

「一列に並んで」

「いえすまむ！」

野谷さんに言われたとおりに一列に並ぶ。山城さんはのりのりである。と、野谷さんの手に銃が握られていた。昔の映画とかで見るポピュラーなハンドガンだ。VR環境下だと野谷さんはいつものようにゆっくりではなく、迅速に動けるようで、その口調も昨日のゲームセンターで志貴崎さんと対戦してた時のようになっていた。

「このゲームは難しい。まず、体を撃たれると色々な障害が出る」

「パパパパン！」

「うお」

「にゃっ」

「きゃあ」

野谷さんの右手が一瞬で跳ね上がり、横ないだ。それと同時に俺の腕に衝撃が走った。腕を撃たれたらしい。目の前に広がるゲーム画面には、人間のマークがあり右手が真っ赤になっている。HPも20%ほど減少している。他の皆も同様のようだが、志貴崎さんだけが飛び退いてちよつと離れた位置にいた。

「む、よけたと思ったんだがなあ」

「一発外した」

どうやら野谷さんの一撃目を志貴崎さんは避けたが、避けた先で再度撃ち抜かれたらしい。どちらも人間じゃ無いな。

「何か金槌で殴られた感じがしましたね」

「銃を構えてみて」

言われたとおり銃を構える。すると、標準が合わずぐらぐら揺れる。

「腕が撃たれると、構えづらくなって狙いが付けられなくなる。体を撃たれると、呼吸がしにくくなり走れなくなる。足を撃たれると、歩いたり走ったりがむずかしくなる。頭を撃たれると、視界が真っ赤になり見えづらくなる」

野谷さんが言い終わるくらいのタイミングで、またもや右手が跳ね上がりハンドガンが発砲される。

パン！

次は右足への衝撃。

「うお！」

「歩いてみて」

いきなり発砲するのは止めて貰いたいが、言われたとおりに歩いてみる。左足を前へ、と、右足を動かそうとすると上手く動かず引きずるような形になってしまふ。

「攻撃されると、こんな感じで色々な支障が出て戦闘が続行し難くなる。どれだけ無傷で相手を倒せるかが鍵」

「なるほどー」

俺が昨日プレイしていたときは、敵の前に飛び出しとりあえず弾を全部撃ち付くすのを繰り返すばかりで、すぐしんだ。

「あと、その状況では体が大きく動くから色々な音が出て相手に見つかってしまう」

確かに。ちょっと歩くとずりずり、ずりずりと音が出て、ビッコを引くため体中の色々な物がぶつかりガチャガチャうるさい。

「上手なプレイヤーは移動中にあまり出さない」

野谷さんがその場で軽くくるくるとランニングする。チャッチャ

ツチャツチャと軽い音がするだけで俺とは大違いだ。

「へえー！」

山城さんと鬼谷さんはそれを見て、同じようにくるくる回った。ガツチャツガツチャガツチャガツチャと野谷さんよりも大体三倍くらい大きな音が出てしまっている。

「それくらい音がすると、相手に場所がばれてしまっただけで待ち伏せされる」

「それがかー。見つけた！と思ったなら相手が銃かまえてるんだよねー」

しばらくその場で山城さんがくるくる回る。音が出ない走り方を探しているようだ、が、一向に音が小さくならない。

「ねね、卯月。もっかいやってみて」

「わかった」

野谷さんがくるくる回っているのを山城さんがじっと見ている。

「おっけー！こうでしょ！」

山城さんが回り出す。今度はチャツチャツチャツと野谷さんとはほとんど同じ音になっている。

「すげえ！」

「へっへーん！伊達に役者やって無いぜ」

ぶいぶい！とピースサインを飛ばしながらにっこり山城さんが笑

う。見ただけで同じ動きをできるというのもすさまじい……。その後、ダメージをリセットしてしばらく皆で走り方の練習をした。走りながらできるだけ上体を動かさないようにする、というコツを掴んでからはかなり音がしなくなってきた。

あと志貴崎さんは速攻で飽きてコンテナを登ったりしていた。何であんな所に登れるんだ？

「次は武器」

s y s t e m - g o d m o d e
s y s t e m - a m m o m a x
s y s t e m - m a p | t e s t | f i r e l o a d

野谷さんが手元にウィンドーを表示して操作すると、システムメッセージが表示されてあたりの情景が一瞬で変わる。

薄暗い室内には長テーブルが一つ。その向こうには10個程度の的が設置されているだけの部屋だ。

「色々試して自分に合う物を選んだ方が早い」
「なるほど」

確かに一つ一つ銃の解説をされてもピンと来ない。実際に撃つて選んだ方がよさそうだ。

良く映画とかで見る木製の肩当てがあるライフル銃を手に取り、的に向かって撃つてみることにした、肩にしっかり抱き照準で狙いを定める。

ダダダダダダダダダダダダダダアン！

銃口の先から激しい火花を放ちながら銃が吠えた。衝撃はあまりないが、銃自体が暴れるというのか、二、三発目からは弾がどこに向かつて飛んでいくのか分からなくなり、対象を見失ってしまった。残弾表示を確認すると「16/31」となっていることから15発ほどはき出した事になるようだ。と、次の瞬間「31/31」とと残弾表示が切り替わった。どうやら弾が無くならないような設定にでもなってるらしい。

「撃ち過ぎ。的に近づいて弾痕を見てみて」

野谷さんに言われた通りに的に近づいて的に何発当たったのか確認してみる……。一発だけの中心部にあたり後はすべてばらばらに的を外れていた。傾向としてはどんどん上の方にずれて行っているようだ。

「見てて」

元の場所に戻った俺の横に立って野谷さんが銃を構える。プラスチックのような白い外観が特徴的なおもちゃみたいな印象の銃を構えている。

ババババババババン！！

俺の持っていた銃よりも短い間隔で弾がはき出される。野谷さんの銃は撃つたびに跳ね上がり、見る見る照準が上にずれていくのがよくわかる。

「フルオートで撃ち尽くすと上にずれていってあまり当たらない。撃つたびに位置調整が必要」

バババババババン！！

また同じように撃っているように見えるが、撃つたびに下にちよつと位置調整しているのだろうか。あまり上にぶれない。が、それでもだんだん銃口が上に向かっていているのがわかる。

「銃口から出る光で的が見えなくなる。この光を『マズルフラッシュ』という」

「なるほどー」

「これを回避するにはー」

ババツ！ババツ！ババツ！！

「二発から三発ずつ撃つ。バーストショットっていう撃ち方」

的に近づいて見ると、確かに全ての弾痕が的の中心付近に集まっていた。

「なるほどなー」

元の位置に戻ってもう一度銃を構える。

ダダン！ダダン！ダダン！！

よし。今度は的を見失わなかった。弾痕もちゃんと全体的に当たっている。

「ちなみに全部撃ちたい時はこうする」

野谷さんが腰に銃を抱えて、銃のトリガーを引いた。

バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
！！

見る見る間に的が弾痕にまみれていく。

「マズルフラッシュからの影響を受けないし、体全体で支えるから安定する。制圧射撃っていつて相手をビビらせる撃ち方」

「なるほどなあ」

銃の撃ち方一つをとっても、色々と奥が深いようだ。

その後は皆で色々な銃を手に取り試し打ちをした。銃というのは色々あつてマズルフラッシュを上方に噴射して銃口が跳ね上がるのを阻止する物があつたり、発砲間隔が短くなりすぎて暴れ回る銃、元からフルオートではなくバーストショットだけしかできない銃等々。

「ねーねー。この短いマシンガンはなんなのー？」

「忘れていた。銃器は基本的に五種類ある」

野谷さんの説明によると、大まかに銃器は五種類に分かれるらしい。ハンドガン、アサルトライフル、サブマシンガン、スナイパーライフル、ショットガンである。

ハンドガン：手に収まる単発式補助火器。基本的にハンドガンともう一つ銃器を持つて戦闘するのがこのゲームの基本。

アサルトライフ：主要武器。長い銃身は遠距離の敵も安定して狙撃する事ができる。短距離～中距離の幅広いレンジに対応。発砲間隔が短いのも特徴である、基本的にはこれを選んだ方が良い。

サブマシンガン：近接戦闘特化型の銃器。その小ささから都市戦

での基本的な装備となる。が、発砲間隔が多い、中距離以降へはいまいちな安定度。動き回る人向け。

スナイパーライフル：言わずもがな、遠距離専用武器。基本的に超長距離での暗殺用火器のため、市街地戦闘をテーマにしたこのゲームには不向きとなっている。発砲時の巨大な音は周りの人に気づかれ、一気に敵が群がってくる。弾も少ないが、その分ダメージもでかい。野谷さん曰くロマン武器だそうだ。

ショットガン：その名の通り近距離戦闘専用火器。発砲間隔が大きく、隙が大きくなる。

「変わり種でこういうのもある」

そういつて野谷さんはショットガンを一つ手に取った。何か丸い缶のような物が付いている。

ダンダンダンダン！

信じられないくらい早い間隔でショットガンから弾がはき出される。的が弾まみれになる。

「ドラム式。デメリットはこのドラムの大きさ。振り回す事が難しく携帯に不便」

どんなものにもメリットとデメリットはやっぱりあるようである。そんな訳で、俺と鬼谷さんがアサルトライフル、山城さんがサブマシンガンと決まった。山城さんはいけいけごーごーの精神でプレイするらしい。

と、野谷さんが装備しているのは彼女の身丈には少々（？）物騒なスナイパーライフルである。

「私はこれ」

心なしに胸を張って満足げである。うん子供が自分の自慢の物を見せてえばっているようで大変かわいらしい。

「思ったんだが、それで凄く遠くから狙うってのはどうなんだ？」

当然の考えである。後ろの方に引っ込んで敵が来るのを待ってそれを仕留める。ゲームの大半を隠れて待ちそんな気がするが、確実に勝てそう。

「構えてみて」

野谷さんから手渡され、スナイパーライフルを構える。大きなスコップが視界の半分以上を埋める。片目を強く閉じてスコップをのぞき込んだ。

的が目の前にあるように感じる。これなら遠くから狙っても敵を倒せそう。と、野谷さんが的の近くまで歩いてきたと思ったら的の前に立った。

「私を撃ってみて。ダメージは無いから大丈夫」

それならと遠慮無く撃つ。

ッダーン！！

轟音としか表現できないような音が耳元で鳴り響いた。

野谷さんは一歩右にずれており弾は当たらなかったようだ。

「これから歩いてそっちに向かうから、当ててみて」

気を取り直して狙いをさだめる、が、野谷さんがスコープの中から消えた。あ、いた。あ、消えた。あれ？俺今どこ見てるんだ？完全に野谷さんを見失った。

「はい」

「うお！」

野谷さんに肩を叩かれた。どうやら俺が慌てている間に俺の横まで歩いてきたようだ。

「遠くの物は確かに撃ちやすい。けどちょっと対象が動いただけですぐ外れる。遠くの物を撃とうとすると、ちよつとのズレが命取りになる。そして外すと間違はなく敵にはれる。敵はすぐに隠れてもうそのポイントから敵は顔を出さない」

「なるほど」

スナイパーライフルがロマン武器だという事が良く分かった。後方からの狙撃がダメならその超火力で中距離での戦闘を強いられてしまっわけだ。そのスナイパーライフルを自分の獲物だと胸を張る野谷さんの力量ってば一体……。

三話 VRFPSをしよう初級編

「できた！」

今まで静かに隅で何かをしていた志貴崎さんが突然声を上げた。どうやら自分の装備を色々試していたらしい。

見ると半袖のＴシャツの上に一番軽量の防弾ベスト。左手にサイレンサー付きハンドガン、右手にナイフが握られている。手榴弾は、フラググレネード二発にフラッシュ発。それが志貴崎さんの装備の全てだった。

「・・・マシンガンとかは？」

「ないっ！」

ニカツと良い笑顔をされても困る。

「見ろ見ろ。こんなグローブがあつてだな」

そういつつ志貴崎さんが右手を広げる。ナイフが手にあるが、志貴崎さんが手を振っても何をしてもしそのナイフは手から離れない。どうやら手の平にナイフが縫い付けられている物のようだ。

「少年兵とかな、良くこうやって居るんだ。多分握力を補うためだろう。それにだなー」

と志貴崎さんがその場でジャンプした。音が全然しない。

「これでは完全に無音で移動できるぞ！」

そもそも少年兵が良くそうしているとか何でそんなの知ってるんだとか、音がしないぞとか言う以前に何その紙装甲とか色々突っ込みどころ満載だが、まあ本人がそれで良いなら良いだろう。

「まあ志貴崎さんがそれで良いなら良いんじゃないか？」

「ふふん。まあ見ている。さつき色々動いて大体このゲームでできる事も分かったからな」

「自分でこれだって思った組み合わせがあるなら、それが正解。間違っていたらすぐ変えれば良い」

野谷さんはそんな俺たちのやりとりを微笑みながら眺めていた。

「じゃあ簡単にルールを説明してBOTと勝負してみる」

「「「「はい」」」」

場所を元の港に戻して野谷さんの話に耳を傾ける。ちなみにBOTとはロボットの略称で、AI操作のアバターの事だ。人間に近い動きをしレベルを設定する事によって、烏合の集から軍隊レベルまで幅広い難易度を設定する事ができる。

「私たちは今テロリスト。マップには爆発対象が二カ所ある。あそことあそこ。AポイントとBポイント」

ふむふむ。Aポイントはコンテナが密集した場所で、Bポイントは倉庫の中のような。それぞれミニマップに表示されているので大体どこにあるのがマップを歩いて回らなくても分かる。

「テロリストはこの爆弾をAかBのポイントに持って行って設置して爆発させるのが目的。もしくは相手のカウンターテロリスト・・・警察か軍隊みたいなのを全部倒せばいい」

野谷さんがくるつと後ろを向くと、ランドセルのようにしてコケ色のバックを背負っている。つまりこれが爆弾なのだろう。

そのまま野谷さんがスタスタとBポイントの方に歩き出すので俺たちもついて行く。倉庫の中に入りこそごとと爆弾を設置させる野谷さん。といっても爆弾を下ろして真ん中のボタンのような物の上に手をのせるだけでいいようだ。

ビー！ビー！ビー！

野谷さんが数秒そうしていると、突然あたりに警報が鳴り響いた。ミニマップを見るとBポイントが真っ赤に光っている

「これで爆弾が設置された。40秒で爆発するから、私たちはこれを死守する。この時私たちが全滅しても私たちの負けにはならない。私たちが全滅しても爆弾が爆発したら私たちの勝ちとなる」

「つまり爆弾を設置するまでに全滅すると負け。爆弾を設置した後全滅したとしても、爆弾が爆発すれば勝ちなわけだから、爆弾を設置したら玉砕覚悟で当たって砕けるわけだな」

「そんな感じ。爆弾を設置したあとどういった対応をするのか、それはその時によって色々あるから、やって覚えるしかない」

何事も経験であるということか。のんびり爆弾のまえで会話しているどこからともなく、ガツチャガツチャと音が聞こえてきた。

音の方向を見ていると、ハンドガンを構えた人が倉庫の中に入ってきた。そのまま俺たちを押しつけて爆弾に近寄る。爆弾に手の平を置いてそのまま数秒じつとしている。

「こんな感じで解除されると残兵がいたとしても私たちの負けとなる」

・カウンターテロリスト ウィン

野谷さんが言い終わるのと同時に爆弾が解除されたようだ。相手が勝利したとアナウンスが流れ、ゲーム画面の隅の方のスコア表に「0-1」という表記が書かれている。しばらく経つと、目の前がブラックアウト、次の瞬間には一番最初に居た位置へと戻される。

「爆発物は一度しか仕掛けられないわけだな」

「そう」

「ふむふむーなんとなくわかったよー！」

「野谷さんの説明はわかりやすいですね」

「うむ。敵を全て殺せばいいわけだ！」

「違うわっ」

「そんなこと、ない」

野谷さんは照れてうつむいた。大きなスナイパーライフルとの対比が昨日以上に彼女を小さく見せているように感じた。思わず手が出て野谷さんの頭をなでしてしまう。ヘルメットごしであるが。

「!？」

野谷さんがびくつと肩をふるわせて固まってしまった。

「わ、悪い。つい」

「何がついなのー。私はなでてくれなかったのに。」

野谷さんは小さく首を振るわせてうつむいてしまった。山城さんがブーっとふくれていたが、次の瞬間にやにやーっと意地の悪い笑みを浮かべる。

「今日の成績よかったら私もなでてもらおう」と

「あら、それはいいですね」

とんでもないことを言い出した山城さんにそれに追順しちゃう鬼谷さん。

「何だ。なでて欲しいのか。どれ」

志貴崎さんがぬうつと手を出してきて鬼谷さんと山城さんをぐり撫で回した。

「ちょ、わ、わー!」

「きゃあ!や、やあ」

結構な勢いでぐりぐりやられているので二人とも頭がぐりんぐりん回っている。おお、これだけ余裕の無い鬼谷さんは今後あまり見れない気がする。

「はっはっはー!いやあ。どうだ。撫でられた気分は!」

「・・・ありがとう。これは、お礼、ね!」

はあはあと肩で息をする山城さん。鬼谷さんは目を回しているようにうつむいて何も喋らない。

山城さんは背中に手を向けて自分の獲物を回す。肩を主軸にサブマシンガンがくるっと回転。一瞬で山城さんの射撃体勢が整う。野谷さんのお手本通りの綺麗な腰だめ、制圧射撃の構えである。制圧

射撃は銃身がぶれ精密射撃ができないため基本的に体を撃つ。が、山城さんはもつと下、志貴崎さんの足下へと銃口を向ける。

「踊れ！弾に酔って溺れる！」

パパパパパパパパパパパパパパパパパン！

「ぬお！？何故だ！」

山城さんの容赦の無い発砲に志貴崎さんがたまらず回転、転がりながら物陰へと向かう。山城さんもそれを追いかける。野谷さん伝授のお手本通りの走りは、昨日今日でこのゲームを始めたとは思えないほど様になっていた。

パパパパパパパパパン！ガチッガチガチ！！

弾を出し切ったようで、何度もトリガーを引く山城さん。口元から「チィッ」と舌打ちまでしてやがる。こええ。

その瞬間山城さんの横に出る影。鬼谷さんだ。アサルトライフルを腰に構え、こちらも制圧射撃の構え。・・・というか足音完全に消えてたな。無表情でトリガーを引く。

ババババババババババババババババ！！

完璧な入れ替わりである。^{スイッチ}鬼谷さんの動きの意図に気づいた山城さんはすぐに弾倉を排除、リロードを開始。システムアシストにより最適化された動きが自動的に次の弾倉をつかみ取り、銃に装填。銃撃音に紛れて志貴崎さんの声がかすかに聞こえる。

ババババババババババババババババ！！

が、志貴崎さんが何を言ってるのかこちらからは全く聞こえない。
まだ続く射撃音に、まだ少し猶予があると判断した山城さんは、
腰からフラッシュバンを取り出し、ピンを抜いて放り投げる。

パン！！

とつさに二人とも背中を向け鬼谷さんがリロードを開始。山城さんは元の方方向に向き直り、制圧射撃をしながらゆっくりと対象物へと近づいていく。

パパパパパパパパパパパパパパパ！！

そこにはフラッシュバンによって視覚と聴覚を失いうずくまった志貴崎さんがいた。

静かに、そして的確な動作で山城さんはフラググレネードを取り出してピンを抜いた。そのまま志貴崎さんの頭の上に乗せる。

その姿に満足して山城さんは鬼谷さんにアイコンタクト。うなずき合ってこちらに戻ってきた。

ドバン！！

約二秒後爆発音。フラググレネードが爆発したのだらう。・・・
恐ろしい連携プレイであった。ちなみにこのゲームはフレンドリー同士
ファイヤ無しである。

「すごいな・・・いや、ひどいな・・・」

と、あまりの光景にありきたりな言葉しか出ない俺の服を、引つ

張る感触があった。

「あ、頭なでも大丈夫だから・・・」

顔を真つ赤にして野谷さんがうつむきながら俺の服を引っ張っていた。どうやら先ほど俺が頭を撫でて謝った事を気にしているらしかった。かわいすぎてどういった反応が正解なのかが良く分からなかった。

「う、うん」

とりあえずそれだけ返すのが精一杯だった。どうすればベストな対応になるのでしょうか。教えて？皆さん。

「もー、あんなにぐりぐりやるもんじゃないでしょー！！！」

「そうです。女の子は大切に扱うべきです」

数分後、志貴崎さんを正座させて山城さんと鬼谷さんは『女の子はいかに大切に扱うべきか』というお題で説教をしていた。志貴崎さんは始終頭の上に疑問符が出ているが。

「これはあれだね！全然だめだね！理解してないとみたね！！」

「そうですね」

「圭！！」

「はい！？」

いきなり話を振られた俺は、先ほどの山城さんと鬼谷さんの連携

プレイを見ていただけに震え上がる。

「卯月をなでなでしなさい！」

「はい！」

言われるままに野谷さんを撫でてしまった。静観モードだった俺と野谷さんはヘルメットを外してくつろぎ中だったため、手に野谷さんの髪の感触が伝わってくる。VR環境下であるためあまりリアルな感触では無いが。

野谷さんはいきなりの事にビクツと体が震えたが、そのまま目を細めて気持ちよさそうにしていた。嫌ではないようなのでよかった。

「わかった？あれがなでなでだよ！！」

「ふむ」

俺のやり方を見ていた志貴崎さんは、数秒じいつと観察していたと思うと、いきなり立ち上がって山城さんに手を置いた。

「こうだな？」

そのままゆっくりと山城さんをヘルメットの上から撫でた

「ち！お、おう・・・」

一瞬テンションマックスになりそうだった山城さんが沈静化した。「なんか違う・・・」と困惑顔だ。鬼谷さんはそれを見てくすくす笑っている。

何か最初と話が違う形になっている気がするが、まあいいか。

テロテローン[♪]

志貴崎 桜は技能『女の子の扱い：レベル1』を習得した

そついう話じゃないし、何かエロチックだし。

三話 VRFPSをしよう初級編? (前書き)

1000PVありがとうございます。

マップの絵を描いてみました。え?へたくそ?志貴崎さんの力作ですよ。ぶんぶん

<http://4511.mitemin.net/i36049/>

三話 V R F P Sをしよう初級編？

3

2

1

0

眼前に広がるカウントダウンが0となる。それを確認して志貴崎は全速力で駆け出した。足元の砂利がガシャガシャと爆ぜる。

「はええ！！」

後ろから圭の驚愕を含んだ声が聞こえた。軽量装備のせいだろう。既に結構な距離ができていと予想される。

このマップは先ほど確認したところ、敵のカウンターテロリストのスタート地点がAポイントBポイントに近い位置にあり、速攻で陣地展開、スタンバイできる位置にあるらしい。ゲームの趣旨からすると当たり前なことだが。

全体的なマップ構成としては、テロリストはスタート地点からまず、コンテナ置き場を越えて二階建の建物へとぶつかる。そこから建物の中を進んで向こう側へ出れば、小さな広場をはさんでもう一つ二階建の建物があり、その向こうがAポイントのある倉庫だ。皆で話し合ってこれらのシチュエーションの名前を、『テロ側コンテナ』『テロ側建物』『挟み広場』『軍側建物』と共有しあっている。そして『テロ側建物』に入らず左に折れると、Bポイントがある

コンテナ密集地点となっている。ここは名前を『Bコンテナ』とした。また、そこからは『テロ側建物』『挟み広場』『軍側建物』が一望できるような配置となっている。

今回はそのまま『テロ側建物』へ特攻。走りを止めないまま腰にあるスモークを手取る。ちなみに今回はスモーク二発にフラッシュ一発にしてみた。『挟み広場』に放り投げ、勢いを止めないままに躍り出る。それと同時に煙幕が吐き出される。

煙幕で前が見えなくなるが感覚で直進。『軍側建物』の側面に打ち付けられた、配管類につかまりスピードと力任せに上へと上る。手と足を同時に動かし一気に屋根上へ。少し休憩しスタミナゲージが回復するのをしばし待つ。その間に屋根へ耳を押し付けて中の様子を探る……。ガチャガチャ音が鳴っているので敵が室内にいるのは間違いなさそうだ。

スタミナゲージが満タンになったのを目の端で確認。屋根をそろそろと進んで縁まで到着。ここからだとAポイントのある倉庫が丸見えだ。が、まずはこの建物の掃除が先。フラッシュバンを手にとり、縁から顔を出して窓の位置を確認。既に物音はしなくなっているが、構わず窓へとフラッシュバンを投げ入れた。

パン！

フラッシュバンの破裂音を聞く前には既に、志貴崎は空中に身を投げていた。そのままだと地面に激突してしまうが、志貴崎の右腕が太陽光に反射しながら屋根の縁に突きつけられた。屋根の縁には排水用の溝。見た目的にはプラスチック製だろう。それが志貴崎のナイフに突き立てられて「ガリイ！」と音を立てた。……。それだけで溝は破壊されず歪みもしない。

——予想通りだ

志貴崎は猛禽類の笑みを見せながら思った。これはゲームである。もちろんリアルできてVRできない事がたくさんある。が、逆もある。『VRできてリアルできない事』。まさに今志貴崎がしているアクションがそれである。おそらく上空に張り巡らされた電線も、バランスを崩さなければ踏破できるだろう。

志貴崎は以前VR環境下で結構な日数『住んだ』事がある。彼が最初に行った行動は『現実』と『VR』の違いを知ることであった。それが今回は大いに役に立つ形となった。特殊なナイフつき手袋は、しっかりと志貴崎の全体重を乗せて悲鳴一つ上げずに、志貴崎の体をナイフを軸にぐるっと回転させた。つまりは窓へと向かって。

建物の中へ窓を経由して豪快に進入。盛大な音が出るが、フラッシュバンにより視覚と聴覚を失った敵は地面にうずくまっていた。とりあえず今眼前にいるのは二人。

敵の姿を認識すると、一人へハンドガンに向けて発砲。何発頭に撃ちこめば死ぬのか、良くわからないのでとりあえず4発ほど撃ちこんだ。「キュンキュン」というサプレッサー独特の音が手元で響く。その間に半端無意識に右手が煌きもう一人の首を撫でた。

SM 「Glock」 Been BOT
SM 「Knife」 Jones BOT

どうやら二人ともきっかり『死んで』くれたらしい。ハンドガンの弾はあと13発。十分だと判断。

ガツチャガツチャツガチャ

下から足音が聞こえる。どうやら下で待ち伏せしていたらしい。

フラッシュの音と物音に気がついて、こちらに向かっているのだろう。相手が戦闘態勢を取る前にこちらから突撃する事にする。できるだけ足音立てないように、階段へと向かう。さらに敵の歩幅に合わせることで完全に敵の足音と志貴崎の足音が混ざる。

ほっぷ

すてっぷ

じゃんぷ！

この『体』最大の力で階段を飛び降りる。敵はちょうど階段を上ってる途中で、あわてたように銃を構えようとするが！。

——遅い！

ジャンプの時に、既に敵の大体の位置を予測し銃口を向けていた志貴崎は、敵を認識して銃口を微調整。跳躍しながらの射撃は不安定なのは分かっているので撃てる分だけ撃つ事にした。頭はずし易いので体へ向けて発砲する。

キンキンキンキンキンキン

死亡確認のログを確認するのも煩わしいので、すれ違い様に敵の首を右手で撫でる。そのまま一階へと着地。手早くハンドガンのリロードをしながらログを確認。

SM 「Glock」 Elie BOT

ハンドガンのみでいけていたようだ。とりあえずこれで三人。建

物の中をささつと確認。安全なようなので声を出してもよさそうだ。

「軍側建物、敵を掃除した」

とりあえず今倒した敵から武器を奪う。照準器付アサルトライフルに、志貴崎の物と同じハンドガンを持っていた。ありがたく弾倉だけ頂戴する。油断なくアサルトライフルを構えて、二階へと引き返して、あたりの注意を探る。とりあえずAポイントはここからだと見えない。Bポイントに敵はいないようだが、さて。どうするか。

とりあえず指示を待つことにした。

「はええ!!」

志貴崎さんはすさまじい勢いで走っていくと、そのまま『テロ側建物』へと消えていった。装備を極限まで削るとあそこまで早くなるのか!!

「俺らも続くか？」

「離れすぎてる。ここは左へ折れてBポイントを攻める」

なるほど。志貴崎さんが囷となって暴れる間にこちらはBポイン

トへと着実に攻撃を加えるわけだ。

「それなら私が前へ出る！」

二番目に軽量装備の山城さんが全力疾走へと移る。足音が盛大になるが、志貴崎さんが向かった方から、スモーク音やら破裂音が聞こえてくるから、相手の注意も散漫になっているだろう。

「スモーク」

野谷さんの一言で俺は腰からスモークを取り出して、がむしゃらにBポイントへ向かって投げる。鬼谷さんも野谷さんも投げたように、合計三本の煙幕が尾を引いて落ちていった。煙幕が広がり山城さんの道を作る。

山城さんが煙幕の中に突っ込んだのを確認しつつ、自分も煙幕の中へ。おお、なんもみえねえ。GUIに表示されているミニマップを頼りに進む。仲間の位置も同時にマップには表示されるので、はぐれることもない。そのまま俺たち四人は一列の蛇のように煙幕の中を進みBポイントまで到達した。スモークグレネードがいい形で落ちたようだ。継ぎ目の一切無い完璧な形の煙幕となっていた。

今回は俺が爆弾を持っていたので、そのまま設置に移る。煙幕を完璧に張ったので、敵はまだ俺たちを発見できていないらしい。む、山城さんがそのままBポイントをスルーして走っていった。『Bコンテナ』向こう側の敵が居ないのかも確認してくるようだ。

パパパパパン！パパン！！

「りゃああああー！」

山城さんの雄叫びが上がった。画面にもしっかり

M i k i「U M P」 N i k e B O T

と表示されていた。勇ましすぎです山城さん。

「軍側建物、敵を掃除した」

と、そこで志貴崎さんの声がインカム越しに聞こえてきた。ログを見ると志貴崎さんが三人倒したという表示が出ている。どういう動きしてたんだ？あの人。

ビー！ビー！ビー！

警報音が当たりに鳴り響き始める。爆弾の設置が完了したのだ。敵はあと一人だが油断できない。

「桜はそのまま、その建物からAポイントへと向かって。隠れなくても良い。敵がいたらそのまま対峙。敵がいなければAポイント経由でBポイントまでダッシュ」

「了解」

野谷さんが的確な指示を飛ばす。俺たちは散開して敵が来そうな場所へと銃を向け警戒。と、『テロ側建物』から敵が出てくるのが見えた。どうやら入れ替わりで一人いたらしい。爆弾は仕掛けたので時間稼ぎに徹する。

ババン！・・・ババン！！

一秒ほどの間隔を開けて弾を切らさないように発砲。敵は慌てて

『テロ側建物』へと引き返した。敵が頭を出せないように弾幕も張ってみた。

「テロ側建物に敵が入ってる。裏から出てくるかも」

「圭、変わって。テロ建物裏から回ってこないか見てて」

「お、了解」

野谷さんと持ち場を入れ替わる。コンテナ裏から敵がやってこないか警戒しつつ、野谷さんがどういうプレイで敵を待つのか参考程度にちらちらと観察する。

コンテナから体を半分だけ露出させて、脱力。自然体へ。どんな動きへも速攻で対応できるように。右手にぶら下がる『こいつ』の重さも気にならなくなる。

周り全ての動きが遅くなる『イメージ』。

相手はどうするつもりなんだろう。

私ならどうするだろう。

考えても無駄。

だったら見えてから動けば良い。誰よりも早く。速く。疾く！

壁から敵のヘルメットのアゴヒモが見えた。次はヘルメットの唾。
じゃあ次は？

・・・・・・目

そう脳が認識していた時には、腕は跳ね上がってスコープが目の前に。もう目を閉じたってわかる。だけど念のために、念のためにさあ、両目を見開いて。

足を引いてしっかりと地面に『釘付け』する。ずれないように、ぶれないように。

若干遅れて左手がしっかりと銃を支える。ずれないように、ぶれないように。

相手の目を撃ち抜くために。

まだ敵は『まつげ』すら壁から出していない。だけどそれでいい。きつと出す。きつと出すから。

脳が『動け』と信号を出すと、何秒後に体は動くのだろうか。いつも不思議に思う。どうして私の体はこうも遅いのかと。

いつも不思議に思う。私の口はどうしてこんなに遅く動くのかと。

じゃあきつと、このままでいれば脳に合わせて体が速く動かせる

日が来るだろう。そう思っているがその日は未だ来ない。

現実の私は、いつまで経っても脳に追いつけない。

そして今、私は『VRの体』すらも置き去りにして脳を動かす。
さあ。

『・・・動け』

ッ
ダーン!!

NOYA「M98B」Deeney BOT

- テロリスト ウイン

俺と立ち位置を変えた野谷さんは、数秒コンテナから体を半身出して棒立ちしていたと思ったら、いきなり腕を跳ね上げて発砲した。あまりの早さに、全身がぶれているような錯覚まで見えるようだった。

「すげー」

「はー・・・」

もうこの人達に向かって何回「すげー」って言ったか分からないな。これからも言い続けるのだろう。感嘆のボキャブラリ増やした方がいいですかね？俺。

鬼谷さんも目を見開いて驚いている。

「さあ、次行ってみよう」

ちょっと照れて、頬を染めながらピースサインをする野谷さんは、鈍色の黒い銃がとても似合っただけ綺麗だな、と思った。

三話の青春度は何点ですか？

kei : 俺全然だめだった

iris : お帰りなさい、圭。

kei : こんばんわ。irisさん。

その後もBOTと対戦を続け、山城さんは雄叫びを上げながら特攻、志貴崎さんは安定して暗殺しまくり、野谷さんは100発100中、鬼谷さんは基本に忠実といった感じでスコアを伸ばしていた。だがまあ、俺は普通といえば普通にパツとせず、やられるときはやられて、倒せる時は倒せた、というような感じだった。場数が必要なのだろうか。

特に志貴崎さんは、すいすい建物の壁面を登っていた。俺もやってみたが、システムアシストを駆使しても無理だった。むしろ志貴崎さんが言うにはシステムアシストは邪魔で、『HALLOPOINTの体』で登れる場所を正確に掴んでいかないと登ることは無理らしい。

野谷さんの話によると、実際に軍に所属している人がプレイしていると、ああいったことができる人がたまにいるらしい。志貴崎さん恐るべし。

Miki : 圭はあれだね。早さが足りない（キリッ

iris : お帰りなさい、ミキ。

kei : 早さが（笑）

iris : 足りない（笑）

irisさんが乗ってくるとは思わなかった。

NOYA : 大丈夫。練習すればすぐ敵を沢山殺せるようになる。
iris : お帰りなさい、卯月。
kei : 何か俺が沢山人殺したいみたいな言い方やめて？
iris : 大丈夫です。ウヅキニタイナンテアリマセンカラ
kei : 何でカタコトなんだよ！
NOYA : /kick iris
system : error

何か一日に一回野谷さんがシステムコマンドで弾かれるのが定番になりそうだな。

nagi : お疲れ様でした
iris : お帰りなさい、凧。
nagi : ただいま
kei : あれ？志貴崎さんは？
iris : メッセージがあります『しばらくデスマッチルールで遊んでくる。』

Miki : デスマッチって何？
kei : あれ以上まだやるのか。俺はもうへとへとだよ。
NOYA : 何回死んでも生き返るルール。敵を倒した数を競う。
Miki : へー

極度の緊張状態から体が解放されて、節々がギシギシ言っている気がする。少しストレッチしよう。

そして志貴崎さんはどんどんirisの扱いが上手になっていく。伝言なんてどうやってるんだ？

nagi : 楽しいですね。VRFPS。
Miki : ねー！ちょこちょこみんなであそぼー
kei : そうだな。練習して次はもっと良い成績を残すぜ。

NOYA : 期待してる。

Miki : タノシミニシテルネ

kei : 畜生！

くそう。今に見ておれ……。

Miki : 今日は何点？

nagi : ？

kei : ？

Miki : 青春点だよー

kei : ああ、あれか。恒例にするのか？これ

Miki : いいじゃないじゃないー

iris : メッセージがあります『俺は60点だ！』

どんだけ使いこなしてるんだよ。どん引きだよ

kei : うーん皆の凄い動き見たからなあ。70点

Miki : 私は普通だったかな。楽しかったけれどね！50点！

NOYA : 皆とゲームできて楽しかった。80点

nagi : 昨日と同じくらい楽しめました。70点です

それぞれ点数を決める基準があるようだ。まあ、ちゃんと自分を
持っているって事なんだろうな！。

Miki : 明日何しようかー

nagi : カラオケでも行きましょうか？

ふむ。明日何をするのかという話になっているようだ。ま、何を
するにしてもどたばた騒ぎになりそうな予感がするな。

k e i :じゃあ皆でやりたい事を考えて明日話し合っつてことで
n a g i :それは楽しそうですね！
M i k i :いいじゃーん！
N O Y A :わかった

その後、まあだらだらと会話してしたあと、自然と解散となった。

――二時間後――

S M :なるほど、明日は何か希望を皆で考えて持ち寄るのか
i r i s :お帰りなさい、桜。
S M :お、i r i sさんチョコ届いた。中々おいしかったで
す。

i r i s :そうですか、何よりです
S M :うーん。何がいいかなあ。

S M :^^p^^/
i r i s :なんですか？それは

S M :テレビでやってた。意味はよくわからん。

i r i s :検索。「^^p^^」

i r i s :結果。「あうあうあー」

S M :あうあうあー？

i r i s :あうあうあー

S M :^^p^^/あうあうあー

i r i s :^^p^^

k e i :何やってんだよ

どん引きだよ。

風呂に入ってる間に何かログがひどい事になってるし。何か今日のi r i sさんは全体的に酷いな。なんか。

S M : まあ、あうあうあーは置いておいてだな。

もう出さなくていいからな。「あうあうあー」は

S M : 口の中にチョコ入れながらVRに入れば、ずっとチョコ

食べれてお腹減らないんじゃないのかって思ったんだが

k e i : 嫌な予感しかない

S M : 洋服が……

k e i : ……

何でこの人は、こうも面白い事ばかりやってのけるんだろうか。

S M : お母さんどうしよう

k e i : さっさと洗濯しなさい。確かぬるま湯に漬け込めば大丈夫だったような？irisさん何かある？

i r i s : 検索。「チョコレート 汚れ 洗濯方法」

i r i s : 結果。「試せば合点、第5674回、チョコレート汚れなんか真っ白ぴかぴか！」「アドレス

S M : ありがとうございます！！

まあ、明日も退屈せずにすみそうだ。ちなみにこれって青春なん
でしょうか？皆さん。

聞話 ケーキはとってもおいしいんですよ？

皆が部屋への接続を切った後、irisは『一人』部屋の整理をしていた。『HALL POINT』と部屋のポータルを無理やり開いたので、キャッシュでごちゃごちゃしているのだ。卯月の新しい友達がどういう人たちか、知るヒントも沢山あった。

と、卯月が何か新しいプログラムを『部屋』に拡張しようとして四苦八苦しているようだ。・・・どうやらkickコマンドと「log deleteコマンド《記録消去》を導入しようとしているらしい。永久追放banコマンドを入れない所が卯月の優しさか。

そもそもirisが煩わしかったら、その場でiris自体を部屋から外せばいいだけなのだ。二人『らしい』コミュニケーションといった所だろうか。

まあ、導入されると色々としめなくなるので、片手間でプログラムを弾いて行く。

「・・・何で」

卯月の狼狽が面白い。

irisはirisで、ここを『自分の空間』にしようと考えていた。皆でくつろぐ一日の最後に訪れる場所。帰ってくる場所になればいいな、と思った。だから誰かがログを残すと返事を返す。「お帰りなさい」と。

最初は特に何も考えておらず、自然とこの言葉が出たが、きつと最初からそうだった感情がどこかにあったのだと思う。ケーキが無いのが、少し残念。

と、誰かが部屋へとアクセスしてきたIPを確認。これは凧か。

「irisさんいませんか？」

VR環境下での接続により、凧のアバターが表示される。この時irisは初めて凧の外観を認識した。銀髪にすらりとした体、大きめな胸は高校1年としてはなかなか发育した体をしていた。恐らく『現実』での彼女も同じ外見をしているだろう。

「どうかしましたか？凧。私はここに常駐していますので、いつでも居ます」

礼儀としてこちらも体を表示する。といっても現在特にアバターを設定しているわけではないので、光る発光体としての姿しかないが。

「すみません。ごちゃごちゃしていて。現在、皆がゲームで遊んでいた時のキャッシュを整理中ですので、それにまだ、部屋にはテクスチャーを張っていなかったので簡素ですね。ケーキもありません」

VR接続で誰かが来るのは、もつと先の事だと思っていたので、部屋は白一色のテクスチャーだ。それにキャッシュファイルを整理するために掘り返していたので、辺りにファイルが散乱している。

「ふふ、構いません。ケーキは今度ごちそうになります。にしてもファイルを実体化させて整理してるんですね？」

凧は、irisがわざわざファイルを部屋へと実体化させている事に驚いているようだ。まあ、無理も無いのは頷ける。普通だとシステムの裏側で半自動的に行うような処理のはずだからだ。

「そうですね。とても非効率です。ですがまあ、様式美という物ですよ」

「なるほど。様式美ですか」

凧は楽しそうにうなずいている。本当はキャッシュファイルの中の皆の動きや会話ログを覗き見て楽しんでいたから、という理由もあるのだが。irisは言わない事にした。

「ところで、ちょっといいですか？」
「？」

凧の唇が音を出さずに動いて「ないしょの」と形を作った。irisは一瞬思案するが、凧のIPを逆探、接続ラインを検証。その中にirisが管轄しているプロキシを見つけたので、そこから経路を一瞬切断。すぐに繋げてirisと直結させた。

これで凧は『部屋』から強制切断された形となり、irisへと再接続されたことになる。

「これで内緒の話ができます。私の中なので私は姿を出せませんが」
「こんな事もできるんですね！」

「裏技です。卯月も知りません。・・・内緒ですよ？」

「ええ」

凧は、楽しそうにくすくすと笑った。

「昨日から、少し思うところがあつて。貴方と野谷さんについて」
「何でしょうか」

「貴方から『人』を感じます。それも野谷さんと同じ」

凧は、探るような目で一点を見ていた。irisが体を表示できない以上、その目の先には何も無いが。また、私から『人』を感じるといのは、つまり私の中身について大体の見当がついているのだろう。

「野谷から少しだけお話を聞いております。電磁波の超能者だと」「ええ、そうです。そして『人』の考えがわかってしまいます」「なるほど」

凧は沈黙して、目を閉じた。言葉を選んでいるようだ。irisはそれで何となく何を言いたいのかがわかった気がした。

「私は卯月に育てられた『命を持った』AIです。私はAIであり、プログラムであり、ネットワークであり、1であって、0でもあり、そしてその間を選択できる者です。そして、卯月から生まれ、卯月に育てられ、卯月となり、自分を得ました。私は『iris』。人に作られ、人に縛られない。人造知的生命体。そのプロトタイプ」
「.....」

「それで、私に何を聞きたいのでしょうか。凧」

——貴方が聞きたいのはこんな下らない事ではないのでしょうか？

「私はこの能力が、VR環境下でも使えます。少し特殊な形ですが、私は警察に協力して、いくつかの事件を追っています。その中にVR環境下でネットワーク上のファイルを開くと、利用者とリンクし、寝たきりになる事件がありました。強制的に回線を切断したり、10時間以上経過すると皆目を覚ますため、まだ死者は出ていません。

彼らは何か巨大なサーバーへと接続されています」

「アクセスは？」

「試みては見たようですが、無理だったようです。サーバー本体の発見にも至っていません。サーバーは約13時間ごとに移動して足取りもまったく」

「元となるファイルは？」

「ファイルサーバーからのダウンロードする形ですが、10回の限定ダウンロード、ファイルを開かなければ2時間で効果が無くなり、利用者は記憶に混濁が見られて結局どういった物なのか分からずじまい」

「悪影響は？」

「ありません……。いまのところ、は
なるほど」

奇妙な事件である。が、ありえなくはない、とirisは考える。恐らくVR接続による強制的な接続のロックだろう。PC機器には、もともとあまりに長時間のログインをさせないために、いくつかの安全装置が施されている。また、寝たりすると思考パルスが弱まりPCから接続が解除される。まあざっと検索してみると、その安全装置すらはずして、VR環境下に入り続け死亡するという事件が何件があるが。それは特殊な例でもあるだろう。

意図としては、人の脳の反応を調べたり、VR環境下での特殊な人体実験と言った所だろうか。記憶を消してくれる辺り、まだ『優しい』部類だと思われ、丁寧さを感じられる。どこかの国の研究機関が関与してる可能性がある。

そして、そういった事件の話をわざわざしてくるということは。

「……私、いえ、『私達』を疑っているわけですね
「……」

命を持ったAI、そして恐らく卯月の見当もある程度ついているのだろ。彼女は、VR環境下にて『脳の異常』だけでは済まされないほどの動きを見せる。この二人が彼女に疑念を持たせた。

そして彼女の疑念通りであるとも言える。・・・正解ではないが。

「・・・技術的に言えば、それは可能です。ちなみに風、今、回線切断はできますか？」

「え！嘘・・・できない・・・」

「いささか無用心すぎますね。ちよつとでも疑いがあるのならばここに来る前に何枚か壁を通すなり、擬似アバターやPCを通すなりしなければ。まあ、それでも無意味ですが」

そう、私ならできる。人をVR内に閉じ込めることが。しかし、

「ですが安心してください。私は国に混乱をもたらしたりしないし、私のログを献上すると宣言もしている」

「・・・それは建前ですよね」

狼狽しながらも、真実を得ようとするその姿勢は純粹に好ましいと思った。しかし、私はもとより卯月はそのような大それた事をしてはいない。元より二人とも、国からのバックアップが無ければ生活にすら困るような身分でもある。わざわざ自分達から、国との間に荒波を立てるようなまねはしない。

まあ、私達のデータを使ってどこぞの研究機関が暴走している可能性はなくはないが。

「それに、まだ『国に混乱をもたらしている』わけでもないでしょう?」

キッと、風は空中をにらみつけた。

「痛いところを衝かれました。しかしそこは信じてもらうしかない。私、そして卯月は誓ってそんな事はしていない」

「何に誓って？」

「もちろん、国に」

「・・・・・・」

まだ疑いの目をやめない凧に、irisは内心ため息をついた。さて、どうしようか。

次の言葉を考えているところで、凧が大きく息を吐いて、微笑んだ。

「貴方達を信じます」

「潔いですね」

「言ったでしょう？私はVR環境下でも能力を使えるんです」

凧がわざわざVR環境下で部屋へ入ってきて、irisとだけ話したいという時点で、彼女には大体の予想がついていたが。

「試されていたわけですね」

「ええ。貴方が『人』で良かった」

つまりは、irisの言動と思考の差異を読み取っていたわけだ。しかし人のそれと比べるとかなりの高速、そして構造の違う思考を読み取るとは、さすがランク5、凧もまた人ではないナニカと言わざるを得ない。

「しかし、あずかり知らない所でそのような事が起きて、私はもとより卯月まで疑われるのは面白くありません」
「すいません」

「いえ、風のせいではありません。私のほうでもその巨大なサーバーというのを調べてみます」

「え！いいんですか」

風が疑ってきたということは、ある程度irisと卯月を知る者が巨大サーバーを知った場合、まず二人を疑うのは自然の流れだろう。そしてある程度権力があり、なおかつ単細胞で短絡的な『クス』だった場合は、irisと卯月に好ましくない状況になる可能性が高い。

「はい。私と卯月のためです」

「ありがとうございます」

まあ、その分の報酬はもらっても問題は無いだろう。

「代わりといっては何ですが」

「はい？」

「今度、私の作ったケーキの味見をしていただけませんか？」

「ふふ、もちろん」

風はおかしそうに笑った。

「じゃあ私は紅茶を持ってきますね」

「コーヒーが合うと聞きましたが」

「ふふふ、人の種類だけ趣味と嗜好があります。例えば志貴崎さんは、きつとコーヒーや紅茶よりも、ケーキを付け合せた方が喜びます」

「なるほど。確かに」

まさか冗談で出したチョコレート5キロを、速攻で購入されて（

しかも4セット）感謝されるとは思わなかった。世の中色々な人がいる。ここにいるとついついその事を忘れてしまうようだ。

「それにしても、卯月は貴方達を完全に信頼しているようです。『とっておき』を見せるなんて」

「ああ、あれですか？」

凧はすぐにピンときたようで、うんうんとうなずいている。卯月はVR環境下においても、アバターの反応速度を上回り脳の思考を高速化することができる。現実とVRで、脳の使用率や反応パターンに違いがあることから現実で彼女が見せる超反応と、VRで見せる超反応は別々の現象だと思われるが、まだ科学的な検証はまったく進んでいない。

「卯月は、人を疑う事を知りませんね」

まったく、困った『母』である。

「irisがしっかりしてあげないと、いけないですね？」

「その通りです」

面白そうに笑う凧だが、その目は少し寂しげだ。

「私は、人を疑う事しか知りません」

そうつぶやく凧に、irisはかける言葉を持たなかった。irisは持たないが、しかし。

「貴方がそうであっても、支えてくれる人がいるはずですよ」

それは昨日知り合った『彼ら』かもしれないし、未来に知り合う『誰か』かもしれない。

「そうでしょうか」

「そうですとも。色々な人がいますから」

「・・・そうですね」

そうだいいですね。と凧は小さく微笑んだ。

間話 鬼との遭遇（前書き）

2000PVありがとうございます！嬉しいです

間話 鬼との遭遇

爽快な青空の下、志貴崎は走っていた。VR環境下ではいまいち風を感じられないのでちょっと不満はあるが、この満点の青空はとうだ。

やはり空は良い。

志貴崎は以前、スカイダイビングゲームにハマった事がある。周りに建築物一つの無い大自然を眼下に見ながら、高高度降下。重力に弄ばれて、『お前は一人の人間だ』と大声で言われた気がして全身が震えたものだ。その時眼下に見えた草や花、木、鳥、川、海、魚、山。どれ一つとっても、志貴崎はその名前を知らないし、これから知る事はないが、彼は『自然』が好きだった。

このゲームの青空は良いな。マップ自体は自然物が無いが、その対比が何とも乙なものだと志貴崎は思った。

ガガガガガガガガガ！

突然『地上』から弾丸がばらまかれた。もう少し走っていたかったのに残念だ。ちょうど下に『テロ側建物』があったので、志貴崎は『電線』の上から『テロ側建物』の屋根へと飛び降りた。

現在、志貴崎は『HALLO POINT』のチームデスマッチルールを遊んでいる最中である。二つのチームに分かれて、単純に打ち合い、倒した数で勝敗を競うなんともわかりやすいルールだ。

手早く現在の装備を確認。ハンドガン、フラッシュバン×2。他のプレイヤーを見ると。何とも貧弱な装備ではあるが、志貴崎は元々この装備を選んでこの戦いに挑んだ。

現在の成績は「32/5」である。32人倒して、5回倒された

となっている。もっとも、その内の三回は、弾が切れたので足下にフラググレネードを転がして自殺したただけなのだが。

——ぬるいな

対人戦闘になれば、BOTとの対戦よりも熱い対戦ができると思ったが、実際そうでは無かったらしい。

こちらの陽動にまんまと引っかかり、背中を簡単に向ける奴。対峙して二、三発打ち合って、思いつきで伏せて『死んだ振り』をすれば簡単に騙されて撃つのを止める奴。マップの端の端に寝転んで、じつとスナイパーライフルを覗いてるだけの奴。他にもまだまだあるが、野谷の用意したBOTが数倍訓練された軍隊のような動きをしていた。

そんな彼らを暇つぶしに屠った結果の数字が「32/5」だ。自慢にもならない。

と言うわけで彼は、先ほど皆と遊んでいた時に思いついた『電線走り』を実行に移していたのである。予想通りポリゴンとテクスチャで構成された電線は、ぐらぐらと揺れずにしっかりと志貴崎を支えた。後はバランスの問題だけである。つまりは簡単。

単純な思いつきにしては、中々楽しめた。

——まあ、ぬるいとは言っても、骨のある奴が一人いるようだが

志貴崎は笑った。彼を二回殺した相手。二回とも不意を打つ形ではあったが、それでも殺されたことには間違いない。このゲームの『立ち回り』を知るもの。中級かそれ以上なのだろう。さて、志貴^者崎の腕が通用するかどうか。試してみようでは無いか。

その前に、その相手を探す事から始めないといけないだろう。志

貴崎は屋根にしゃがんで耳を当てた。ガチャガチャと音が聞こえる。なんとともまとまりの無い音だ。恐らく数人。複数ある窓から節操も無く顔を出して、敵を探しているのだろう。一人では無いこと、お互いに死角が無いと『思い込んでる』事から、気が緩んで大きな音を立ててしまっているのだろうと志貴崎は考えた。

こんな奴らにわざわざフラッシュバンを使う必要も無い。志貴崎は空中に身を投げる。

ガ
シ
ユ
ツ
！

ナイフが屋根の縁に引っかかり、志貴崎の体がナイフを軸に回転。それと同時に、ハンドガンを取り出して窓から突き出た敵の頭に照準する。

キュンキュンキュン！

倒したことを目の端で確認。そのまま建物の中へ、ついでに空中に投げ出された銃を貰っておく。と、右手を閃かせて今殺した奴の、側に立っていた敵の首を切りつける。

転がりながら部屋の中の敵の位置を確認。三人もいる。誰も彼も一生懸命自分の銃しか見ておらず、志貴崎へと反応すらできていない。転がった音でようやく気づいたように振り返り始める始末だ。

——こいつらじゃないな

ハンドガンを一時投げ捨て、敵から奪った銃を「構えながら」発砲。銃口に合せて弾痕が横ないで敵を襲う。

バババババババババババン！！

今ので二人。一人はギリギリ死を免れたようだ。が、志貴崎の弾幕によって負傷したのだろう。体がぶれて大きくのけぞっていた。その隙を見逃さず、志貴崎は大きく飛び込みながら右手のナイフで敵の首を撫でた。

これで5人。ちなみにこのルール、5人対5人ではなく10人対10人だ。

——次へ向かうか。

次の獲物を探すために、志貴崎は勢いよく階段を飛び降りた。

テルは、呆然と眼前に広がるログを眺めていた。

```
SM 「Glock」 Elite Joe
SM 「Knife」 「CTE」 takoyaki.jp
SM 「M16」 xxx EVIL xxx
SM 「M16」 「SLG」 J
SM 「knife」 - - - MRM R - - - Robert R
o b e r t R o b e r t
```

このログは約10秒の間に一気に表示された『キルログ』だ。一度だけだったら「ふむふむ、まぐれ連続キルおめでとー」くらいだが、この「SM」が入ってきてから、このような3、4人一気に倒す事が数回ある。しかも成績表を見ると現在彼の成績は「38/5」だ。あ、また二人増えた。

あまりに圧倒的すぎる。チートだとは思えないが、テルはこい

つを二度殺している。いずれも遠くからのスナイパーライフルによるクイックショットで。その時見た彼の顔が忘れられない。自分を殺した相手を見定める、肉食獣のような獰猛な笑み。チートなんかやってる『テトリス野郎』が、あんな顔なんか絶対しねえ。

この『HALLO POINT』では、スナイパーライフルを使う奴は上級者中の上級者か、作戦上配置される役割としてか、もしくは奥の方で縮こまって一つでも自分の死亡回数よりも殺した数を優先する、初心者にも満たないおこちゃましかない。そしてテルは、『上級者中の上級者』という自負があつた。

足の遅いスナイパーライフルをわざわざ抱えてえっちらおっちら前線へ。周りが彼にあざけるような視線を向ける。

ある程度の所に来たら胸に自分の相棒を抱えて敵をさがす。そして敵を発見すると、彼の腕が跳ね上がり敵を一瞬で照準。敵の頭に花が咲くのである。

その時の周りの目が忘れられなかった。全身に電気が走るように興奮する。

そもそもクイックショットとは、その名の通り。銃を構えてスコップを覗くか覗かないかの段階で発砲するという、VRが浸透する前に、モニター越しでプレイするFPSで、スナイパーが用いていた今は今もう廃れた技術だ。昔は銃を構えなくたって画面の真ん中に大体弾がとんでいったし、銃を構えればかならずその方向に弾が飛んだ。それを利用して構えた瞬間に発砲する『クイックショット』という技術は生まれた。

そんな『前時代の技術』がこの進化したVRFPSに通用するわけがない。そう言つて、ほとんどの人がこの『クイックショット』から離れていった。昔は『クイックショット』ができる事こそ、上級者の最低条件とまで言われていたのに。FPSの常識は一気に根

本から崩れた。

それでも、スナイパーライフルに取憑かれたプレイヤーは数多く居た。中距離戦闘メインのこのゲームでも例外では無い。テルはこのゲームに入ってから、スナイパーライフル以外触っていない。まさにジャンキーだった。自分の生まれる以前よりあるこの技術を、伝説を、彼はVRでも再現しようとした。

テルは、このゲームをプレイし始めて、銃をいじりにいじりまわった。発砲時の振動から、銃口の上がり、肩の角度、支える手の力加減。それらを全て体に覚え込ませた。これはゲームである。その事実は変わらない。なら全ての動きが単純な計算式でなければおかしい。風の動きや太陽熱による銃の歪み、発砲ごとの銃の消耗。それら細かい計算までされているはずがあるわけがない。その基本理念に捕らわれて『絶対に同じ動きをする』姿勢を自分に覚え込ませた。

そして完成した。『クイックショット』がまた現代によみがえったのである。もちろん、彼と同じようにクイックショットを扱える人は少なからず居る。が、そのほとんどの者は自らの感性や経験で行っている。だが彼は、動き自体を固定化し、完璧にその動き以外しない姿勢を完成させたのである。彼の怨念とも言えるべき努力と執念がそこにはあった。

そしてテルは上級者の仲間入りをした。敵を殺しては殺した。目に見える全ての物に対応できる自信があった。舞い上がっていた。

そんな中で、テルは彼と出会った。

「その撃ち方、教えて欲しい」

彼の名前は、ケットと言った。

その時テルは有頂天だった。自分の技術、経験、知識。そのどれもがケットには理解できないとふんで、全てを教え込ませた。そし

てケットは全てを飲み込んでしまった。

結果、悪魔が誕生した。

いや、ケットは純粹にゲームを楽しんでいただけだった。銃自体には興味が無く、敵との勝負を純粹に楽しむただのガキ。だが、ケットの腕が跳ね上がれば必ず赤い花が咲き、ケットが安全だと判断した場所には敵が居た事なんて一度もなかった。

結局、彼を悪魔だと思っていたのはテルだけだった。テルはケットを恐れた。自分以上の技術、自分以上の力量、自分以上の知識。同じスナイパー。同じクイックショットの使い手。それでもケットから離れられなかった。ゲーマーとしてのテルが、強い奴に惹かれてつるみたくなるのは、当然の事でもあったのだから。

思えばそこでケットと離れておけばよかった。強い奴は強い奴を誘う。類が友を、と言う奴だ。どんどん強い奴らが彼らに加わり、抜け、また加わった。気がついたらテル達はケットを中心にしてクランを作っていた。そして勢いのまま世界大会。その時ケットは本当に楽しそうだった。純真無垢な、跳ね回るただの子犬。少し、皆よりちよつとだけ、最強だっただけの。

そして大会が進むにつれて、彼らは心がバラバラになった。だつて10万\$だぞ！？10万\$！！見たことも無い額の金が彼らのまえにぶら下がった。彼らは言い争った。バカみたいに。餓鬼みたいに。

振り返って思えば、そんな彼らをケットはずっと不思議そうに見ていた。その目が「ねえ、ゲームしないの？」と言っているようだった。散歩をせがむ犬つころに、テルは思えた。

大会はどんどん彼らを押し上げた。テル達は興奮した。そしてそ

の分だけ言い争った。そしてそして、それはゲーム中にまで及んでしまった。そう。ゲーム中にまで。

きつとそうに違いない。ケットはそんなテル達を見て「遊ばないのか」と思ったに違いない。

そしてテル達は、興奮したままにゲームをして、ケットただ一人を残して全滅。残ったケットが一人でその試合を勝ちで終わらせた。世界二位と世界一位の首輪が、テル達の頭上へと天使が運んでくるような錯覚を、この時彼らは見た。大会はその日一旦区切りとなり、次の日大々的なイベントとして行われる予定であった。

「おめでとうケット！！すっげーな！！マジかよ！！しんじられねー！！これで世界三位だ！！それで明日なんだけd・・・」

死亡のせいの音信不通が解除されて、真っ先に彼を褒めた！だが、彼から帰ってきた声は、なんの感情もこもってはいなかった。

「それじゃ、俺そろそろ落ちるから」

「え・・・」

まるで、今日のゲームはもうおしまい。また今度。そんな軽い感じだった。

結局、それからケットはオンラインにならなかった。全ての作戦をケットありきで立てていた彼らに、世界一位や二位なんて争えるはずも無く、無様に玉砕。

それに追い打ちをかけるように、クラン面子全員に昨日メッセージが来た。内容はこうだ

「抜ける。さよなら」

あまりに簡素であつた。誰も彼もが、自分にだけはもつと特別な内容のメッセージが他に来るだろうと身構えたが、結局誰にも来なかった。もちろん、テルにも。最後までケツトは結局、ゲームをしていただけなのだ。10万\$など、ゲームで笑う楽しさ以下の価値しかケツトには無かつたのだらう。

言い表せぬ喪失感を感じながら、テルはいつもの情性でゲームを起動。むしゃくしゃした気分を少しでも晴らそうと、野良サーバーに入った。

『野良』とは、その言葉通り誰も彼もが初対面、その場限りのチームワーク。その場限りの協力関係を繋いで戦う『パブリックサーバー』での戦闘の通称だ。大抵、初心者、中級者、上級者が入り乱れてチームワークもゲームの進行も何もかもが関係なくカオスな戦場となる。克蘭同士の『克蘭戦』が技術と知力の高度の戦闘だとして、この『野良戦闘』は、グレネード片手にただ突っ込むだけの特攻爆撃上等の泥沼混戦シェイクだ。

たいした強さの奴がいるはずもなく、無感動にただただ敵を殺しに殺した。そして気づく。その異質な存在に。

ふざけた名前でログインしてきたと思ったら、ものの見事に積み上がるキル数。尋常な速度では無い。一度に殺す数が半端ないので、恐らくわざわざ敵の密集地に突っ込んでるのだらう。しかも大抵がグロツクとナイフ。

——ふざけてやがる。こいつ『テトリス野郎』だ！！チートして、グロツクとナイフだけで暇つぶしに敵を殺してるだけにちがいない！！！！

チーターへの対抗心がふつふつとわき上がり、そろそろと場所取り。相手のキルログと成績表、マップ上に表示される味方の死亡マーカーを見比べて、『テトリス野郎』の足取りを追う。どうやら屋根の上や電線の上を走るクライミングチートか、フライングチートでも使ってるようだ。まったくもってふざけてやがる。これで無敵でも使われてたらしようが無いが、その時はその時だ。

ちなみに、『テトリス野郎』は、チートをする者につく俗称で、その昔、まだV R F P Sすら概念の無い時代に流行ったチートツールの機能に、何故か「テトリスがプレイできる」という意味不明極まり無い機能が付いていた事によってついた。

そしてテルは『テトリス野郎』を発見した。今まさに屋根から窓へと入る瞬間であった。考える前にテルの腕は跳ね上がり、完璧な姿勢となる。そして発砲。『テトリス野郎』は背中を打たれて、まっ逆さまに落ちた。その瞬間、そいつと目が合う。

——鬼だ

テルはそう思った。あいつはチートなんかしていない。完全に力量のみで今までの無軌道をやったのけやがった！！！！

そして彼は、今また成績表とキルログ、マップを検証しながら『鬼』の居場所を探っていた。どうやら今、『鬼』は公式戦ルールであるところのBポイントの位置にいるらしい。

——ここからだとしどいな。

後ろへ振り返り、キャンプに最適な位置へと路地を後退することにした。と、その時。路地の曲がり角から一瞬横顔がのぞいた。無意識に腕が跳ね上がり臨戦態勢を取る。敵は既に顔をかくしてこちらからは見えない。

しばらくその状態を維持するも敵は顔を出さず、カバリングシヨットもしてこない。疑問に思いながらゆっくりと腰をかがめ、すり足で後退する。できるだけ音を出さないように。

シュツ

その時、テルの耳には上空からのかすかな音がはつきりと聞き取れた。

——上を取られた！

この態勢からスナイパーライフルを持ち上げる事はできない。咄嗟にスナイパーライフルを手放し、ナイフを抜刀、ろくに確認もせず振り抜いた！！

ザシュツ

確かな手応えを手に感じる。そのまま腰にあるハンドガンを強引に引き抜き、前へと転がり敵との距離を取る。敵の確認は未だできない。

「ふふん。中々に良い反応だな」

どうにか態勢を立て直し、ハンドガンに向けた先には『鬼』が立

っていた。右手に損傷。そしてその手にはナイフ。これでナイフは握れまい。『鬼』の言葉には耳を傾けず速攻で発砲。

パンパンパン！！

『鬼』は身近にあった木箱に身を隠して弾を避ける。それを確認して腰からフラググレネードを取り出しピンを抜く。そのまま少し待ってから投げる。

ドオン！

グレネードは地面に落ちる前に爆発。ピンを抜いてから爆発までの時間を完璧に読んで放り投げ、地面へ接触する前にピンポイントで爆発させる、このジャンルのゲームの基礎技術だ。

「ほほう。こういうこともできるのか」

木箱の向こうから『鬼』の声が聞こえる。爆風からは上手く逃げたらしい。まあ当然か。地面に落ちているスナイパーライフルを抱えて、いつでも対応できるように待つ。マップを見ると、周りには味方が包囲網を敷いていた。動く気配は無いので、テル達の攻防には気がついていないようだ。味方が応援に来る事も無ければ、敵が増える分けでも無い。完全に1：1。

「こうか？」

パン！

木箱から、フラッシュバンが出たと思った瞬間に爆発した。あまりの爆発時間までの猶予のなさに、テルはまともに食らって目がく

らんだ。しかし、あの近さであの距離なら、『鬼』も直に食らっているはず！どうやらまったく信じられないが、『鬼』はFPSというジャンル自体初心者らしい。世の中ケットみたいな奴はいくらでもいるらしいな。が、今は完全に失敗だ。きつと今頃泡を食ってうずくまっているだろう。ケットはこのマップを含め、『HALL O P O I N T』のマップは全て何千回と繰り返し走り抜いてきた。頭の中に全てのオブジェクトの位置は把握済みだ！目がまだ全く見えないが、ダッシュして木箱の元へ！

ドオン！！

まだ視界は回復していない。が、頭の中にあるオブジェクトの配置、慣れ親しんだ銃、自分のコンディション。全てが合致しテルは寸分たがわず木箱の裏、『鬼が』いるであろうポイントへ発砲した。が、回復した視界の前の、木箱の裏に敵はいなかった。咄嗟に回転か何かで逃げたか！？ぐるりと辺りを見回す。

ザシュッ

「ふむ。上級者もこんなものか。いや、中級者か？ともあれ、お疲れ、楽しかったぞ！」

お疲れさん。といった感じに『鬼』が二カつと笑った。そして、テルの脳天にはしっかりとナイフがささっていた。

——嗚呼、こんな奴らが野良に出没するのなら、ケットも楽しく遊んでるに違いない。そしてきつと、俺らはもう、ケットを楽しませる事ができないんだ。

もうケットには会えないのだな。と、この時テルはなんとなく理解した。

SM 「knife」 「KT」 tell for

——反応速度は中々だったが、野谷ほどでは無かったな。それに、こいつなんでゲームなのに楽しそうにしないんだ？

志貴崎は不思議に思った。周りの奴らは誰も彼もが本気で笑顔をむき出しにして、本気で悔しがって、ばかみたいな大声を出しながらゲームをしているというのに。確かに上手いのかもしれない、しかしきつとこいつはこのゲームがあんまり好きじゃ無いんだろうな。と志貴崎は結論づけた。

四話 学業は大事、青春はもっと大事？（前書き）

中編的な物を作りたくなりました

四話 学業は大事、青春はもつと大事？

「しまつま」

「マンドリル」

「ルンバ」

「馬刺し」

「……しろながすくじら」

俺達は向かい合って座りながら、しりとりをしていた。待ち時間とはなかなか退屈なもので、最初は外の景色を眺めて楽しんでいたが、それもすぐに飽きた。

ゴオオオオオオオ

座り心地のいいフカフカなソファ、丁寧な作りの巨木一本から丸まる削りだしたオーク机、縦長に広い空間、足元には毛の長い真紅の絨毯、壁に飾られた高級そうなワインボトルの数々、そしてお茶のボトルを持ちながら待機しているスタッフさん。明らかに高級よりもさらに上、まさにVIPと呼ぶにふさわしい雰囲気がある。ここにはあった。

ゴオオオオオオオ

「ライド オン シューティングスター」

「何それかっこいい。タルタルソース」

「スルメ」

「めざし」

「……しまつま」

そんな中で学校帰り、制服を着ながら、しりとりをしている俺達。

ゴオオオオオオオオ

「マジエステイ」

「何それかつこよすぎない？ティーチャー」

さっきからしてる音は、俺達がいるこの空間が移動してる音である。

窓の外には一面の白いもやが眼下に広がるだけ広がりまくり、その上には青空一色。

「チャリティー」

「ティー」

ゴオオオオオオオオ

「・・・ティーカップ」

「プリティー」

ここは空の上、VIP専用自家用ジェット機の中である。

「・・・どうしてこうなった」

「圭の負けー」

あまりの非現実には、つい口に出た言葉に山城さんが反応した。はあ・・・。

まあ、まず、なんでこんな事になったのか、経緯を説明しなければならんだろう。

昼食の席で、俺達は今日やりたいことを出し合った。皆の希望はこんな感じだ。

俺はアクアリウム。今、丁度都市の東エリアの高層ビルで、展望とアクアリウムの展示会をやっているようだ。アクアリウムとは、魚を水槽に入れ、その水槽を色々な形にデコレーションして水槽と魚で一つの芸術作品にする。という水族館とはまた違った趣向の目に楽しい展示物だ。

山城さんはプール。山城さんのお勧めスポットとして、夜にライトアップされてすごくきれいで楽しいプールがあるらしい。放課後皆で水着を買い、そのプールで泳ごうという。

鬼谷さんはカフェ。ケーキと紅茶を出すカフェがあり、紅茶を頼むとそれにあつたケーキを出してくれる場所があるらしい。そこで皆でおしゃべりしないかという事だ。

野谷さんは温泉。外で皆でお風呂、というのは経験したことがないのでやってみたいとの事。

で、志貴崎さんかというと、俺達の会話を聞きながらうんうんとうなずいている。そして口を開いたと思ったら。

「全部やろう」

と言い放ったのだ。

「え？」

「ごめん全然意味わかんない。志貴崎さんはどや顔でふふん、と鼻

を鳴らせるばかりである。

「だから全部やるのだ」

「それはわかったんだが、具体的にどうするんだ？」

アクアリウムにプールにカフェに風呂だぞ？どうすればそれだけの要素を一つに積み込めるというのか。もしかして頭まで志貴崎さんは筋肉になってしまったのか。

「俺達の目的は青春だ」

「まあそうだな」

「だとしたらやることは一つ」

「だからそれがなんだっていうんだよ」

もったいぶる口ぶりに若干いらする。回答が見えないやり取りをするのは正直疲れるものがある。

志貴崎さんは立ち上がって腰に手を当てて、天井をビシッと指差した

「修学旅行だ」

「……え？」

——なんだって？

「聞こえなかったか？修学旅行だ」

嫌な汗が背中を伝う。志貴崎さんはいたってまじめである。

「具体的には——」

言つな、それ以上言わないでくれ。

「沖縄に行こう」

目の前が真っ白になるような、なんともいえない感覚が俺の全身を駆け巡った。

志貴崎さんの言い分はこうだ。そもそも、この学園は特殊すぎる以上に特殊な学園である。そのため修学旅行そのものが無い。こんな能力者だらけの学園が修学旅行など執り行ったらA、旅行先が大パニック、阿鼻叫喚の地獄絵図になることは必須。（何で地獄絵図になるの確定なんだよ）

そういうわけで彼らはもとより、学園全校生徒が修学旅行なんてしたことがない。漫画やアニメやドラマにあるような、皆で温泉、就寝、枕投げ、猥談^{おい}、お土産選び、観光地めぐりなどしたこともない。修学旅行。それはなんと甘美な響きか。まさに学園生徒憧れの学校行事と言っても過言ではない。

というわけで、俺以外のメンバーは全員乗り気である。今日沖縄行こうと言われて、いくいくーって言えるこの人たちの非常識さにはもう慣れた。何も言うまい。だが俺は一般人である。最後まで抵抗はさせていただく。

「まで。俺はお前らと違って一般人だぞ。お前らは金あるかもしれないが、そんな急に沖縄行きの飛行機の手ケットなんてかえねーよ」
「何だそんな事か。そんな事気にするな。俺らの金を使えばいい」
「施しは受けねーよ」
「堅いねー圭はー」

山城さんも志貴崎さんに同調して、気にするなと言ってくるが、俺は俺の考えで、こいつらに付き合っていくと決めていた。これが

らも一般人でいるつもりだし、最低限の常識の中で生きさせてもらう。だから俺は俺なりの譲歩をする事にした。

「施しは受けない。しかし、金もない。そして、俺も沖縄に行きたい」

そう。そもそもこいつらに付き合ってる時点で、今後もどんな無茶や無軌道が飛び出てくるか分かったものではない。沖縄なんて序の口中の序の口なのだ。きっと、半年後か一年後には「宇宙に行く」とか言い出すぞ。

「だから、貸してください」

これが俺の中で出した結論である。施しは受けない。だが貸せ。恐らく一生返せないだろう。だが、きっとこいつらは一生待ってくれると変な確信があった。

「圭は律儀だね」

「まあ、上村さんらしいですね」

「……ん」

「素直じゃないな!」

そんな、「このツンデレめ」みたいな目で見るのはやめてほしい、志貴崎さん。

こいつらが金銭で規格外なのは何となく、理解していた。だから俺はもういちいち気にせず開き直る事にした。こいつらの言う『青春』についていくしかないのだ。せいぜい借りるだけ借りまくつてやる!

「それで、何泊にするのー?」

「え？泊まるの？」

「当たり前だろう？」

「ええええええええええええ！！」

いや、irisさんに助けを求めても「ハッ」とか返してきそうだから駄目だな。しまった！俺には常識的な友達がいねえ！！・・・
・こうなったらキャシーさんあたりに相談しようか。何か担任は当てにならない感じがするし。

「……というわけなんです。助けてください」

176

「いいじゃない、沖縄。行ってくればいいじゃない」
「ええー……」

キャシーさんは、「いいわよ。沖縄は」とか思い出話なんて始めてしまう。キャシーさんもこんな反応である。もうやだこの学園。

「けど、成績とかに影響が……」

学生として当然な心配である。勉強に追いつけなかったり、休みが多いせいで進学できなかったり、ほかに色々支障が出るのが普通だろう。

「貴方、この学園を良い意味で舐めきってますね！」

ぺろぺろしすぎよ。とか言われた。何？ぺろぺろって。

「そもそもです。この学園とは！」

この学園の目的。それは学校として能力者達を教育するためではない。能力者達を『保護し管理し監視』するためである。そんな学園が、勉強や試験の成績で、生徒を自分から手放すはずがあるわけ無い。

国にとって能力者の管理とは最優先事項なのだ。極端な話「思い通りにならない能力者など要らない」と処分する。何この学園怖い。実際そういう形で処分された能力者は居ない。（「行方不明になった能力者は、何人かいますけどね」とキャシーさんは微笑んだ。俺は必死に聞かなかったことにした）

そもそも、休みが多くなりがちな能力者達に合せ、この学園の学

業進行速度は遅めである。ちゃんと高校以上を卒業した学生達は、希望次第で国の最大限の助力を得て就職をする事ができる。

もちろんこの学園を卒業した能力者達は、基本的にこの学園を出た後も『都市』に縛られる事になる。そう。この『都市』自体が実際能力者培養・管理・監視・保護施設として機能しているのだ。

はい、舐めてました。ぺろぺろしてました。

「そしてそのルールは貴方にも適応されてます。上村 圭」

キャシーさんは、突然冷淡な目をして俺を見た。

「貴方は『あの』上村 沙紀を姉に持ち、ランク5の人々とするみ、今後も交流を続けると宣言した普通の少年。貴方は一般人でありながら、もはや一般人の枠には戻れない存在となった」

「・・・」

「貴方はもう戻れない。いえ、最終確認がそろそろ来るはずですよ。そろそろ決心をした方がいいでしょう」

「・・・そんな気はしていました」

そもそも3日。その日数を長いと取るのか、短いと取るのかそれは人それぞれだろう。しかし、この『特殊な学園』に入学した『普通』の俺は、この学園にとって異物でしかない。そろそろアレルギーの出る時期が来ると言うことなのだろう。つまりは「お前は特殊な方に来るのか？それとも一般に戻るのか？」そう言ってくるに違いない。

「・・・だからこそ」

キャシーさんは柔和な表情に戻りながら、俺の頭を撫でた。そして「沖縄、楽しんでらっしゃい」と後押しをしてくれた。

・・・って、後押しをしてもらうために来たんじゃないかな。うな気がするんだが。さんざん脅されるだけ脅されただけな気がする・・・。

そんな訳で、俺たちは放課後、その足で空港へと向かう事となった。何故かというと

「修学旅行なのだから、制服にすべきだ！」

と志貴崎さんが力説しやがり、俺以外の三人がそれに同意しやがったからだ。今回、基本的に能力者4人が役に立たなさそうだと俺は直感し、反抗することを辞めた。

四話 学業は大事、青春はもつと大事？

そういうわけで、俺たちを乗せたジェット機は沖縄へと向かっていった。空港でこのジェット機を見た時、俺の最後の砦として残っていたなけなしの『常識』は木っ端と化した。もうどうにでもなれ。

そして、飛行機の旅もある程度の時間かけるべきだという志貴崎さんの意見を反映し、このジェット機は、ジェット機なのに優雅にゆつくりと運行していた。

「あの、座ってた方が良いんじゃないですか？・・・ずっと立ってるんですか？」

俺はどうも、先ほどから後ろの方で畏まってお茶のボトルを持つ、客室乗務員というか、サポートというか、執事というか、そんな風貌の人が気になって仕方が無かった。びしっとしたスーツに白髪をきっちり固めており、まさに紳士。常に俺たち一向に不便が無いのか確認してくれているようだ。

「いえいえ、これが私めの仕事でありますから」

お気遣いどうも。と頭を下げられる始末である。

「そうだぞ、圭。人の仕事にケチを付けるものではない」

志貴崎さんは、オーク机に広げられたカードの束をにらみつけながら、俺に注意してきた。確かに、この人はこれこそが仕事だ。それを見て「座った方が」と促すのはケチ以外の何物でも無いのかもしれない。素直に反省する。

「すみません」
「いえ」

お互いにぺこりと一礼。

ところで、志貴崎さんの前にあるカードの束、これはトランプだ。黒と赤にそれぞれ分けられてふた山ある。黒いカードの束を志貴崎さんが取り、そこから4枚引いて等間隔によこ並びさせた。そして、対面に座るのは野谷さん。赤いカードの束を取り、同じように4枚並べる。

「ふふん。リベンジマッチという奴だな」
「誰のリベンジ？」

獰猛な笑みに口をゆがませる志貴崎さん。それを受けて涼しげに野谷さんは答える。その口調は軽やかであり、戦士の気品すら感じられる。

「もちろん一昨日のだ」
「あれは圭の失点」

少なくとも女の子に向ける類いの物では無い笑みを見せる志貴崎さん。野谷さんはそれを軽く受け流しながら答える。

「しかし、お前はそれを圭のせいにする気はないんだろう？」
「……」

ついに、悪の魔王か何かにしか感じられない笑みになった志貴崎さんを、野谷さんは沈黙で遮断した。お互いの緊張の糸がピークに達する。特に合図も何も無いまま、二人は同時に口を開いた。

「「いつせーのーせ」」

シャシャシャシャシャシャシャ！！

もうおわかりであろう。スピードである。誰がなんと言おうと、スピードだ。

お互いのカードの束、これは手札。と、眼前に広げた4枚のカード。それを場札として「いつせーの」「スピード」などのかけ声でお互いの手札から一枚取り出し、お互いの間に置く、これを台札。そしてそのカードと、一つ違いの数字を素早く出し合い、カードの束が最初に無くなった方が勝ち。単純明快、誰もが小学校時代くらいから慣れ親しんでいる対戦ゲームだ。

シャシャシャシャシャシャ！！

ただ、俺の眼前で繰り広げられているこれは、決して俺が慣れ親しんだ『お遊戯』じゃない。もっと化け物じみた『ナニカ』ではない

「もう『スピード』じゃなくて『ソニック』って言った方が良くないか？」

「・・・言ってる」

「毎回思いますが上村さんは、つつこみが的確なようで少しズレていますよね」

俺がズレてるんじゃない。貴方達がズレてるんです。

そう思いながら、二人のゲーム進行に目が離せない。黒と赤とが高速に入れ替わり、アニメか何かを見ているようだ。

シャシャシャシャシャ・・・

と、二人の動きがぴたりと止まる。見たところ台札は黒の8と黒の5。志貴崎さんは置くことができないようだが、野谷さんが二枚ほどこの台札にカードを出せる状態のようだ。

張り詰めた糸のような緊張感があたりに漂う。まるで、刀をいつ抜刀して斬りかかるか読み合う、侍同士の決闘のようだ。見たことはもちろん無いが。

恐らく、俺には良く分からないが、手札、場札、台札、その三つの要素が整い、今まさに、これからの野谷さんの一挙動が、勝ち負けを決める『割れ目』となっているらしかった。二人とも真剣だ。志貴崎さんは、せめてこの真剣さの1/100くらいは勉強に注いだ方がいと思うくらい真剣だ。

ゴオオオオというジェット機の音が、何倍にも増幅されたように感じてしまう。

・・・ついに、野谷さんの指がピクツと動いたのが見えたあとはもう、俺には何が起きたのかがわからなかった。

シャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャダン！！

二人の手が高速で動き、同時に台札を叩いた。二人ともそれぞれ台札に手を置き制止し、二人とも場札に札は無し。・・・ドローだろうか。

「・・・負け」

「危なかった！」

どうやら志貴崎さんの勝ちらしい。お互いの間できっちり勝敗が分かっているのなら良いが、はたから見ているこちら側からすれば、

何がなにやら分からない。

志貴崎さんは、緊張の糸が切れたのかソファにドガァ！と倒れ込んだ。

すかさず客室乗務員（？）さんが志貴崎さんにお茶の入ったコップを渡す。流石この道のプロ。今の非常識を見ているも眉一つ動かさない。いや、そもそもこのジェット機自体、彼ら特別な異能者達を送り迎える専用ジェット機なのかもしれない。

志貴崎さんの額にはじんわり汗がにじんでいる。どんだけ集中していたんだ、あんた。

対する野谷さんは、汗一つ無く涼しげだが、心なしか悔しそうだ。

「ま、何はともあれ二勝したわけだ」

大人げない笑みを浮かべて、志貴崎さんは野谷を見る。

「・・・次は、・・・こうはいかない」

「ふふん。まあ、楽しみにしておこう」

まあ、トランプ一つでこれだけ真剣になれるのは良いこと・・・なのかなあ。

と、野谷さんは乗務員さんに何かお願いをしているようだ。乗務員さんの顔が一気に驚愕の表情となりながらも、頷いて一旦奥へと下がって行った。

今度はなにが始まるのだろうか。

野谷さんは、不敵な微笑を浮かべて志貴崎さんを見ている。早くもリターンマッチということなのか。

戻ってきた乗務員さんの手にあるのはトランプの箱が4箱。ま、

まさか・・・。

「さあ、次の勝負を」

「・・・・・・・・」

流石の志貴崎さんも顔が引きつっている。野谷さんはそれを満足そうに眺めて、箱を開けて中身を出していき、山となったカードを一気に振り分ける。

元々きれいに整理されていたのだろう、まずジョーカーを排除し、軽くめくって赤と黒の境界を見つけたところで、指を入れて振り分ける。単純な作業であるが、これを一瞬のうちにやってしまうのだから恐ろしい。一気に赤と黒、4セット分のトランプを振り分けられた山が完成する。

次にさっきの勝負に使用したトランプふた山を野谷さんは拾い上げる。まさに、目にも止まらぬとしか表現できない動きで、こちらも赤と黒に振り分けて行く。赤と黒が混ざり合ってるのでいちいち選別しないといけない・・・はずなのだが。

そしてついに『それ』は完成した。なんだろうこれ。見たことないほどの高さにトランプがつみあがっている。

「良いだろう。勝者はいついかなるときも、挑戦を受けなければいけないのだ」

「流石」

もう既に二人の世界を作り上げてしまっているようだ。また「シヤシヤシヤ」と、解説のしようもない勝負が繰り広げられる事が予想されるため、彼らの事は放っておいて山城さんと鬼谷さんの方の輪に入れて貰おう。

山城さんと鬼谷さんはパンフレットを広げて観光する場所を選ん

でいるようだった。

「やっぱさー海だよねー」

「海ですよねー」

やはり思うところと言えば、沖縄〃海だ。青い空に青い海。使い古されたテンプレートの沖縄代名詞。そんなわけでどこの海にいうか。という話題で盛り上がっているようだ・・・が。

「ビーチすげえ多いな」

「だよねだよねー」

「この縮図で沖縄全てのビーチを書くと、文字が潰れてぐちゃぐちゃになりそうですね」

二人が広げているパンフレットには、でかかどと沖縄の地図が書かれていて、代表的なビーチだと思われる名前が書かれている。ここに書かれているだけで20カ所以上ある。それも名前だけしか書かれていないので、どういうビーチなのか良く分からない。トロピカルビーチ、パイナップルビーチ、さんさんビーチ。もうとにかくビーチ。

ちなみに、ちゃんと指定されていないところで泳ぐと、危険な生物に襲われる可能性があるため、絶対にちゃんと整理した所で泳ぐこと。とパンフレットに書かれている。

僕たちは良い子なので勿論ちゃんとしたビーチで泳ぐつもりだ。若干一名無視してどこかに行きそうな人が居るが。

至る所、赤丸だらけで沖縄が発疹でも起こしているように錯覚してしまう・・・と、そこで一つ思いつく。

「タクシーだ」

「え？」

「タクシーの運転手に、沖縄で一番綺麗なビーチはどこですか？つて聞くのは？」

沖縄中を走り回って実際に仕事している、タクシー運転手に綺麗なビーチを聞けば、穴場的な場所を教えてくれるんじゃないだろうか。

「な、なるほど」

「俺たちは5人だから、タクシーで移動は難しいけれどな」

「柵の前に座らせて、後ろに残り皆乗ればいいんじゃないかなー」

確かに、俺は肩幅は小さい方だし、可能ではある・・・が、長時間女の子とくっつくというのは、その、気恥ずかしいものが若干、あります。

「ちょっと狭そうな気がするな」

「だったら、圭の膝の上に卯月を乗せれば？」

「ちょ、な!!」

「あら、羨ましいですね」

にやにやと山城さんがいたずらっ子の顔になる。鬼谷さんも、そんな不敵に笑わないでください。

シャシャシャシャズシャアア！

横で『ソニック』をしていた野谷さんが盛大に手を滑らせる。その間に志貴崎さんが全てのカードを処理し終えたらしい。

「・・・・・・・・ミキ」

顔を真っ赤にした野谷さんが、山城さんを睨む。山城さんは目を反らせてその視線を受けようとしなない。

「・・・勝ってたのに」

「ふふん。どうだか」

恨めしそうにカードを睨む野谷さん。

志貴崎さんは、口では余裕そうな事を言っているが、傍目に見てもかなりの神経を消耗していそうなのがわかる。額の汗の量が半端ない。

「よろしいでしょうか」

「はい？」

と、そこで客室乗務員さんに声をかけられた。

「お話の途中だったので、口を挟むのを遠慮させていただいていたのですが、志貴崎様の指示により、車を手配させていただいております。運転手も、当然おりますゆえ、その者に観光などの案内を指示していただければよろしいかと」

「えっ車!？」

いくら何でも用意がよすぎる。もしかして志貴崎さん、昨日の段階で、既に沖縄行きを自分で勝手に決定して指示を出していたんじゃないか？

意外と策士なのか、それとも自分の欲求に忠実なのか・・・。

「まあ、海などいくらでもある。沖縄を一周しながら綺麗な海を見つけてそこで泳げば良い」

志貴崎さんが汗を拭きながら答える。

「なるほどっ！沖縄一周かぁ」

山城さんはパンフレットの地図を見て、道路の線を指でなぞっている。一周ツアーをシミュレーションしているようだ。

「沖縄は、県全体に観光名所が点在しております。そのまま道を通行いたしますれば、各所に観光地の看板が掲げられている事かと」
「そうなんですか」

鬼谷さんも、パンフレットを覗き込む。女の子二人で道路をたどり、色々想像を膨らませているようだ。

俺もパンフレットを手に取り、沖縄についての前情報でも仕入れておくしよう。こういうことは旅行のワクワク感を煽るのにとっても大事なことだ。

日本という国において、沖縄はなんとも特殊な県となっている。第二次世界大戦を発端とし、200年以上アメリカの軍基地がその土地の約10%も占めている。一時期海上へ軍基地を設立し、本土からの撤退も計画されたが、それは美しい自然を汚す事へと繋がるとして反対に遭い、今も昔と変わらずアメリカ軍基地はそこに根付いている。

亜熱帯の気候に恵まれたため、色々な種類の果物、動物を見る事ができる。「沖縄といえば海」というのが一般的かもしれないが、植物園や、ジャングル、岩石など沖縄特有の観光資源も沢山ある。

「沖縄方言」として認知度の高い「琉球語」と呼ばれる、この地

方独特の言葉があるが、それも残念ながら第二次世界大戦が端を發し、世代間での継承がなされなかったため、完璧な「琉球語」を使える者は今はもうほとんどいない。

現在残るのは「ウチナーヤマトグチ」と言われる、簡単な沖縄方言と標準語を混ぜた物が一般的となっている。簡単にマスターできるため、がんばって覚えて帰ろう。

珊瑚礁の減少や、ヤンバルクイナの絶滅、イリオモテヤマネコの本格的絶滅危機から知られるとおり、今なお沖縄の自然の減少の歯止めはできていない。そのため新たな観光資源の開拓のため、沖縄は日本で唯一「カジノのある県」ともなった。健全なギャンブルを常夏の島では是非楽しんで貰いたい。

こんな感じた。マイナスイメージも挙げたのは、パンフと同時に携帯で色々調べてみたからだ。

「健全なギャンブル」ってなんだよ。とかは置いておいて、所狭しと並べられる青い海の写真から始まり、蛍光色の魚や果物、天をつくような岩石……。どれをとってもまさに『常夏』を全面にアピールしてきている。

「irisさんとかにも見せてあげたいねえ」

山城さんがぼつりとつぶやく。そうか、irisさんは部屋の中にいるから見れないのか。確かに少し残念な気がするなあ。

「……できる」

「はい？」

野谷さんは学生鞆から何かを取り出した。トランプのダイヤをそのまま立体にしたような形。これは……。8面体カメラ？

野谷さんの手に置かれてる8面体カメラはその名の通り、八つの面にカメラを一つずつ搭載した物だ。対座が付いており自立できるようになっている。使い方としては、空中に投げて360度パノラマ写真を撮ったり、防犯カメラとしてよく利用される。

よく見ると頂点に対空間投影プロジェクタが付いているようだ。これだけ小さいのは初めて見た。

野谷さんはオーク机に置いて、それを起動。かすかな駆動音と共にカメラが起動。広範囲認識できる魚眼カメラが、それぞれの死角をカバーし周辺情景を認識、プロジェクタが起動して空中に映像を映し出した。丸い球体……？

「お帰りなさい。皆さん」

このいつもの挨拶はirisさんだ。ということはこれ（彼女？）がirisさんなのか。声は勿論外見を見るのも初めてだ。声は野谷さんの声にちよつと似ている感じで、落ち着いた大人の女性のよな感じがする。

「おー！irisさんだー！」

「ほほう！そんなことができるのか」

「こんな小さなプロジェクタ初めて見ました」

「まあ、お帰りと言われるとちよつと違う気がするが」

「これは、プロジェクタでの接続ですね。と言うことは、皆様がいつも『部屋』を利用する方々なのですね。対面では初めまして。『iris』です。今後ともよろしくどうぞ」

球体なので良く分からないが、お辞儀をしているようだ。皆でirisさんに改めて挨拶と、簡単な自己紹介をする。目的地まではあと20分。そうすればいいよ俺たちは沖縄へと上陸する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7712y/>

彼らの遅すぎる青春

2011年12月1日23時00分発行